

平成廿五年九月一日

研究資料

第14号

Version 0.3

須佐歴史民俗資料蔵

須佐騒動関連史料

「大義御願一件」

須佐御古史研究会

東京部会

目次

目次	1 頁
凡例	2 頁
序文	4 頁
◇ 事件のあらまし	4 頁
◇ 事件の経緯	4 頁
第一段階の嗷訴事件	4 頁
第二段階の嗷訴事件	6 頁
第三段階の「須佐騒動」	8 頁
◇ 萩藩政府の事件処理	9 頁
一 「大義御願一件」	14 頁
◇ 御家来一統大義御願申上候濫觴 第一	14 頁
申上候事	17 頁
申上候事	18 頁
御歎申上候事	22 頁

神文前書之事	27 頁
再促誓約前書之事	39 頁
◇ 非常之御咎事二付御歎之次第 天 第二	47 頁
御歎申上候事	56 頁

◇ 凡例 ◇

一、〈原則〉全体を通して、可能な限り古文書原本に忠実に読解文を表記する。

◇原文が旧漢字の時は、活字がある限り旧漢字で表記する。活字が無いときに限り常用漢字を使用する。

◇異体字は常用漢字を用いる。〈例〉**ノ**(等)、**支**(事)、**迄**(迄)

◇変体仮名は原文通りとする。〈例〉**||**者(は)、幾(き)、茂(も)、与(と)、尔(に)、江(え)、之(の)、而(て)、連(れ)など。

◇助詞も原文通り表記する(例)ヨリ、より、ニテ、二而(二て)、ニて、候得共(候え共)、二付

◇活字が無い合字・省字には常用漢字を用いる。〈例〉より、トモ、トキ、として(メ)、など。

但し、活字があるものは原文の通り。〈例〉廿、本、など
◇繰り返しの表記 〈漢字〉**リ**↓々、〈仮名〉**ヽ** (二字以上) <

一、文字の大きさ

◇助詞等に右寄せの小文字表記は適用しない。全文を同じ大きさの活字で表記する。

◇返り点は使用しない。代わりに難読箇所にはヨミのルビを打つ。

以上はHPに「ヨミ」表記する場合、縦書きを横書表記に変更する場合などに生じる諸問題を回避する為である。

一、誤字、誤記、衍字、あて字など

◇右傍に正字をルビで示し(×カ)とする。但し、明らかな誤字は正字と置き換える。

◇意味不明の場合は(ママ)を付す。
◇あて字 には正字でルビを打つ。

◇重複(衍字)の場合は(衍カ)と注記する。

一、欠字、虫損、その他判読不能箇所

◇欠字は□で表す。字数が確認出来るときは□□で文字数だけで埋める。字数が判らないときは□□で示す。判読可能な欠字は□に推読文字のルビを打ち(×カ)と表記する。

◇判読不能箇所は□ないし□□で示す。

◇虫損破壊で判読できない箇所も同様とし虫損とする。

◇推読箇所は同じく□□で示し、右傍に(…カ)と注記する。

一、抹消部分

◇抹消部分は読解しない（含、見せ消ちや抹消文字の横に〃を付けた場合など）

◇「須佐騷動一件御裁断記録」は「御裁断記録」と略して表記する。

一、氏名・地名など固有名詞の連記には中黒（・）を付け区分する。

一、朱書、後筆、付箋など

◇該当部分を「」で囲み、封紙ウワ書、端裏書、端書、裏書、朱書、異筆、後書、付箋、張紙、刎紙などと注記して表記する。

一、花押・印章など

◇花押が書かれている場所に花押と記し、印章が押されているときは〈印〉で表す。

一、注釈

◇人名、地名、特殊な用語、現代使用されていない用語、特殊な表記などの説明には「注x」を付け頁毎に脚注を付ける。

◇長い注記が必要な場合には、巻末補注を設ける。

◇西暦年数、時刻など簡単な摘要は注釈代わりに適宜ルビを付ける。

◇割り注は原文通りに表記する。

一、出典、参考文献

◇出典は原則として著者と書名を表記し必要に応じて頁数を示す。URLはURLを表記する。

◇参考文献は巻末の一覧表に詳細を示す。

◇序文◇

須佐騒動に関しては「須佐騒動一件御裁断記録」（山口文書館蔵 毛利文庫 類9諸 省番483、以下「御裁断記録」と称す）と題する萩藩の裁判記録が残されていますが、今回読む「大義御願一件」は騒動を起こした益田家中の侍・中間の側が書き残した記録です。

この文書には事件の発端から、萩藩が事件糾明に乗り出し、松野文右衛門（代官）、重見勇（御目付）、沖三左衛門（物頭）、岡又十郎（同）などを須佐に派遣して事件を收拾する所までが記されています。「須佐騒動一件御裁断記録」と併せて読めば事件の経緯がよく分かります。須佐郷土史研究会 東京部会で「大義御願一件」を輪読するに当たり、事件の経過を要約すると次の通りです。

一、事件のあらまし

享和二年（1802）七月十二日、須佐益田家の侍・中間約三百人が益田本家土居前に詰め掛け「須佐騒動」を起しました。

同七月十八日、益田家を代表して末家益田隼人が萩城に罷り出て、

萩本藩に対して家中の取鎮めと騒動を起こしたものの達の吟味を受けたいと申し出ました。

これを受けて本藩政府は七月廿三日重見勇（御目付）、沖三左衛門（物頭）、岡又十郎（同）、松野文右衛門（代官）を須佐に急派し急場を取鎮めました。

以下、この経過を少し詳しく要約してみます。

二、事件の経緯

◇第一段階の嗽訴事件

騒ぎの発端は須佐騒動の日より二年前の寛政十二年庚申（1800）十一月に遡ります。徒党を組み誓約した者達が「主家所帯 累年難渋にて取直しの目途もこれなく、已に危急の期にも至る可に付き」、また「当役の者勤方宜しからず、執行非道の筋これあり候故、過所書（諫書）を以て」嗽訴し増野舎人、俣賀次郎右衛門の二人の罷免を要求し、後役として宅野太郎左衛門（職座）、石津伝右衛門（用人）、大谷与三右衛門（用人）ほか小原権六、小国彦七らを推挙しました。益田家はやむなくこれを受け入れ、翌寛政十三（1801）年一月廿二日宅野太郎左衛門（職座）、石津伝右衛門（用人）、大谷与三右衛門（用人）を任命し、一先騒ぎを収めました。

この騒ぎを更に遡ること約四半世紀、萩藩の財政は安永七（1778）年の日光手伝い普請と、同年から三年間続いた天災による不作によつ

て不振に陥り、安永七年から天明七年までの十ヶ年間儉約令が出され半知の馳走を命じられました。天明三(1783)年、萩藩の当職であった益田就祥(なりよし、又兵衛)は萩藩の財政立直しを命じられました。種々尽力しましたが万策尽きた就祥は最後の策として撫育局の物成を数年間本勘に一任して欲しいと提案し、藩主毛利治親の逆鱗に触れ、当職を罷免せられて三十日の逼塞と隠居を命じられました。部下の下村弥三右衛門政武(所帯方)と福井源右衛門真相(所帯方)も五十日の逼塞、能美吉右衛門以成(当職手許役)は八十日の逼塞と知行十分の一減石、隠居を命じられました。これは萩藩財政史上の有名な事件として知られています。

これによって、翌天明四(1784)年二月十八日益田就祥は隠居。益田就恭(なりやす 安房、丹後)が十九才で益田家の家督を継ぎました。

処が益田家の財政も破綻状態にあり、天明五年(1785)から寛政元年(1789)の五年間儉約令が出され、中の三年(天明六、八年)は大小身とも「一つ成」を命じられました。江戸時代は「四公六民」によって知行のうち四分(四ツ成り)が武士の所得とされた時代です。それが「半知」で「一つ成」となり、更にまたその半分の「半知一徳成」という苛酷の極みとも言うべき生活を強いられた訳です。これでは武士の間に不満が募るのは当然の事です。特に、下級武士ほど家計に大きな打撃を受けました。

益田就恭は寛政二(1790)年六月十五日、萩藩留守居役に就任しましたが、十一月廿九日加判宍戸美濃、当職毛利内匠、加判毛利外記、

益田安房、佐世仁藏、国司與三兵衛等勤務方言上により処罰され、英雲公(毛利重就しげたか)に対し頗る公意を悩ましたとの理由により差扣を申渡されました。

寛政九(1797)年二月一日益田就恭は加判を辞職。当時、益田家中は「重き仕組相付 家来中配知 且勤方之趣是又詮議被申付 儉約相立候」とあり、寛政五(1793)〜九(1797)年の間再び五年間の儉約令が出され、寛政六(1794)〜八(1796)年は「一つ成」を命令しました。そして更に寛政九(1797)年から享和元(1801)年の五年間の儉約令が出され寛政十(1798)〜十二(1800)年の三年は、再び「一つ成」を命令しました(「大義御願一件」1〜2頁、同10頁)。しかし、度々の儉約令にも拘わらず、益田家の財政は一向に改善しませんでした。

就恭には子供が無く、妹の桑子を養女とし寛政十二庚申(1800)年五月廿九日、九才の益田房清を養子に迎えました。しかし二人は結婚することなく文化五年に桑子は亡くなりました。房清はその後二人の妻を娶りましたが、女子一人を設けたのみで、その一人娘の婿として右田毛利家から元宣を迎えました。就恭も房清も健康な男性ではなかった様に思えます。御裁断記録」94頁には「元来丹後病身二而」と記されています。寛政十二年十二月廿三日益田就恭は隠居し幼い房清が家督を継ぎました。(注)

「御裁断記録」には「申年(寛政十二年) 御家来一統二大義御願申上候処 如願被遂御免難有仕合奉存候」とあり、今回輪読する「大義御願一件」の事が記されています。しかし、家来の立場から見ると家臣が幾ら努力しても「主家所帯 累年難渋にて取直しの目途もこれな

く、已に危急の期にも至る可に付き」という状態になっていました。財政逼迫の最中に房清縁組などの費用も嵩み、財政は改善どころか却って新借も増えて愈々逼迫の度を強めていったものと思われれます。

第一段階の嗽訴事件はこうした状況の中で起りました。家来中から出された過所書（諫書）の自身は「大義御願一件」の7頁以下の「申上候事」、9頁以下の大組・中組・四組連名の別紙「申上候事」并に同16頁以下大組が差出した「御歎申上候事」と27頁以下の「神文前書之事」に詳述されています。日付はいずれも寛政十二年庚申十一月五日でした。その要旨は、

◇増野舎人、俣賀次郎右衛門の二人は罷免し責任を取らせよ

◇後役として宅野太郎左衛門（職座）、石津伝右衛門（用人）、大谷与

三右衛門（用人）ほか小原権六、小国彦七らを推挙する

◇「天明六年之御法 并追々被差出候御作法封込ニ被仰付 諸事大且

那樣御代之通ニ被仰付候様」とあり、つまり天明六年に始まった

「二つ成」はもとより、諸事を封じ込め（棚上げにして）天明四年

就恭襲封以前の状態に戻して欲しい。

という内容でした。

【注】益田丹後就恭が隠居した時期について

「須佐町誌」155頁、「益田氏と須佐」118頁には享和三年（1803）六月八日と記されている。処が「毛利十一代」第9巻72頁の寛政十二年（1800）十二月廿三日の項に「益田丹後隠居 又兵衛（就祥）曩ニ故アリ隠居屏居セシニ今回丹後ヨリ請願ニヨリ順隠居ノ形ニテ謁見ヲ許サル」とある。何れが正しいのか。

「御裁断記録」63頁には「本家丹後殿 近年病身隠居 又兵衛殿老羸（ろ）うるい、年老いて衰えること）旁二付 家政之義も末家衆并 家来え被

担任二付 万事沙汰筋之義も惣家来申請心 自然と違却ニ相成 不平不
相止ノ様ニ相見候」と記されている。就恭の隠居の時期は「毛利十一代」
の記述「寛政十二年」が正しいと考える。

◇第二段階の嗽訴事件

寛政十三年（1801）は二月改元となり享和元年となりました。

第二段階の享和辛酉元年の益田家中のもめ事では、新任職座の宅野太郎左衛門はじめ益田家執行部の指導力が問われる事になりました。

益田家としては第一段階の嗽訴を解決するため、一先重職二人を更迭しました。しかし、この人事は下からの圧力に抗しきれず行ったもので、益田家としての詮議無しでは済まされない。また、非法の仕方についても戒令無しに済ませることは出来ないと言うことになりました。

そこで享和元年正月廿二日、先ず黒印状を差し下げ、須佐職座宅野太郎左衛門、用人石津伝右衛門、大谷与三右衛門へ取計を申し付けました。徒党の解散命令です。

この黒印状は「右 御黒印之次第ハ御内密之儀 一向他言不仕用 御目附列座ニ而申聞せ有之候 尚為御安心ニ而御座候間 神文を以御請申上候様と太郎左衛門ヨリ相授ケ候付 銘々血判相調候」と「大義御願一件」（63頁）にあり、その中身は分かりません。しかし「御裁断記録」には「種々末家中申合 家来中え何篇熟和仕 兼而誓約等封

込二仕 徒党之躰 不心得無之様 旁重く入割 父子申聞せ 猶末
家中よりも入割 申説候處 一統平和仕 誓約等も無之以前二仕
一筋二忠節ヲ凝シ 可遂奉公段 家来中末々ニ至迄 謹而人別誓紙
ヲ以請差出申候」と記されているのでこの部分が黒印状の内容で
しよう。つまり「一統平和仕り 誓約等もこれなき以前に仕り、一
筋に忠節を凝し 奉公を遂ぐべき段、家来中末々に至る迄謹んで
人別誓紙を以て請け差し出すべし」という内容であつたと思われま
す。

太郎左衛門は心服の者へは一人づつ大小身とも筆並みに拘わらず黒
印状を拝見させましたが、類役小原権六、小国彦七（萩頭取）へは
一向申合をしなかつたとされています。これはどうやら丹後父子、
末家中申合の上の差図であつたらしい（「御裁断記録」29頁）。黒印状
は「此上も無き号令」。従つて家老中をはじめ三職の者の詮議の上で
なければ取捌が出来ないはず。その職にありながら権六、彦七を外
して出された黒印状でしたから、家法相立たず、「調略事」となつて
家中熟和せず（同59頁）、上下の猜疑心を煽る結果となりました（同
30頁）。太郎左衛門としては後難は知りつつも、主人の命令は逃れ難
く、党を切り崩すために採つた手段であつたと言います（同59頁）。

太郎左衛門は主人の黒印状について何故権六、彦七と協議しなかつ
たのか。「所帯方（益田家財政）の儀も須佐の方は 積り（予算）の
通りに参り、萩屋舗の方は余分入増しに相成り候故、小原・小国共
え段々存寄共申し候の由」とあります（「御裁断記録」45頁）。つまり、
益田家の財政建て直しの為には萩屋舗の改革が必要であり、太郎左
衛門から萩頭取の兩人へ色々と申入をしていたようですが「其申分

もかねての性質 老人の逃□ あれこれ気に逆ひ候様なる儀も申し
候かと相考えられ候」（同45頁）とある通り、話し合いが円滑に行か
ず、須佐と萩屋舗とは意思疎通していかなかったようです。尤も、宅
野太郎左衛門については一党からは更迭を要求されていましたが、
四組之頭中からは「差し替えられ候ては海辺両組（瀬尻、須佐地）残
る銘々も何かと申し出間敷き儀にてもこれなく段申し出もこれあり」
（黙っていない）と支持されていたので、家中は親宅野派（四組頭と
主として須佐地組、瀬尻組）と反宅野派（萩屋舗と主として市丸組、
宇谷組）に別れていたようです。

かくて、徒党誓約の者共の集會が止められない状態となつたので、
三月廿六日、丹後父子、末家中は宅野太郎左衛門を呼び出して状況
を聞いた上で、椋小左衛門 窪田彦左衛門ら「不心得の者六名」を
処罰すべしとの評議となり、目付役萩野忠左衛門も呼出の上処理案
を提出するように命令しました。処が「諫書差出候儀を不敬と存ぜ
られ候」、「君臣共宜敷き為筋と氣付き申し出候処、忠を以て不忠と
せられ候」と過当の咎めだと申し立て、松原勘五郎／栗山藤蔵／大
谷伊八／小国融蔵／城一軍司／多根茂右衛門／増野多中／金子唯平
／仲井半蔵／松原源五左衛門／吉賀兵之進／大草甚右衛門の十二名
が連判で六名の処罰取り下げを要求し、駄目なら出萩し、庭上切腹
すると噉訴しました。そして自らが推挙した太郎左衛門の罷免を要
求しました。

なお、末家益田隼人はこの頃から益田本家の騒動取鎮の為に動き始
めています。「拾貳人萩出訴の砌より、隼人取治め受け相いと相見
え、拾貳人之者共を智巧を以て押し伏せ申すべく 理詰めに相成り

候処、拾式人の者共 志は尤に候え共 致し方宜しからぬ故 その仕方に引懸け、追い詰められ候故、抛ん所なく進退相迫り庭上切腹願ひ申し出ずべしとの評儀に相成り候様に相見え候事」(「御裁断記録」60頁)と記されています。

【注】益田隼人Ⅱ就雄、初兼雄、富五郎、隼人。萩藩寄組益田家。始祖は益田玄蕃頭元祥四男就之。奥阿武木与、小郡小侯、一〇八六石。文政十(1827)丁亥四月十二日歿。七十二歳。従つて、事件当時は47歳だった事になる。

◇第三段階の「須佐騒動」

享和二年(1802)四月廿日、家中取鎮めのために末家益田隼人が萩から須佐に来て本格的に采配を揮う事になりました。

隼人は須佐に着任した翌日、四月廿一日突然「四組の内、下も兩組(須佐地、瀬尻)侍・中間残らず、山手兩組(市丸、宇谷)の内にて本尾官次組(市丸組)侍兩人え 何の勤功もないのに丹後殿父子ヨリ心得これあり由にて夫々賞美申し付け」(「御裁断記録」33頁)ました。折柄、家中一統困窮・行詰り、必死になって居た時でしたから、これを不当として家中(主として市丸・宇谷の奥兩組と思われる)の不滿が爆発しました。狼狽した隼人は家中折合のために「以後過当の咎(・故無き賞美)等これあるまじき段 隼人自筆を以て書き渡し判形まで相調え小原権六・大谷伊八・小国彦七へ宛相渡し候に付、伊八より惣中え申し合せ見候えども 何共恐多く頂戴相成り難し。」この書付え請書して差出す件は不成功に終わりました。結果的に隼人が「不穿鑿」を認め、「後悔」が表に現れた文書を出す失態を演じ

た丈に終わったので、「下にはいよいよ上を侮り不遜増長」(「御裁断記録」34頁)と言うことになりました。

賞美に預かった奥兩組(市丸、宇谷)は宅野太郎左衛門を支持し、萩屋鋪と海辺兩組(須佐地、瀬尻)は反太郎左衛門でしたから、隼人は徒党を分断するために奥兩組と海辺兩組との対立を利用しようとしたのか、それとも宅野太郎座右衛門の言葉を利用して軽はずみに人気取りのために賞美を発表したのか。これは謎です。

この他、益田隼人が須佐で最初にやったことは、太郎左衛門と同様に徒党誓約はご禁制であるから、徒党を解散して誓約以前に戻せという事でした。これに対して、徒党側は「申の冬誓約寛政十二冬の儀は私事にてもこれなく、主家興隆の為筋と考え奉り候」と忠誠を遂げるためだからそのままにし堅持し、その後追々誓約に加わった者は誓約以前に戻すと主張しました。そして「黒印差し出され候以後は誓約無き已前と落着致し居候由申上候」と言うことになりましたが、故無き賞美問題も絡んで仲々徒党を解散させる事は出来ず、騒動を上手く收拾することが出来ませんでした。

其後、窪田彦右衛門宥免などで家中鎮撫に努めましたが、それでも家中の騒ぎは収まりません。隼人が益田家中のゴタゴタを収め切れない最中、七月金山長左衛門一件が起りました。

「金山長左衛門役中不審筋の儀に付究め申し付けられ、数ヶ条調へに相成り懸り候内、岩本弥五郎名前書落シ候段ばかり誤候趣にて、其の余の儀は夫々申し開き候様子にて、何分未だ半途の内 家中騒ぎ

立て候趣に付き、究め延引に相成り候（「御裁断記録」36頁）」と記されている様に、「金山長左衛門役中不審」というのは強いて私欲邪曲の不調法とも相聞えず、長左衛門答の通り庵相（そそう）とも申され候程の儀にて、其の上何分未だ口書べり等も相成らず、事至つて半途の内、右一ヶ条の趣を以て本尾官次より組内え落罪の段申し遣し候由。現在七月六日、長左衛門宿元出立の節、三浦太郎右衛門参り候て親類兩人え申し候は 長左衛門儀、何ぞ申訳これなく、過失これあり御咎め仰付られ候儀は十口これなく候えども、萬一無筋の御咎めとも仰付られ候時は 長左衛門儀も御請け仕るまじく、組中に於いても其節は御歎き申し上げべき所存に罷居り候」と記されています。簡単に言えば事務処理の間違い程度の本来は些末な事件で、且つ、何が問題なのかさえまだ曖昧であった（「御裁断記録」37頁）にも係わらず、本尾官次が組内へ「落罪」と通達する不手際を犯した為に又々「不当の咎め」騒ぎとなった事件です。

ところが、隼人はこの騒ぎを「一揆蜂起とも仕り候様に申し成し候」故、丹後殿には実事と存じられ、申し出に落着相成り候」（「御裁断記録」61頁）と事態は意外な方向へ進み始めました。隼人の考えは「反逆一揆などの様に申し立て 申し出候はば其響きにて家中静り申すべくとの考えにて上達に及び候儀と相見候」（「御裁断記録」79頁）」と云うことであつたらしいが、実際は些末な事件を「一揆だ」と大騒ぎにしてみましたのです。その結果、「享和二壬戌年（1802）七月十二日侍・中間三百人が須佐益田本家土居前に詰掛け遂に「須佐騒動」を起こす結果となりました。

享和二年四月「取鎮として罷越の一件、前後ともに隼人抽て取り計

い候段相見え候（「御裁断記録」63頁）」とあり、また、「全く隼人自分事に引受け、入りはまり取扱い候様に相見え候」（「御裁断記録」64頁）」と評されています。また、益田家中の騒動について家来の中には隼人に同意の者もあり、それらの虚説・風評などを採り入れて「一揆蜂起とも仕り候様に申し成し候故、丹後殿には実事と存じられ申し出に落着相成り候」とあり、これらの事から「実の処は丹後殿作廻は残らず隼人作廻の義と相見え候」と考えられ、裁判記録ではこの間の責任は全て隼人の「独り相撲」、彼の統率力不足に帰せられています。

益田隼人の采配が如何に拙かったか。事件裁決の際「隼人儀本家へ出入り仕らず候へば 忽ち家中平均に相成り申すべく哉と相見え候」とまで云われています。（「御裁断記録」65頁）

驚いた益田隼人は享和二年（1802）七月十八日、萩城へ罷出て、須佐騒動一件について本藩の吟味を受けたいと申出ました。

三、萩藩政府の事件処理

益田丹後（就恭）に代つて益田家を代表した益田隼人が萩城に罷り出て、毛利若狭（当職）、毛利伊賀（当役）へ相對に及び、萩本藩に對して家中の取鎮と騒動を起こした者達の吟味を受けたいと申し出ました。

これを受けて、萩藩では七月廿三日重見勇（御目付）、沖三左衛門（物頭）、岡又十郎（同）、松野文右衛門（代官）を須佐に急派し急場を取鎮

めました。

その調査結果が「(享和二年)須佐騒動一件御裁断記録」です。筆者は毛利伊賀頼親(江戸当役)となっています。彼は遠近方の最高責任者でもあった様です。中身は現代風に云えば、検察側の調書と求刑案で、それに最終の判決が付属しています。

享和三癸亥(1803)年二月八日、本件に関する本藩の処分が決定し、次のように申渡しがありません。

◇益田丹後(就恭) お叱り、蟄居十日(四月八日沙汰)

◇家老益田三郎左衛門 益田次郎三郎 益田登人 増野舎人 益田勘右衛門 五十日追込仰せ付らる 御免之節 重く御叱り

【注】追込＝閉門

◇益田隼人 御役差し替えらる。改めて遠慮仰せ付らる。日数廿日相立ち御免し。向後本家の政事取扱い申すまじく

◇家来十三名益田清之介外へお預け(文化三1806年まで三ヶ年)。(二月十七日沙汰)

▼堅田宇右衛門へお預け＝城一軍司／増野多中／吉賀兵之進

▼益田清之助へお預け＝大谷伊八／松原勘五郎／栗山藤蔵

▼繁沢図書へお預け＝小国融蔵／波田太郎右衛門

▼児玉百合八郎へお預け＝金子順平／仲井半蔵／松原源五左衛門

▼益田市正へお預け＝宅野太郎左衛門

◇その他惣家来中 別心無きに於いては差し免さるべく候 向後一和せしむべくや否の事

報告書全体を通じて、萩藩による事件の受け止め方は極めて穏便であつたと言えます。

一 益田丹後殿 近年病身隠居、又兵衛殿老羸旁に付き、家政の義も末家衆ならびに家来え打任せに付き、万事沙汰筋の義も惣家来中請心 自然と違却二相成り、不平相止まずの様に相見へ候(「御裁断記録」63頁)

一 「主人幼少にて家老共権を争ひ候か、又は主家奪取すべく逆意ともこれあり候か、何ぞ悪心より起り誓約仕り候を徒党とも申べく候へども、此度の根元 左様の筋とも相見えず」(「御裁断記録」58頁)

一 「兎角一揆などの様に相聞え候に付 止むを得られず事 物頭とも差し出され、其の内松野文右衛門え取鎮めい仰付けられ候処、程よく落着仕り候次第。嗽訴と申所は通れず候へ共、反逆の意味には御座なく候」

一 騒動の動機については丹後所帯累年差間に付き、嚴重の仕組(「一つ成り」の儉約令) 申し付け、家来中もいや増し困窮に及んだ。しかし、「家中不心得の儀とは申し乍ら、(益田家の財政が)困窮行詰候えば 上下必死に差向い候故相企て候儀」(「御裁断記録」58頁)

一 「家中の者の志願はかくのごとく多人数催し候はば主人の存入には自然(万一) 上え(本藩) 発し候ては相済まずと気付きこれあり、家中の者の申分を用いられる儀も之あるべく哉と存じ付き催したる儀と相見え候」。誓約に関しては、「誓約の義も主家興隆を目途に付、三ヶ年の間と申す誓約の段申出候事」(「御裁断記録」59

頁)。「主人におゐては一筋に下の申し分は慮外と存じ候へ共、全
躰上下相隔り、事情通じ難き故、実意解し難く申し結ひに及び候」
〔御裁断記録〕78頁)

一 宅野太郎左衛門は最初一統の者が諫書提出した際、一統の者へ
是非を申し聞かせて取り鎮めるべき処を、主家の為とは申し乍ら
一統させて仕舞った。其後、主人や隼人へは心得違いの段を謝っ
ている。それならば、権六や彦七と協力して一統の者を何故取り
鎮めなかったのか。一統の者へは心底を隠して内密の黒印状を
使ったり、過当の咎めで信を失うなど、表裏のある行動で家中、
傍輩の信義を失った。徳義がない。それが、引いては主人の迷惑
に立ち至った事は言語道断である。〔御裁断記録〕59頁以下)

一 益田隼人は享和元年三月廿六日の嗽訴事件で、十二名の者が萩
出訴の頃から益田家騒動取鎮に関与している。この時も理屈で追
詰めたので庭上切腹願を申出るべしとの評儀となつてしまつ
た。

享和二年四月、須佐へ取鎮として着任後も、故無き賞美、過当な
る咎めなど誤りを犯し、君臣の隔意を増幅させた。

そしてさして重大事件でもなかった長左衛門一件を「一揆蜂起と
も仕り候」などと大騒ぎにしまし、上ヲ申しぬき御厄害を
引起シ候」〔御裁断記録〕60頁以下)

一 このように騒動は「最前の聞へと家中の志願を主人の所存と末
家の取捌と各々違却これありより起り候」

一 萩へ嗽訴に及んだ十二名を除いて、その他の家来一統の者につ
いては、「主家の為相歎候より存じ立て候儀とは申しながら、徒
党強訴之躰たらく、天下御制禁 且つ 御国法にも相支り候の義
竟には主人の不為にも成行き候段、甚だ以て不心得の至りに候

事」〔御裁断記録〕76頁)との批判は避けられなかったが、「発頭
人など、申す事これなく 何某こそ大悪人と申す程の儀も相見え
ず 只無益の争論を起し候と申す物にて、かくの如き御究の上は
おのつから結党の所遁れ難く候。然れども反逆徒党とは大いに意
味違い候事に付、一統の者御宥免の御沙汰を以て先は平穩の御裁
許然るべし哉」〔御裁断記録〕79頁)

一般的には「御家騒動」とは江戸時代の大名家に生じた騒動の事を
差します。「御家騒動」に詳しい福田千鶴氏(「御家騒動」中公新書)
によると、元禄以前は幕府が御家騒動の裁定に深く関与したが、元
禄以後は関与しなくなりました。

騒動が幕府に露見して御家断絶になることを避けるために、忠臣が
身命をなげうって悪臣を排除し、騒動の禍根を未然に断つて御家の
危機を救うという勧善懲悪的なストーリーで語られる固定観念は文
芸作品の世界丈とは限りません。歴史研究でも大名を改易する絶好
の理由として幕府が御家騒動を利用したとされ、少なからぬ影響を
与えています。しかし実際には改易にならなかった事例が圧倒的に
多いのです(鍋島騒動、黒田騒動、対馬の柳川一件、伊達騒動など)。
近世前期に生じた御家騒動では幕府権力の強い介入がありました。が、
幕府が積極的に介入したというよりは、むしろ大名・家中の側から
幕府に積極的に訴訟し、幕府の介入を要請しています。騒動が幕府
に露見すれば改易につながるのであれば、大名や家臣達がそのよう
な危ない橋を渡ろうとはしないはず。須佐騒動一件で益田家
が萩本藩の裁決に頼ったのと相通じる処があります。

在地の支配者であり根性の武士団であった中世武士団は「家筋」よりも「器用・器量」を重視しました。いわば能力主義社会でした。しかし、近世武士団は藤田東湖が「鉢植えの武士」と評した通り、「家中」「御家」の成立を基にして、その御家の従臣であった処に特徴があります。近世武士の奉公の対象は主君（大名）よりもその帰属集団である御家に変化しました。大名の御家の存続が従臣の家の存続とイコールになると、御家は大名の自由意志によって運営する「家」ではなくなり、従者達がそれぞれの分限・階級に従って帰属する絶対的統一体としての運命共同体たる「御家」となります。従臣が忠義を盡す対象も主君個人ではなく、御家という共同体に対してのものとなったので、近世中期以降、大名「御家」を守るための騒動が典型的な「御家騒動」となりました。

寛永末年までの御家騒動八〇件のうち、家中騒動を理由に改易となったのは十八件で、分知の二件を加えると四分の一にあたります。しかし、十萬石を越える国持クラスの外様大名で改易になったのは慶長期の堀、元和期の最上、寛永期の生駒の三家のみであり、実際には殆どが徳川一門大名や譜代大名が家中騒動を口実として改易されたものです。

幕府はそもそも家中騒動を「私議」あるいは「小事」とし、本来的に「公儀」が取り扱う筋の「大事」ではないと考えていました。特に、幕藩関係が安定化し始める元和期以降は、幕府の側から騒動に積極的に介入し、大名統制に利用する事はありません。騒動に介入する場合は、あくまでもその騒動が幕藩公儀の秩序を乱すものと見

なされた場合でした。

幕府が家中騒動に関与するのは多くの場合、騒動の当事者達からの強い要請によるものでした。その場合でも、まず老中内意段階で家中騒動の收拾が図られ、それでも騒動が收拾しない場合には將軍の権威が持ち出され、「公儀」の立場から判定が下されました。幕府の方針は、大名・家中、および大名一家一門の統合点・妥協点の承認による幕藩公儀秩序の安定化を求め、妥協点が見出せない場合には大名家を分知・転封・改易に処し、幕藩公儀秩序の安定化を目指しました。この幕府方針故に大名・家中・一門や大名家を指南する立場にある取次役（老中・上級旗本）は幕府による家中騒動の調停を積極的に求めたのです。

寛永期の後半になって、この幕府の方針に変化が見られます。まず主従制を絶対化する方針を打ち出した事です。寛永十二年（1635）「武家諸法度」を改正して第十三条「国主は政務の器用を撰ぶべきこと」を削除しました。これは、戦国期の器量重視の方針から伝統的家筋を尊重する方針への転換でした。これを契機として本源的にパーソナルな関係で器量を中核的な原理としていた従来の主従関係が崩れて行きます。そして、新しい大名統制の原理は次第に主君の家と家臣の家を固定化し、大名の「御家」を家中にとって絶対的な帰属体に変える事によって、主従関係を固定化し、幕藩制の安定化・伝統化が図られるようになりました。

以後、「公儀」に対する罪を犯した者を厳罰に処するという従来の方針に加えて、君臣の礼秩序を乱し、主従の関係を蔑ろにする者に対しては、主人は改易、従者は死罪以下の重罪に処するということ

が原則となって行きます。延宝九年に決着した越後騒動（越後高田松平家）がその象徴的な事件でしたが、以後家中騒動の当事者達が幕府に騒動の調停を求めて訴訟をすることは稀になりました。そして、これまでのように幕府に訴えて訴訟をするのではなく、大名家の親族による調停機能に紛争解決を委ねるように変化します。分家で生じた騒動は親族集団を主導する本家が紛争解決に大きな役割を果たすようになりました。逆に、本家で騒動が起きた場合には本家と縁戚関係にある大名家が重要な調停役を果たすようになりました。

話を元に戻すと、萩藩はこの須佐騒動を「主家の為相歎候より存じ立て候儀とは申しながら、徒党強訴之躰たらく、天下御制禁 且つ御国法にも相支り候の義 竟には主人の不為にも成行き候段、甚だ以て不心得の至りに候事」としていますが、事件全体は益田家財政立直しから起こった問題であり、家老間の主導権争いでもなく、主家篡奪でもない。其外悪心があつて徒党を組んだ訳でもない。よつて幕府や萩藩に対する「反逆」ではないと言う判定が基本となっています。

「徒党強訴は天下御制禁、且つ御国法にも相支り候」としながらも、穏便な裁決となったのは、やはり萩藩が派遣した重見勇（御目付）、沖三左衛門（物頭）、岡又十郎（同）、松野文右衛門（代官）らの指導に益田家中が素直に従ったからでしょう。本藩の指導にも逆らっていたら、事件は更に違った結果になっていたに相違ありません。

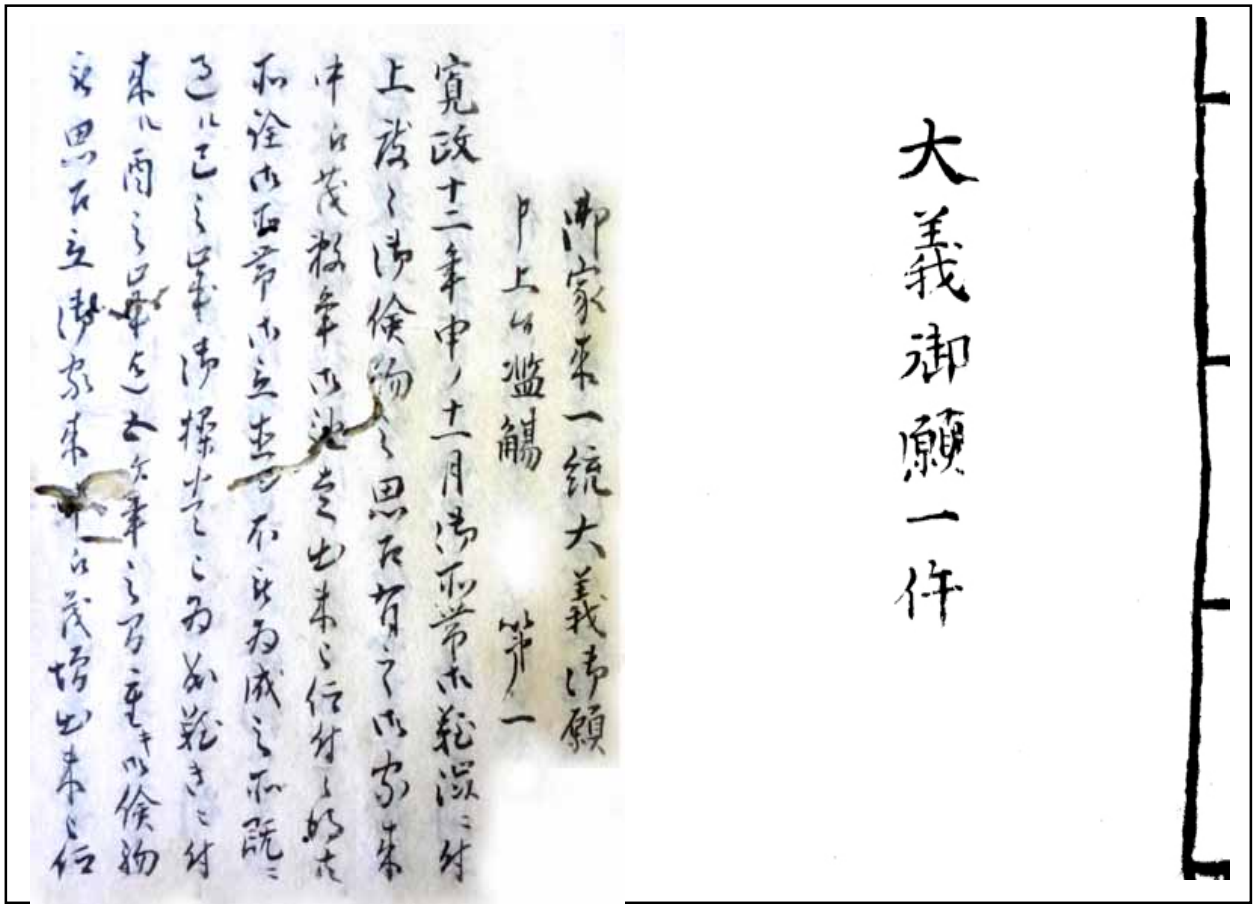
なお、本藩役人の目から見た益田家陪臣達の人物評が記されていますが、その中にあう「信忠方」「義土方」の分類が注目されます（「御

裁断記録」46頁）。本尾官次（市丸）、栗山五郎左衛門、増野庄八（宇谷）、増野十左衛門の四組頭は「信忠方」と書かれています。幕末の須佐内証事件当時は正義派と俗論党に別れて対立しましたが、須佐騒動では改革を求めて立ち上がった徒党の方は「義土方」とされたのでしょうか。この点は「御裁断記録」の記述では明確ではありません。

萩藩では須佐騒動の処理を遠近方が担当しました。「もりのしげり」によると遠近方とは「初め御手子役と称し、又役目遠近差引方とも称す。国元留守居家老所管たり。遠近方とは江戸その他へ公務出張の路程の遠近、要務の軽重に応じて公平に諸役を調査分賦するを専務とするをもつて名く。後世漸く権力加わり、諸令細大となく此の役を経由し、且つ諸士以上犯罪の糾問終わりたるものは遠近方これを裁決し、案を具して藩主の聴允を仰ぐ。後年当職の所管となる。文久三年四月江戸方右筆地方右筆と合併して政務座役という。後旧に復し明治に至りて之を廃す」と解説されて居ます。

以上

大義御願一件



山口文書館蔵 松本・D・408

大義御願一件

寛政十二年申ノ十一月

【表紙】

大義御願一件

【1頁】

御家来一統大義御願 申上候濫觴^{注1} 第一

寛政十二年申ノ十一月 御所帯御難^{益田家財政}注二付
 上度々御俵約之思召有之^{かみ おほしめし} 御家来
 中江茂数年御馳走^{しゅつたい}注二 出来被仰付候得共
 所詮御所帯御立直シ不被^{なからせられず}為成之所 既二
 過ル^{寛政九、一〇、二〇}巳之歳 御繰巻^{なりせられ}注三 被^{なからせられ}為成難^{なりせられ}キ二付
 来ル^{享和元、二〇〇三}西之歳迄五ヶ年之間 重^{おほしめしたてられ}キ御俵約
 被思召立 御家来中江茂増出米^{ましたしまい}注四 被仰

*1 濫觴(らんしょう) = ものの始まり。物事の起源。觴(さかずき)を濫(うか)べるほどの、又は觴に濫(あふれ)るほどの小さな流れ。
 *2 御馳走 = 馳走米のこと。藩財政の窮乏に当たり、本来の貢租以外に徴収した税米。馳走は主君に対して周旋奔走して忠勤を尽くす意味。
 *3 繰巻(くりまき) = やりくりする。
 *4 出米(だしまい) = 馳走米と共に上納する税米。例えば旅役出米は藩士一般が旅役負担の引き当てとして、知行高に応じて馳走米と共に平素上納した。一種の目的税。

付御家来一統大小者共二中年三年注5八
 惣一部成注6之御馳走被仰付 御家来中
 至而及困窮就中小身通之儀八別而
 堪艱難兼罷居候 且又御俸約御年限
 之儀者 如何程難渋之者卜御座候而も
 一向御救不被仰付候間 他所奉公勝手
 次第被差免卜之御事二候得共 石州以
 来譜代之御家来
 御先祖様已来之御恩沢難忘 未々

別而困窮之者王離散不仕凌艱難且々
 隨身之御奉公 奉遂其節候 然ル處
 来西ノ歳八御俸約明之御年限二候へ共
 御仕組注7之験無御座 却而歳増御借銀
 山高二相成候 尤モ
 上御病身二而 無據御造佐入ノ廬王被為
 在候へ共 御家風一躰廢類仕 諸事
 節儉之道二相叶 不申候故 御仕与筋難
 相立 既二御家之御危急不遠様 奉

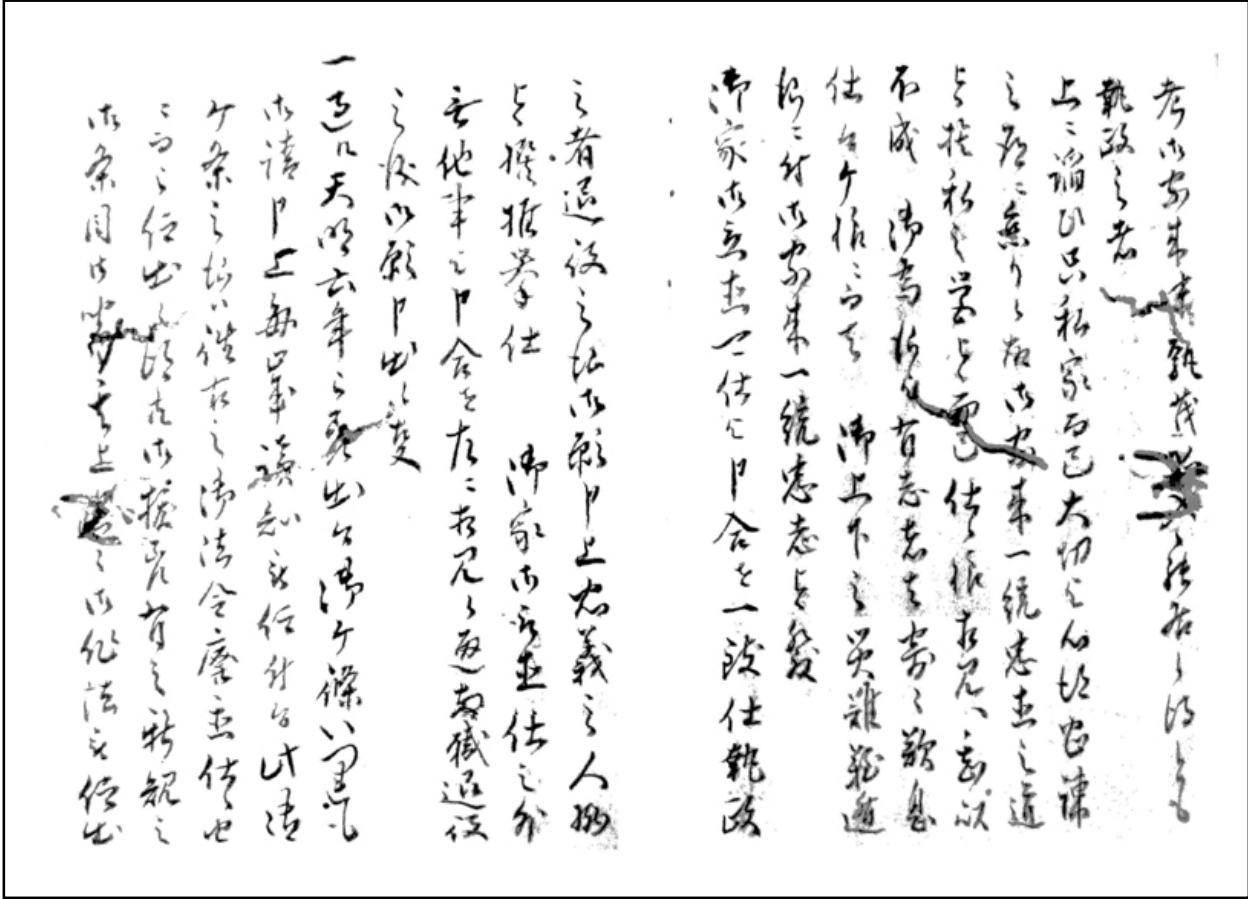
【2頁】

付 御家来一統大小者共二中年三年注5八
 惣一部成注6之御馳走被仰付 御家来中
 至而及困窮就中小身通之儀八別而
 堪艱難兼罷居候 且又 御俸約御年限
 之儀者 如何程難渋之者卜御座候而も
 一向御救不被仰付候間 他所奉公勝手
 次第被差免卜之御事二候得共 石州以
 来譜代之御家来
 御先祖様已来之御恩沢難忘 未々

【3頁】

別而困窮之者王離散不仕 凌艱難 且々
 隨身之御奉公 奉遂其節候 然ル處
 来西ノ歳八御俸約明之御年限二候へ共
 御仕組注7之験無御座 却而歳増御借銀
 山高二相成候 尤モ
 上御病身二而 無據御造佐入ノ廬王被為
 在候へ共 御家風一躰廢類仕 諸事
 節儉之道二相叶 不申候故 御仕与筋難
 相立 既二御家之御危急不遠様 奉

*5 中年三年 = 寛政9年から享和元年迄の五年間の内、中の三年、即ち寛政10～12年(1798～1800)のこと。寛政13年(1801)2月改元、享和元年となる。
 *6 一部成 = 武士に対する課税は「四公六民」が天下の通法でした。100石取りの武士の実収は40石(4部)でした。しかるに藩財政窮迫に伴い、半知(20石 2部)となり、更にこの3年間は1部、即ち10石となった。これを「半知一徳成」と言いました。
 *7 仕組 = 主として家計整理や藩の財政整理など経済立て直しの方法や行為を言う。「御仕組」と敬語を冠するものは藩政改革や財政改革を意味する。



【4頁】

考御家来末 孰茂恐入罷居候得とも
 執政之者
 上二諂ひ 只私家而已大切心得 忠諫
 之道二怠り候故 御家来一統忠直之道
 ヲ捨 私之嘗を而已仕候様相見へ 甚以
 不成 御為儀候て 有志者寄々嘆息
 仕候 ケ様二而者 御上下之災難難遁
 儀二付 御家来一統忠志ヲ發
 御家御立直可仕と申合せ一致仕 執政

【5頁】

之者退役之儀御願申上 忠義之人柄
 を撰 推挙仕 御家御被直仕之外
 無他事と申合せ 左二相見候通 当職退役
 之儀御願申出候事
 一 過ル天明六年被差出候御ケ条 いつ連も
 御請申上 毎歳讀知被仰付候 此御
 ケ条之儀八 往古之御法令廢置仕候由
 二而 被仰出候得共 御掇差注¹有之 新規之
 御条目御座候 其上 々注²御作法被仰出

*1 掇差 = ねじれさし。 或いは緩差か？ (7頁3行目の「心緩」参照)
 *2 々 = 愈々力。(虫損のため判読困難)
 *3 天明六年之御法 = 天明5(1785)年~寛政元(1789)年は五年間の儉約令が出され、中の3年(天明6~8年)は大小身とも「一つ成」を命じられた。

諸事混雜仕御難波之御所帶振二而八
 御法令茂相立苦敷時々無調法人有之
 下之差問多ク其上諸頭新規之役所
 等被成御立自然と御上下之間懸隔
 仕御不便利之所多御仕組立之妨二も
 相成不成御為儀二候故
 上江對シ候而者至而恐多儀二御座候得共
 天明六年之御法注3 并追々被差出候御作
 法封込ニ注付諸事

大旦那様御代之通ニ注付候様御歎
 不申上而者御俟約之御被レも難相成
 且者御家来中心緩之場ニ茂至リ不申
 二付左之通御願御歎等申出候事

申上候事

御家御政事之次第并御内證御
 仕与之次第 職座・萩當役座江被成
 御任せ置候 然ル処 年来之取捌於

【6頁】

諸事混雜仕 御難波之御所帶振二而八
 御法令茂相立苦敷 時々無調法人有之
 下之差問多ク 其上諸頭 新規之役所
 等被成御立 自然と 御上下之間懸隔
 仕 御不便利之所多 御仕組立之妨二も
 相成 不成 御為儀二候故
 上江對シ候而者 至而恐多儀二御座候得共
 天明六年之御法注3 并追々被差出候御作
 法封込ニ被仰付 諸事

【7頁】

大旦那様注4 御代之通ニ被仰付候様 御歎
 不申上而者 御俟約之御被レも 難相成
 且者 御家来中心緩之場ニ茂至リ不申
 二付 左之通御願御歎等申出候事

申上候事

御家御政事之次第并御内證御
 仕与之次第 職座・萩當役座江被成
 御任せ置候 然ル処 年来之取捌於

*4 大旦那様 = 益田就祥 (なりよし、兼祥、喜次郎、越中、又兵衛、寛保3年4月28日~文化元年5月5日)の事。事件当時、益田家当主(旦那様と呼んだ)は益田就恭(なりやす、越中、安房、丹後)であった。彼は寛政12年12月23日に隠居。嗣子がなく、妹の桑子を養女として寛政12年5月29日、9才の益田房清を養子に迎えた。しかし、二人は結婚することなく桑子は文化5年に亡くなっている。「須佐騒動一件御裁断記録」63頁には「本家丹後殿(就恭) 近年病身隠居 又兵衛殿(就祥)老羸(ろうるい、年老いて衰えること)旁二付 家政之義も末家衆并 家来え被打任二付 万事沙汰筋之義も惣家来中請心自然と違却二相成 不平相止ノ様二相見候」と記されている

市丸中不審之廉々有之 不被為成
 御為儀御座候 依之別紙二過失演
 説書を以申出候 与得被
 聞召上 増野舎人 俣賀次郎右衛門 兩人
 之者 只今之御役被差替被下候様奉
 存候 徒党愁訴之儀者
 御大法茂有之儀二御座候得共 乍恐
 御家御大切と奉考御願申出候条
 此段御取成被成可被下候 已上

十一月六日

四組 中組 大組

益田次郎三郎殿 此時加判役大組頭兼ル

厚手紙二調

一年來重キ被為遂 御儉約
 上之御心勞不大方儀者奉恐察候
 然ル処 御借銀之御償も不被為相成

【8頁】

御家來中不審之廉々有之 不被為成
 御為儀御座候 依之別紙二過失演
 説書を以申出候 与得被
 聞召上 増野舎人 俣賀次郎右衛門 兩人
 之者 只今之御役被差替被下候様奉
 存候 徒党愁訴之儀者
 御大法茂有之儀二御座候得共 乍恐
 御家御大切と奉考御願申出候条
 此段御取成被成可被下候 已上

【9頁】

申ノ十一月五日

四組注1 中組注2 大組注3

益田次郎三郎殿 此時加判役大組頭兼ル

申上候事 厚手紙二調

一年來重キ被為遂 御儉約
 上之御心勞不大方儀者奉恐察候
 然ル処 御借銀之御償も不被為相成

*1 四組 = 益田家の軍制。市丸組、宇谷組、瀬尻組、須佐地組の四組を在郷武士として現在の田万川地区に配置し、石州口の防衛体制を敷いていた。各組は主として下士（5.661 ~ 14石）の侍25人と中間30人の編成であった。
 *2 中組 = 益田家家臣の階級制のうち、須佐在住の中士（4 ~ 29石）と思われる。御手廻組。
 *3 大組 = 益田家家臣の階級制のうち、須佐在住の上士（16 ~ 100石）と思われる。

侍借報^{しやう}山^{やま}高^{たか}二相成候様相聞江 既二以過ル
巳^し之歲^{のとし}ヨリ来西^{のにし}之歲^{のとし}迄 古来^{まね}稀成^{なる}
大御仕組^{おほのみこしぐみ}之^の仕出^{しだ}出^で西^{のにし}前^{のまへ}中^{のちゆう}江^にも一ツ成
之^の仕法^{しはふ}仕出^{しだ}及^{およ}中^{のちゆう}地^{のぢ}困窮^{くわんきゆう}之^の方^{かた}坐^ま
之^の終^{はつ}在^あ候^ま。

御家^{みけ}御大事^{おほいだいじ}之^の仕出^{しだ}長^{なが}路^ぢ之^の終^{はつ}候^まと
奉^{ほう}勤^{きん}考^{かう}之^の語^ご上^{のじやう}之^の後^{のち}多^{おほ}く調^{てう}思^し
之^の廻^{まわ}之^の是^{こゝ}迄^{まで}且^{かつ}々^々隨^ま身^み之^の御^{おん}奉^{ほう}公^{こう}奉^{ほう}遂^{すい}
其^{その}節^{せつ}候^ま者^{もの}茂^{さか}有^あ之^の 依^よ勘^{かん}場^{じやう}而^{して}八^{はつ}無^な據^と

仕出^{しだ}不^ふ相^あ成^ら候^ま御^{おん}理^り申^ま出^で候^ま者^{もの}茂^{さか}有^あ之^の 然^{しか}共^{れども}
大^{おほ}中^{ちゆう}小^{せう}身^{みん}共^{ども} 御^{おん}譜^ぷ代^{だい}之^の銘^{めい}々^々 今^{いま}少^{せう}シ^シ之^の
御^{おん}年^{ねん}限^{げん}と奉^{ほう}存^{ぞん} 御^{おん}家^けヲ見^み捨^す 離^り散^{さん}
仕^し者^{もの}モ無^な御^{おん}座^ざ 畢^ひ竟^{じやう}

御^{おん}代^{だい}々^々之^の御^{おん}厚^{こう}恩^{おん}難^{なん}有^あ次^{つぎ}第^{だい}二^に奉^{ほう}存^{ぞん}候^ま
然^{しか}ル^れ処^{ところ} 連^{つら}々^々承^{うけ}及^{およ}候^ま得^え共^{ども} 御^{おん}仕^し組^{ぐみ}モ被^{おほ}
思^し召^{めい}候^ま様^{さま}不^ふ被^{おほ}為^な立^た 当^{あた}暮^{くれ}ヨリ来^き春^{はる}二^に至^{いた}リ
御^{おん}繰^く卷^ま御^{おん}不^ふ足^{そく}之^の様^{さま}相^あ聞^きへ申^ま候^ま 往^{むか}載^せ注^{ちゆう}4
々^々左^{ひだり}様^{さま}御^{おん}不^ふ足^{そく}二^に相^あ成^ら候^ま而^{して}者^{もの} 至^{いた}終^{はつ}之^の所^{ところ}

【10頁】

御借銀山高二相成候様相聞江 既二以過ル
巳^し之歲^{のとし}ヨリ来西^{のにし}之歲^{のとし}迄 古来^{まね}稀成^{なる}
大御仕組^{おほのみこしぐみ}被^{おほ}仰^{おほ}出^で 御家^{みけ}来^き中^{のちゆう}江^にも一ツ成
之^の御仕法^{おんしはふ}被^{おほ}仰^{おほ}置^か 下^{した}地^{のぢ}困窮^{くわんきゆう}二^に而^{して}御座^{みざ}候^ま得^え共^{ども} 偏二
御家^{みけ}御大事^{おほいだいじ}之^の御時節^{おんときせつ} 銘々^{めいめい}其儀^{そのぎ}を
奉^{ほう}勤^{きん}考^{かう} 御請^{おんせい}申^ま上^{のじやう}候^ま 其後^{そのち}色々^{しきしき}調略^{てうりやく}
を廻^{まわ}シ 是^{こゝ}迄^{まで}且^{かつ}々^々隨^ま身^み之^の御^{おん}奉^{ほう}公^{こう}奉^{ほう}遂^{すい}
其^{その}節^{せつ}候^ま者^{もの}茂^{さか}有^あ之^の 依^よ勘^{かん}場^{じやう}而^{して}八^{はつ}無^な據^と

【11頁】

仕出^{しだ}不^ふ相^あ成^ら候^ま 御^{おん}理^り申^ま出^で候^ま者^{もの}茂^{さか}有^あ之^の 然^{しか}共^{れども}
大^{おほ}中^{ちゆう}小^{せう}身^{みん}共^{ども} 御^{おん}譜^ぷ代^{だい}之^の銘^{めい}々^々 今^{いま}少^{せう}シ^シ之^の
御^{おん}年^{ねん}限^{げん}と奉^{ほう}存^{ぞん} 御^{おん}家^けヲ見^み捨^す 離^り散^{さん}
仕^し者^{もの}モ無^な御^{おん}座^ざ 畢^ひ竟^{じやう}
御^{おん}代^{だい}々^々之^の御^{おん}厚^{こう}恩^{おん}難^{なん}有^あ次^{つぎ}第^{だい}二^に奉^{ほう}存^{ぞん}候^ま
然^{しか}ル^れ処^{ところ} 連^{つら}々^々承^{うけ}及^{およ}候^ま得^え共^{ども} 御^{おん}仕^し組^{ぐみ}モ被^{おほ}
思^し召^{めい}候^ま様^{さま}不^ふ被^{おほ}為^な立^た 当^{あた}暮^{くれ}ヨリ来^き春^{はる}二^に至^{いた}リ
御^{おん}繰^く卷^ま御^{おん}不^ふ足^{そく}之^の様^{さま}相^あ聞^きへ申^ま候^ま 往^{むか}載^せ注^{ちゆう}4
々^々左^{ひだり}様^{さま}御^{おん}不^ふ足^{そく}二^に相^あ成^ら候^ま而^{して}者^{もの} 至^{いた}終^{はつ}之^の所^{ところ}

*4 往載 = 意味不明。往歳 往年（むかし、過去の年）か。或いは毎年々々の意か。

御家御大 虫損 二被為及儀出来可仕歟と
 御家来中十方二暮罷居候 御仕興
 被為立候時者 御年限中此上もいか程
 之艱難苦身御座候共 御家之
 御為其儀全ク厭二無御座 銘々忠信
 之仕業二罷居候 然二御年限中 差向
 不被閣御条時八 格別御普請事 其外
 不依何事被仰出 御難題之儀 不拘
 御費 御借銀弥増之次第茂不辨
 悉 奉遂其節 御諫を茂不仕 失職分
 候儀 言語同断御座候事
 一 若旦那様御養縁注¹之儀二付 御内々
 表方御極リ被成候節 御家来中江一向
 御相談をも不被仰付 當役中落着之
 前ヲ以申上 其通り被成御極候儀八 當
 役中如何躰之考二罷居候哉 此御儀八
 御女縁共被為違 虫損
 御主君様を新二 儲注²候次第 大壯之

【12頁】

御家御大 虫損 二被為及儀出来可仕歟と
 御家来中十方二暮罷居候 御仕興
 被為立候時者 御年限中此上もいか程
 之艱難苦身御座候共 御家之
 御為其儀全ク厭二無御座 銘々忠信
 之仕業二罷居候 然二御年限中 差向
 不被閣御条時八 格別御普請事 其外
 不依何事被仰出 御難題之儀 不拘
 御費 御借銀弥増之次第茂不辨

【13頁】

悉 奉遂其節 御諫を茂不仕 失職分
 候儀 言語同断御座候事
 一 若旦那様御養縁注¹之儀二付 御内々
 表方御極リ被成候節 御家来中江一向
 御相談をも不被仰付 當役中落着之
 前ヲ以申上 其通り被成御極候儀八 當
 役中如何躰之考二罷居候哉 此御儀八
 御女縁共被為違 虫損
 御主君様を新二 儲注²候次第 大壯之

*1 若旦那様御養縁 = 益田就恭(なりやす)には嗣子がなく、妹の桑子を養女として寛政12年5月29日、9才の益田房清を養子に迎えた。しかし、桑子は文化5年10月17日に没したので、二人は結婚しなかった。房清は吉敷毛利外記就兼の子で寛政3年11月10日生まれ。文政9年1月12日没。36歳。

*2 儲 = 虫損。成儲力。「儲」は世子、皇太子の意。

以候に事違ひ若し要らば不納候之
 旨に大に違動未だ不辨我候之
 振廻早荒由契約先由事應之
 由先方様と事候と相違申上之
 申上と事候不仕事相違候者
 有下候事
 御家と事候而已に守之由我意に
 在足言語道断之仕業に事候事
 一 於其職分々々以

御威光の御仕候勿論、未だ事候
 候賀次郎右衛門事者
 御威光と事候若し我意と事候之
 仕向在路にお肉公熟に切ら候者
 然處後候と権威治事望候者
 由在御外候と懼る者も有之申上
 彼者之我意と不辨御場候事
 不勤之者茂有之候左様なる者
 兎角尻目二懸ケ願筋之沙汰不仕

【14頁】

御儀と奉考候 若御家来不納得之
 節者 大成御騒動 未だ不辨我候之
 振廻 畢竟御契約先 御相應之
 御先方様と奉存候得共 祐其節兎角
 之申上を茂不仕 差控罷居候 此者
 共所存二者
 御家ヲ當役而已に而守立候我意と
 相見へ言語道断之仕業に而御座候事
 一 於其職分々々 以

【15頁】

御威光 所勤仕儀勿論之事に御座候へ共
 候賀次郎右衛門事者
 御威光ヲ笠二著 我意ヲ立候而之
 仕向故 銘々於内心 悪ニ切而罷居候
 然處 役儀之権威強御座候得共
 御近習外様 恐懼る者も有之 中二者
 彼者之我意を不構 勤場堅固に
 不勤之者茂有之候 左様なる者を八
 兎角尻目二懸ケ 願筋之沙汰不仕

横道間々有之様二相見申候 左様御座候時八おそれながら乍恐 自然と挟述懐候様成行大二不成 御為仕業 不忠不義之人柄二而御座候事

中ノ
大組
中組
四組
申ノ十一月五日

御歎申上候事

一 御當家御政道諸御作法前々ヨリ

其行成を以被仰付候所 年代相隔候程 自然ト取失 古法相捨候二付 深キ御思召之旨茂御座候而 去ル天明六年1787古法江御改被仰付注1 慎而 奉得其旨候 其後茂追々諸御作法筋被仰出 時々御請申上来候 然処ニ古法江被差 戻儀ニ而八御座候得共 俄ニ諸廉御改 被仰付儀ニ付 今以末々者移リ兼候様 乍恐 奉存候

【16頁】

御歎申上候事

一 御當家御政道・諸御作法 前々ヨリ

【17頁】

其行成を以被仰付候所 年代相隔候程 自然ト取失 古法相捨候二付 深キ御思召之旨茂御座候而 去ル天明六年1787古法江御改被仰付注1 慎而 奉得其旨候 其後茂追々諸御作法筋被仰出 時々御請申上来候 然処ニ古法江被差 戻儀ニ而八御座候得共 俄ニ諸廉御改 被仰付儀ニ付 今以末々者移リ兼候様 乍恐 奉存候

*1 去ル天明六年古法江御改被仰付 = 16 頁脚註 *3 参照。

御先祖様御代々御行成を以て儀二付
 大旦那様御代迄之大概其御見渡
 を以て任付申上候下以て其心得二付
 自然と上下一和仕居候所右天明被仰出
 候後八 御家風茂大ニ変シ 於未々八
 其筋不行届 自然と御政道難相立
 其費不大方様ニ奉考候間 何とそ
 此段得下 被加 御勘弁 右被仰出諸事
 封込ニ以任付

大旦那様御代々御行成を以て儀二付
 御先祖様御代々御行成を以て儀二付
 大旦那様御代迄之大概其御見渡
 を以て任付申上候下以て其心得二付
 自然と上下一和仕居候所右天明被仰出
 候後八 御家風茂大ニ変シ 於未々八
 其筋不行届 自然と御政道難相立
 其費不大方様ニ奉考候間 何とそ
 此段得下 被加 御勘弁 右被仰出諸事
 封込ニ以任付

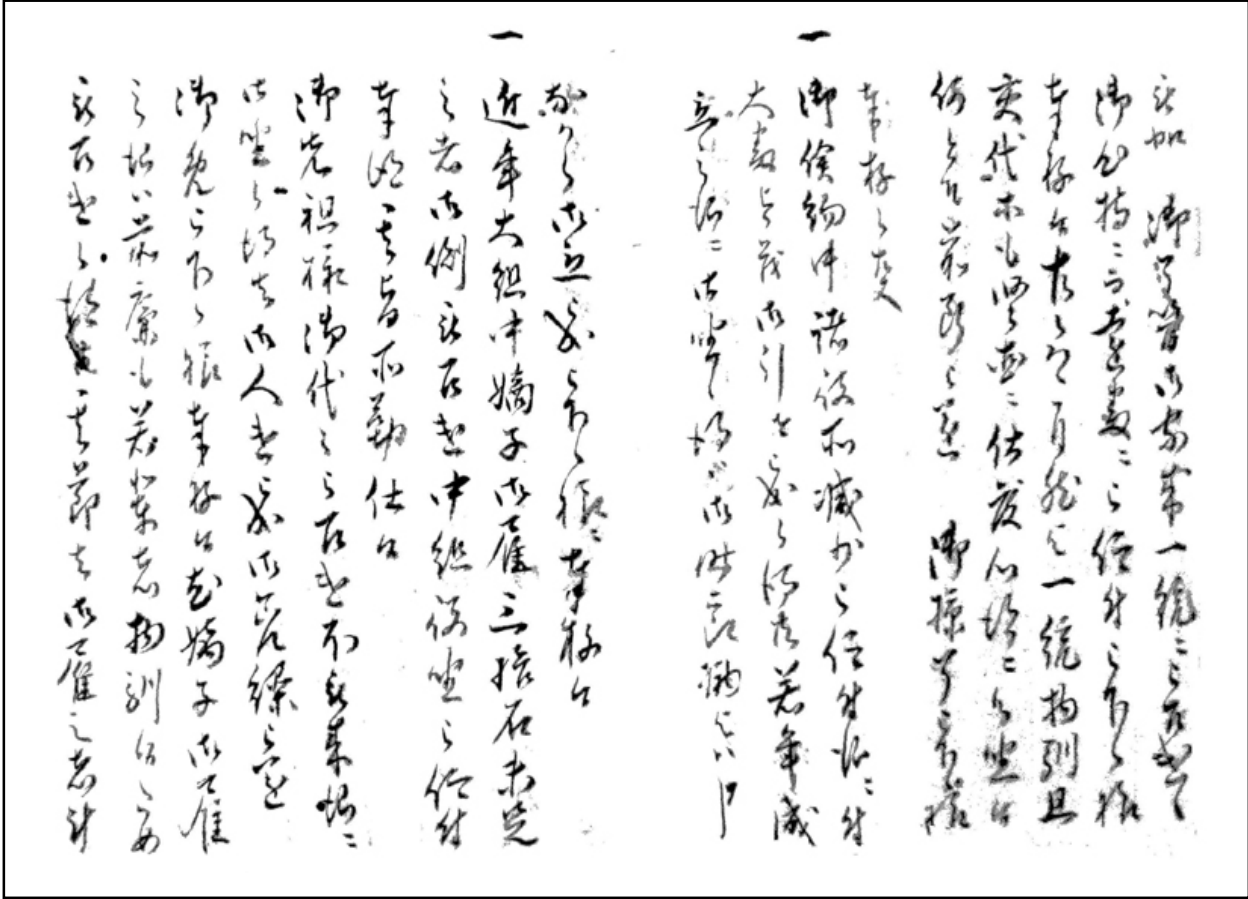
【18頁】

御先祖様御代々 御行成を以て儀二付
 大旦那様御代迄者 大概其御見渡
 を以て被仰付来候得八 下以て其心得二付
 自然と上下一和仕居候所 右天明被仰出
 候後八 御家風茂大ニ変シ 於未々八
 其筋不行届 自然と御政道難相立
 其費不大方様ニ奉考候間 何とそ
 此段得下 被加 御勘弁 右被仰出諸事
 封込ニ被仰付

【19頁】

大旦那様御代之御作法二被差戻
 被下候八、末々之者迄茂 其行形考
 居 却而御作法筋堅固二相成
 御為可然様奉存候事
 一 近年八諸役 近番且重リ番等多
 至而迷惑仕候 若年之者茂長詰二
 相成候而者 自然と困窮・病身二相成
 結句其費有之候 勿論 人才御撰

*2 大旦那様御代之御作法二被差戻被下候八、 = 17 頁脚註 *4 参照。



被仰付儀二而者御座候得共 大概之儀者

【20頁】

被加 御了簡 御家来一統二被召遣候
 御心持二而 遠番注1二被仰付 被下候様
 奉存候 左候八、自然と一統物馴 且
 交代等も堅固二仕度心得二御座候
 何とそ前断被遂 御掠了 被下候様
 奉存候事

御俚約中 諸役所減少被仰付儀二付
 大番注2を茂御引せ被成候得共 若年成
 立之儀二御座候得八 時節柄と八申

【21頁】

なから 御立被成被下候様二奉存候
 近年大組中 嫡子御雇 三拾石未足
 之者注3 御側被召遣 中組役座被仰付
 奉得其旨 所勤仕候
 御先祖様御代々 被召遣不被来儀二
 御座候得者 御人遣 被成御差繰 被遂
 御免被下候様奉存候 尤嫡子御雇
 之儀八前廉も若輩者 物馴候ため
 被召遣候得共 其節者 御雇之者斗

*1 遠番 = どういう意味？
 *2 大番 = 階級制のことか或いは職制の事か？ 不明。
 *3 三拾石未足之者 = 中士（4～29石）のこと。

右儀交代は任付の儀あり候に
 除候は是以不筋之御遣方と被遂
 御勤弁被下候哉 其後被成
 御免候儀二御座候得者 何卒前断
 之通二被仰付被下候様奉存候
 一 御政道筋不拘職分儀二而も御譜代
 之銘々御座候得共 氣付之儀八申上
 候事 勿論之儀二御座候得共 末代二
 相成候而八 自ら

上江遠ク相成候而 御為筋之儀二而も
 控居 且又邪佞之者候て茂
 御前向品能 被召遣候得者 遠慮仕
 其過失ヲ茂不申上様相成 甚以
 不忠之儀奉存候 已来 銘々氣付
 之儀八無覆蔵申上 忠勤奉遂其
 節度 改而 此度申合候間 兼々
 御心指ヲ被加被置 被下候様奉存候
 右之通 此度申談御歎申出候間

【22頁】

相交代被仰付 御使等之儀八被差
 除候 是以 不筋之御遣方と被遂
 御勤弁被下候哉 其後被成
 御免候儀二御座候得者 何卒前断
 之通二被仰付被下候様奉存候
 一 御政道筋 不拘職分儀二而も御譜代
 之銘々御座候得共 氣付之儀八申上
 候事 勿論之儀二御座候得共 末代二
 相成候而八 自ら

【23頁】

上江遠ク相成候而 御為筋之儀二而も
 控居 且又邪佞之者候て茂
 御前向品能 被召遣候得者 遠慮仕
 其過失ヲ茂不申上様相成 甚以
 不忠之儀奉存候 已来 銘々氣付
 之儀八無覆蔵申上 忠勤奉遂其
 節度 改而 此度申合候間 兼々
 御心指ヲ被加被置 被下候様奉存候
 右之通 此度申談御歎申出候間

御心入を以て被遂 御許容 被下候様
 奉願候 此段可然様御取計可被下候
 頼存候 以上
 申ノ十一月五日 大組中
 此御歎書之廉々中組之儀也萩・
 須佐申合相成 追而同意二而候事
 一 此度 孰茂發忠志 前条之廉々御願
 申出候上者 御家来中一致仕 一應
 御家御取立不仕而八不相叶儀二付 是迄
 之弊風二而者 忠勤之風俗怠り 眼前
 不成 御為儀と氣付候而茂
 上之御威光二壓レ口を閉 御為端申
 上候人無之様 御座候而者
 御家御興隆之望者 有之間敷候間
 以来之儀八為執政者者勿論 諸役所
 所勤仕来候者 孰茂
 御為筋一途二相考
 上意二不諂 勵忠勤可申候 然共 直諫之

【24頁】

御心入を以 被遂 御許容 被下候様
 奉願候 此段可然様御取計可被下候
 頼存候 以上

申ノ十一月五日 大組中

此御歎書之廉々中組之儀也萩・
 須佐申合相成 追而同意二而候事

一 此度 孰茂發忠志 前条之廉々御願
 申出候上者 御家来中一致仕 一應
 御家御取立不仕而八不相叶儀二付 是迄

【25頁】

之弊風二而者 忠勤之風俗怠り 眼前
 不成 御為儀と氣付候而茂
 上之御威光二壓レ口を閉 御為端申
 上候人無之様 御座候而者
 御家御興隆之望者 有之間敷候間
 以来之儀八為執政者者勿論 諸役所
 所勤仕来候者 孰茂
 御為筋一途二相考
 上意二不諂 勵忠勤可申候 然共 直諫之

道ハ寄リ易キ居二候得者一統為勵
誓約仕有今ハ湯毒節々申付お
有之者尖二申上若茂倭人之讒訴
於色々他之小過を以重ク御咎被仰付候
時者互二救相可申候且又奸佞之輩
嚴威ヲ假邪曲ヲ振候ハ申合せ退ケ
候様仕候而是迄之弊風一変仕候様
申合せ左之通誓約仕候事

【26頁】

道八寄り易キ 居二候得者 一統為勵
誓約仕 自今八御為筋之氣付 於
有之者 尖二申上 若茂 倭人之讒訴注1二違
色々他之小過を以 重ク御咎被仰付候
時者 互二救相 可申候 且又 奸佞注2之輩
嚴威ヲ假 邪曲ヲ振候ハ、 申合せ退ケ
候様仕候而 是迄之弊風一変仕候様
申合せ 左之通誓約仕候事

【27頁】

神文前書之事

神文前書之事
一 今般各尽忠勤 除邪佞注3之輩
二 一統堅申談候事
一 連判人数之内 若為邪臣虜と成
候共 銘々抛一命 相互二救相可申候事
一 古失小過を以 不相応之罪二落シ候共
往三ヶ年之間ハ 相互二抛身命 救相
可申候事
一 親子兄弟たり共 連判之外他言申

今般 各 尽忠勤 除邪佞注3之輩
可申段 一統堅申談候事
連判人数之内 若為邪臣虜と成
候共 銘々抛一命 相互二救相可申候事
古失小過を以 不相応之罪二落シ候共
往三ヶ年之間ハ 相互二抛身命 救相
可申候事
親子兄弟たり共 連判之外他言申

*1 讒訴 = 讒言して訴えること。かげぐち。かげごと。
*2 奸佞 = 心がねじけて人にへつらうこと。また、その人。
*3 邪佞 = よこしまでへつらうこと。

分考と夏

於右偽申者

牛王宝印

神文略之

寛政十二年申十月

連名血判

付右連名大組・中組・四組相調候 已後

御膳夫・御船頭・諸細工人・御厩・中間

大組月番箱之内へ納置候事

一 前条之通 当職退役之儀御願申出

御免之任付之時も只今御難渋之御所帯

向二候得者 自然御人問共二相成候而八 對

上江恐多儀 其上萩・須佐職座 其器二

成儀二御座候得者 御家来中入札ニハ 諸人

目入之人柄を推挙可仕と申合 入札仕

候所 須佐職役 宅野太郎左衛門 萩職役

小原権六 小国彦七江札重り候故 右三人

推挙可仕と申合せ候処 三人共申候者

【28頁】

間敷候事

於右偽申者

牛王宝印 神文略之

寛政十二年申十一月

連名血判

付 右連名大組・中組・四組相調候 已後

御膳夫・御船頭・諸細工人・御厩・中間

大組月番箱之内へ納置候事

一 前条之通 当職退役之儀御願申出

【29頁】

御免 被仰付候時者 只今御難渋之御所帯

向二候得者 自然御人問共二相成候而八 對

上江恐多儀 其上萩・須佐職座 其器二

当り不申而者 御家御取直シ茂不被為

成儀二御座候得者 御家来中入札ニハ 諸人

目入之人柄を推挙可仕と申合 入札仕

候所 須佐職役 宅野太郎左衛門 萩職役

小原権六 小国彦七江札重り候故 右三人

推挙可仕と申合せ候処 三人共申候者

不才之銘々二候得共 御推挙二而被召出候
 而も全く自己之見識を以所勤仕苦敷
 候得者 一統 御為筋之儀二付候而者
 無御遠慮 御存寄 被仰聞被下候様 有之
 度儀二存候 此度之御推挙御断申度
 存候得共 己二入札重リ御契約前 今更
 御断茂申苦敷 一先者 被召出候八、罷成
 可申候へ共 幾重も御大事之御時節 恐多
 別而 無心元存候間 御一統之御助力二預リ

【30頁】

【31頁】

淡正御度存候間 御為筋之儀二付候而八
 何分御存寄ヲ被加候様申候二付 孰茂
 御尤千万之儀と許諾仕候事
 霜月五日之晩 御家来中大蘆寺江
 追々相揃 住持江相對仕 忠義之次第
 都合物語リ
 御先君様御牌前 各禮拜仕
 御家御繁栄ヲ相祈リ 於彼寺暫ク
 申合之内 年行司役注¹之儀者 前々より

不才之銘々二候得共 御推挙二而被召出候
 而も全く自己之見識を以所勤仕苦敷
 候得者 一統 御為筋之儀二付候而者
 無御遠慮 御存寄 被仰聞被下候様 有之
 度儀二存候 此度之御推挙御断申度
 存候得共 己二入札重リ御契約前 今更
 御断茂申苦敷 一先者 被召出候八、罷成
 可申候へ共 幾重も御大事之御時節 恐多
 別而 無心元存候間 御一統之御助力二預リ

*1 年行司役 =

次依職坐欠官力を以て官務候に付
 付所務に依坐之身是又入札ニ付
 申合之孰茂入札付知波田を以て
 札重り候且又裏判役之儀に御勝手方
 肝要之役座ニ付人少く申合之
 以難波之御時節御間難合ニ付
 申合せ柴田十郎左衛門被召出可然と宅野太郎左衛門
 一 大蘆寺二而之申合せ相濟 松崎宮江

義訪神主申受神楽を奏シ於神前
 御武運長久と奉祈左候而直様小原
 権六波田太郎右衛門小国彦七松原利右衛門
 窪田彦右衛門前断二相見候御願書付
 益田次郎三郎宅江致持参受込相成勘場
 罷出居候惣人数之儀八宅野太郎左衛門
 宅江控居候事
 一 次郎三郎儀御田屋罷出
 大旦那様江御窺申上候處 御聞濟相成

【32頁】

須佐職座欠官力注1之節者 定暫役 被仰
 付 肝要之役座二付 是又 入札注2可然と
 申合せ 孰茂入札仕候処 波田太郎右衛門へ
 札重り候 且又 裏判役注3之儀者御勝手方注4
 肝要之役座二付 人才二而無之候而者
 御難波之御時節 御間難合ニ付 孰茂
 申合せ 柴田十郎左衛門被召出 可然と宅野太郎左衛門
 を始 孰茂評議相成候事
 一 大蘆寺二而之申合せ相濟 松崎宮江

【33頁】

参詣 神主申受 神楽を奏シ 於神前
 御武運長久を奉祈 左候而 直様小原
 権六 波田太郎右衛門 小国彦七 松原利右衛門
 窪田彦右衛門 前断二相見候 御願書付
 益田次郎三郎宅江致持参 受込相成 勘場
 罷出居候惣人数之儀八 宅野太郎左衛門
 宅江控居候事
 一 次郎三郎儀御田屋罷出
 大旦那様江御窺申上候處 御聞濟相成

*1 欠間 = 欠官力。 現任者の欠けている官。解官（げかん）と同じ。

*2 入札 = 選挙。

*3 裏判役 = 萩藩の裏判役は「当職の事務繁忙を極るに至り、その属職を設け、事の小さなものは直ちに之をして検証・判決せしむ。而して裏判役は其首班たり」（もりのしげり293頁）と解説されている。益田家の職制も本藩に倣ったものであったと考えられる。

*4 御勝手方 =

次郎三郎儀出萩仕
旦那様江御伺仕候様被仰出候由 右五人江
授^{さずけ}有之候二付 五人之者太郎左衛門宅江引
取 孰茂一同退去之事

十一月七日 小国彦七 窪田彦右衛門 俣賀
右門 仲井半蔵 勘場被召出 益田登人
益田勘右衛門ヨリ申渡有之候者 俣賀次郎右衛門儀
今日帰宿被仰付 御咎被仰付等二候 依之
各江御預ケ被成と之儀二付 各申出候者

次郎右衛門儀者 御家来一統御願申出候人柄二
御座候得者 親類中預リ仕苦敷御座
候間 御家来一統江御預ケ被下候様二
奉存候段申出候處 其段
大旦那様江御伺之上 申出之通 一統江御
預ケ被仰付候事
今七つ時 小国彦七 窪田彦右衛門 勘場
呼出二而 勘右衛門ヨリ申渡候者 只今次郎右衛門
帰宿被仰付 御咎被仰付候間 申渡候様

【34頁】

次郎三郎儀出萩仕
旦那様江御伺仕候様被仰出候由 右五人江
授^{さずけ}有之候二付 五人之者太郎左衛門宅江引
取 孰茂一同退去之事
十一月七日 小国彦七 窪田彦右衛門 俣賀
右門 仲井半蔵 勘場被召出 益田登人
益田勘右衛門ヨリ申渡有之候者 俣賀次郎右衛門儀
今日帰宿被仰付 御咎被仰付等二候 依之
各江御預ケ被成と之儀二付 各申出候者

【35頁】

次郎右衛門儀者 御家来一統御願申出候人柄二
御座候得者 親類中預リ仕苦敷御座
候間 御家来一統江御預ケ被下候様二
奉存候段申出候處 其段
大旦那様江御伺之上 申出之通 一統江御
預ケ被仰付候事
今七つ時 小国彦七 窪田彦右衛門 勘場
呼出二而 勘右衛門ヨリ申渡候者 只今次郎右衛門
帰宿被仰付 御咎被仰付候間 申渡候様

*5 授(さずけ) = 教える、伝授する。

今之儀ニ付テハ失書受取 半間中申合
 石津傳右衛門 小原権六 松原八郎右衛門 小国
 彦七 入江左渡島 窪田彦右衛門 俣賀右門
 御目代 井上勘之允 一同二次郎右衛門宅罷越
 申渡候事
 付 次郎右衛門江過失書所勤方
 思召不相叶候ニ付 御役被召上 先逼塞
 被仰付候由之事
 付 次郎右衛門世倅多右衛門儀 父次郎右衛門 右
 御咎被仰付候二付 逼塞被仰付候事
 一 次郎右衛門父子共ニ 御家来中宿意ヲ挟候
 者ニ付 其俣ニ而者 不被差置儀ニ付 其段
 親類中ヨリ物筋申達 彼者宅江困あいとこのえひ
 相調 御家来中四五人宛 代ル々々詰居候事
 一 増野舍人事 此度之趣ニ付 出萩いたし
 候処 今夜帰宿被仰付 先遠慮被仰
 付候事
 一 益田次郎三郎事 今夜帰宿ニ而 宅野

【36頁】

と之儀ニ付過失書受取 半間中申合
 石津傳右衛門 小原権六 松原八郎右衛門 小国
 彦七 入江左渡島 窪田彦右衛門 俣賀右門
 御目代 井上勘之允 一同二次郎右衛門宅罷越
 申渡候事
 付 次郎右衛門江過失書所勤方
 思召不相叶候ニ付 御役被召上 先逼塞
 被仰付候由之事
 付 次郎右衛門世倅多右衛門儀 父次郎右衛門 右

【37頁】

御咎被仰付候二付 逼塞被仰付候事
 一 次郎右衛門父子共ニ 御家来中宿意ヲ挟候
 者ニ付 其俣ニ而者 不被差置儀ニ付 其段
 親類中ヨリ物筋申達 彼者宅江困あいとこのえひ
 相調 御家来中四五人宛 代ル々々詰居候事
 一 増野舍人事 此度之趣ニ付 出萩いたし
 候処 今夜帰宿被仰付 先遠慮被仰
 付候事
 一 益田次郎三郎事 今夜帰宿ニ而 宅野

一 此度大惣之御願申上 奉勞
 御賢惠候二付 御家来中孰茂奉恐入
 差控之儀申出度段 二郎三郎江相達候処
 仕候様 沙汰相成候事
 此度大惣之御願申上 奉勞
 御賢惠候二付 御家来中孰茂奉恐入
 差控之儀申出度段 二郎三郎江相達候処
 仕候様 沙汰相成候事
 一 此度大惣之御願申上 奉勞
 御賢惠候二付 御家来中孰茂奉恐入
 差控之儀申出度段 二郎三郎江相達候処
 仕候様 沙汰相成候事
 一 此度大惣之御願申上 奉勞
 御賢惠候二付 御家来中孰茂奉恐入
 差控之儀申出度段 二郎三郎江相達候処
 仕候様 沙汰相成候事

【38頁】

太郎左衛門 小原権六 小国彦七 波田太郎右衛門
 窪田彦右衛門 松原利右衛門 勘場召出二而 此度
 諸廉願之通被仰付候間 此段御家来中江
 相達候様申渡有之候 太郎左衛門 権六
 彦七儀八 御用向有之候二付 明八日出萩
 仕候様 沙汰相成候事
 此度大惣之御願申上 奉勞
 御賢惠候二付 御家来中孰茂奉恐入
 差控之儀申出度段 二郎三郎江相達候処

【39頁】

其儀二不及之由申聞相成候事
 同八日 波田太郎右衛門江 年行司役被仰渡
 候事
 同九日 太郎左衛門 須佐職役 権六 彦七 萩
 当職 於
 御前被仰渡候事
 芝田十郎左衛門儀 此内萩御番之所 裏判役
 被仰渡 早速須佐罷歸候事
 付り 右役付之面々 下申合せ之次第

此目代増野左衛門三郎及
御内聞候二付 下届之通被仰出候由
相聞へ候事

増野へ書

一場中舍人候賀次郎右衛門 御裁許之儀二付
宅中より小玉七次信之丞舍人儀
改而逼塞 次郎右衛門儀 在隠居二而 地行
小歩之減少被仰付 世倅多右衛門へ家督被
仰付候段 内々相聞へ候処 不折合之者茂
有之候様相見候二付 自然注¹御不為之事

出弟侍之者不相濟儀 御政事 於尔下
評論仕候茂 恐多奉存候得共 御為と
奉考 大組月番頭集會仕 御咎之輕
重評議仕候処 区々二而相決不申候故
諸人之所存を試度 入札二仕候處 舍人
隠居 次郎右衛門没収遠嶋 新家御取立
地行半分 嫡子へ立被下候様二と之入札
重り候故 兎角 ケ様二而無之而八折合申
間敷 此度之参り懸りも 畢竟此兩人

【40頁】

御目代 増野作左衛門三郎及
御内聞候二付 下届之通被仰出候由
相聞へ候事

一 増野舍人 侯賀次郎右衛門 御裁許之儀二付
宅野太郎左衛門 小国彦七 須佐被差戻 舍人儀
改而逼塞 次郎右衛門儀 在隠居二而 地行
五歩吉減少被仰付 世倅多右衛門へ家督被
仰付候段 内々相聞へ候処 不折合之者茂
有之候様相見候二付 自然注¹御不為之事

【41頁】

出来仕候而者不相濟儀 御政事 於尔下
評論仕候茂 恐多奉存候得共 御為と
奉考 大組月番頭集會仕 御咎之輕
重評議仕候処 区々二而相決不申候故
諸人之所存を試度 入札二仕候處 舍人
隠居 次郎右衛門没収遠嶋 新家御取立
地行半分 嫡子へ立被下候様二と之入札
重り候故 兎角 ケ様二而無之而八折合申
間敷 此度之参り懸りも 畢竟此兩人

*1 自然 = 万が一。

之而能中務也其之罪不輕於此
 故其修り物罷之任外之謂は諸役人福
 徳之爲備也其政より分發治世之戒
 他之修り者 湯者如白下首之也且下分
 推挙之三人以爲在行務之政事也
 大事之始之也中務執茂而指之而中令
 之江つ者七以内之申達し候在何分
 以末家中様被仰合御裁断被仰出候
 於各茂一応御請為仕儀之候今更

御伺替も不得仕 弥前断之御裁許二而
 不折合之時者 御役御断申出之外無之
 と申儀二付 其趣を以皆々申合せ候内
 右兩人ヨリ
 大旦那様江及 御内聞候処 下一統二申合
 候儀者 不筋二八無之物二候得共 此度之儀
 者 萩ヨリも御落着相成来候儀 何分折
 合候様被 思召候と之儀 兩人ヨリ授ケ
 尚又 得と申合候處

【42頁】

之所為 就中 次郎右衛門儀八 其罪不輕儀二候
 得者 餘り輕罪二被仰付候而八 諸役人詔
 諛注²之為染毛 相改申問敷 後世之戒
 他之聞旁 御為如何可有之哉 且 下ヨリ
 推挙之三人 御役懸肝要之御政事 至而
 大事之儀二御座候故 孰茂所存之所申合
 太郎左衛門 彦七江 内々申達シ候得共 何分
 御末家中様被仰合 御裁断被仰出候儀
 於各茂 一応御請為仕儀二候得共 今更

【43頁】

御伺替も不得仕 弥前断之御裁許二而
 不折合之時者 御役御断申出之外無之
 と申儀二付 其趣を以皆々申合せ候内
 右兩人ヨリ
 大旦那様江及 御内聞候処 下一統二申合
 候儀者 不筋二八無之物二候得共 此度之儀
 者 萩ヨリも御落着相成来候儀 何分折
 合候様被 思召候と之儀 兩人ヨリ授ケ
 尚又 得と申合候處

*2 諛談(てんゆ) = こびへつらうこと。

大且ね様御意も重き儀 其上 此余御
 内輪何角と騒動仕候時者
 公邊江茂いか様二相間可申哉 左候時八
 上御大事二茂相成儀二て奉考 末々二至
 迄茂不折合之面々を者 偏 御為と
 勘考^{注1}仕 折合候様相定メ可申と申合
 右兩人江右之趣申達候事
 一 右御裁断之次第四組頭江者 組内折合
 候様 先達^{せんだつて}而内意有之 組内申間相成
 候之由
 付 四組之儀八多人数之儀 不折合之
 者茂有之候得共 頭ヨリ相宥^{なだ}メ候儀二付
 実事心緩不仕者も有之候へ共 折合
 候由相聞候事
 一 組頭増野正八組内江終職お組子路之
 下知を不請次第二候時者 頭之身通り
 相済不申候間 墨付^{すみつき}注2仕呉候様申懸候

【44頁】

大且ね様御意も重き儀 其上 此余御
 内輪何角と騒動仕候時者
 公邊江茂いか様二相間可申哉 左候時八
 上御大事二茂相成儀二て奉考 末々二至
 迄茂不折合之面々を者 偏 御為と
 勘考^{注1}仕 折合候様相定メ可申と申合
 右兩人江右之趣申達候事
 一 右御裁断之次第四組頭江者 組内折合
 候様 先達^{せんだつて}而内意有之 組内申間相成
 候之由

【45頁】

候所 組内格別之儀無之由 申出相成候
 由之事
 付 四組之儀八多人数之儀 不折合之
 者茂有之候得共 頭ヨリ相宥^{なだ}メ候儀二付
 実事心緩不仕者も有之候へ共 折合
 候由相聞候事
 一 組頭増野正八組内江終職お組子路之
 下知を不請次第二候時者 頭之身通り
 相済不申候間 墨付^{すみつき}注2仕呉候様申懸候

*1 勘考 = じっくりと考えること。
 *2 墨付 (すみつき) = おすみつき。臣下に与えた文書。近世。幕府又は諸侯からその臣下に与えた文書。ここでは逆に組子から請書を誓紙の形で差しさせたものらしい。

孰レも相摺抄仕至之序本席迄
 墨付差出候由之事
 一 組頭栗山中五郎左衛門儀 組内
 墨付仕仕之段一同二職役宅野太郎左衛門へ
 差出候所 彼者ヨリ
 大旦那様江差上候由之事
 一 組頭松原勘五郎江 本尾官治儀へ申入候者
 三頭之儀八申合 組子二不和無之段 誓
 紙仕せ

大旦那様江差上候由之事 存候由之儀
 誓紙仕仕之段一同二職役宅野太郎左衛門へ
 差出候所 彼者ヨリ
 大旦那様江差上候由之事
 一 組頭松原勘五郎江 本尾官治儀へ申入候者
 三頭之儀八申合 組子二不和無之段 誓
 紙仕せ

【46頁】

孰レも相当挨拶仕置 其席相濟 追而
 墨付差出候由候事
 一 組頭栗山五郎左衛門 本尾官治儀也 組内江
 墨付仕せ 三頭一同二職役宅野太郎左衛門へ
 差出候所 彼者ヨリ
 大旦那様江差上候由之事
 一 組頭松原勘五郎江 本尾官治才り申入候者
 三頭之儀八申合 組子二不和無之段 誓
 紙仕せ

【47頁】

大旦那様江差上可申と存候 御組内之儀も
 誓紙被仰付 可然由申候二付 勘五郎申
 候者 頭組子不和二候時者
 上ヨリ退役可被仰付儀二候 私ヨリ組内不
 和二而無之と誓紙を以申上候所八甚
 不可然存候 各様二茂 兎角被差止可然
 存候と申入 勘五郎儀者誓紙相調サセ
 不申候事
 一 四組頭被召出 勘五郎儀者組内一和

之由被 聞召 神妙二被思召候との御事
 残ル三頭之儀八 組内一和之段 誓紙
 差出 神妙二被 思召と之 御意之旨
 宅野太郎左衛門ヨリ申渡有之候事
 一 萩・須佐職役三人之儀者 別而 無親疎
 不申合候而八 不成 御為儀二付 諸事別躰
 一心之心得を以 所勤可仕段 太郎左衛門發語
 二而三人申合 御役懸之儀八睦敷申合候所
 無何ト 太郎左衛門儀 吉人遮而 御前罷出
 御用等申上候様相成 於権六・彦七 太郎左衛門
 所存不審二存 熟談も出来兼 御仕与
 筋之儀も取々不相成 甚不成御為儀
 上江對し候而者勿論 對御家来中候而も
 御役座塞居候段 氣毒二付 御役御断
 申出之外有之間敷段 両人申合 同志
 之者江及相談候得共 此砌 御役御断出
 者外見旁如何二付 何分致堪忍 忠節
 を尽候様申合せ候事

【48頁】

之由被 聞召 神妙二被思召候との御事
 残ル三頭之儀八 組内一和之段 誓紙
 差出 神妙二被 思召と之 御意之旨
 宅野太郎左衛門ヨリ申渡有之候事
 一 萩・須佐職役三人之儀者 別而 無親疎
 不申合候而八 不成 御為儀二付 諸事別躰
 一心之心得を以 所勤可仕段 太郎左衛門發語
 二而三人申合 御役懸之儀八睦敷申合候所
 無何ト 太郎左衛門儀 吉人遮而 御前罷出

【49頁】

御用等申上候様相成 於権六・彦七 太郎左衛門
 所存不審二存 熟談も出来兼 御仕与
 筋之儀も取々不相成 甚不成御為儀
 上江對し候而者勿論 對御家来中候而も
 御役座塞居候段 氣毒二付 御役御断
 申出之外有之間敷段 両人申合 同志
 之者江及相談候得共 此砌 御役御断出
 者外見旁如何二付 何分致堪忍 忠節
 を尽候様申合せ候事

一 寺島守憲之奉書次作此御書
 神皇 湯島節之長子親疎申合々
 浴之之免角臨意銘也來且前以
 本尼々之語組内誓紙之儀茂
 弟合在淵之此在少青不事之來
 尼之此大義出候申出一向御所帶取
 茂出來不仕而者對
 上臣下之道難在立此也亦第一統誓
 約有之儀二候得共至此比候而八 人心区々

有之儀相見候二付 同志之者申合 先之
 誓約弥相守儀を專ニ 何分
 御家御興隆を可奉期と温盟相催
 候事

再促誓約前書之變
 一 此度集會之銘々 勵忠勤 生死を
 一にして奉守
 御家儀第一之事

【50頁】

一 太郎左衛門 前条之參懸り 須佐罷歸候而も
 初発 御為筋之儀 無親疎申合候
 銘々と 免角 隔意致出來 且 前断二
 相見候三頭 組内誓紙之儀茂 太郎左衛門
 示合 相調候由相聞 旁不平之參
 懸二候 大義御願申出 一向御所帶取
 茂出來不仕而者 對
 上臣下之道 難相立儀 御家來一統誓
 約有之儀二候得共 至此比候而八 人心区々

【51頁】

有之儀相見候二付 同志之者申合 先之
 誓約弥相守儀を專ニ 何分
 御家御興隆を可奉期と温盟相催
 候事

再促誓約前書之變

一 此度集會之銘々 勵忠勤 生死を
 一にして奉守
 御家儀第一之事

一 出家申忠義一統にあらん内二茂
 若及至後邪信之族ありて為之者
 同志之輩讒訴二逢い 虜と成 或ハ
 取刀注一二而其者之宅江詰懸 各被仰出
 之旨を奉り 其咎を同様二蒙り奉
 度段願出義二一決可申候事
 此連判を促し候銘々ハ 其席々之
 評議 譬ひ親子兄弟たり共 善悪共

一 同志之銘々 忠を重し 義二ほこり
 於尔時 對々二而確執出来有間敷二も
 不限候 若も及其期候時ハ 互二致勤合
 御太平二移り候迄者 其席之心外を
 差捨 忠信之所江元付 可遂了簡事
 同志之銘々 追々此氣懸 於有之者
 誓約中申合 應其機候者之儀者
 連判之事

【52頁】

一 同志之銘々 忠を重し 義二ほこり
 於尔時 對々二而確執出来有間敷二も
 不限候 若も及其期候時ハ 互二致勤合
 御太平二移り候迄者 其席之心外を
 差捨 忠信之所江元付 可遂了簡事
 同志之銘々 追々此氣懸 於有之者
 誓約中申合 應其機候者之儀者
 連判之事

【53頁】

*1 取刀=押っ取り刀の事か。 急な場合に、腰に差す間もなく、急いで刀を手に取りること。大急ぎで駆けつける様。
 *2 梵天=仏教では史記界の初禅天の主として、帝釈天と並んで諸天の最高位を占め、仏法の守護神とされる。密教では十二天の一として上方を守る。また、色界の初禅天。欲界を離れた天界。
 *3 帝釈=帝釈天のこと。梵天とともに仏法を守る神。また、十二天の一で東方の守護神。
 *4 四大天王=四天王と同じ。 欲界の六欲天の中、初天をいい、またこの天に住む仏教における、4人の守護神(持国天、増長天、広目天、多聞天)をいう

右若偽於申者

上者梵天帝釈河大天王下者
堅牢地神惣而日本國大小神
祇殊氏神神罰冥罰可罷蒙者
也仍起請文如件

寛政十二庚申

十二月廿一日 同盟中連名血判

一 過儿天明八申歳 御旅役 被蒙

仰候所 年来難渋之御勝手向二付 銀
百貫目大阪借之形を以 御減少借注6被
仰願 御領分下田万村之内市味二而 高
貳百五拾石 御上地注7相成候所 全体御差湊
之御所帯二而 御受返シ之期無之 御家来
之銘々 乍恐 氣之毒千万奉存候 殊二
石州御境目を茂御預り二而 古来ヨリ侍
中間之御手配りも有之所柄 甚
御手薄二有之候二付 何とそ御受返シ

【54頁】

右若偽於申者

上者梵天注2帝釈注1四大天王注4 下者
堅牢地神注5 惣而日本國大小神
祇 殊氏神 神罰冥罰可罷蒙者
也 仍起請文如件

寛政十二庚申

十二月廿一日 同盟中連名血判

一 過儿天明八申歳 御旅役 被蒙

【55頁】

仰候所 年来難渋之御勝手向二付 銀
百貫目大阪借之形を以 御減少借注6被
仰願 御領分下田万村之内市味二而 高
貳百五拾石 御上地注7相成候所 全体御差湊
之御所帯二而 御受返シ之期無之 御家来
之銘々 乍恐 氣之毒千万奉存候 殊二
石州御境目を茂御預り二而 古来ヨリ侍
中間之御手配りも有之所柄 甚
御手薄二有之候二付 何とそ御受返シ

*5 堅牢地神 = 地天(じてん)と同じ。十二天の一。大地をつかさどる神。元印度神話で、天地両神の一。仏の成道のとて、大地より現れてこれを証明し、また、仏の転法輪を諸天に知らせるという。
*6 減少借 = 知行の一部を借銀の額に応じて一時的に藩府に収めて減少すること。知行減少借ともいう。主として大阪借などの借財に対する措置としてとられた。藩士が直接大阪證人などから知行を抵当に借銀することを避ける為のもの。借銀一貫目に対して高二石五斗(玄米一石)の割合で知行を減少し、藩府でこれを預かった。(引田借りとも言う)
*7 上地(あげち) = 地方知行をもつ家臣がその知行地を藩府に上表する事をいう。知行地を差し上げることから上知とも言った。

亦不^レ々々^レ奉^レ存候而茂^モ 大銀之儀 俄二御
 差繰茂御六ヶ敷 色々思案仕候処 御
 勝手向被成御調候上 御受返シと候而者^{テハ}
 中々御見詰も無之事故 何分御家来中
 之借受ニ^メ 調達仕^ル也 御返濟方之所茂
 少々宛之御馳走を遂^ケ
 御上下打合 御返濟茂相成候様 取計
 候而八と申合 手筋々々を以 借銀之
 心遣仕候得共 大銀之儀故 俄二と申
 候而者 尚更出来兼候処 漸百貫目之辻
 借銀之相談過半相調 孰茂競居申
 候所 利高之様二も相聞候得共 外二
 銀主無之 此上少々之御損益二被拘候
 而者 所詮御受返之期無御座 前断之
 通肝要之所柄二付 調達相成次第 御
 受返シ相成候八、と一統申事二付 早速
 當役中江及相談候処 孰茂 致同意候
 此時三職共在萩故 爰元暫役 波田太郎右衛門

【56頁】

相成候八、と奉存候而茂^モ 大銀之儀 俄二御
 差繰茂御六ヶ敷 色々思案仕候処 御
 勝手向被成御調候上 御受返シと候而者^{テハ}
 中々御見詰も無之事故 何分御家来中
 之借受ニ^メ 調達仕^ル也 御返濟方之所茂
 少々宛之御馳走を遂^ケ
 御上下打合 御返濟茂相成候様 取計
 候而八と申合 手筋々々を以 借銀之
 心遣仕候得共 大銀之儀故 俄二と申

【57頁】

候而者 尚更出来兼候処 漸百貫目之辻
 借銀之相談過半相調 孰茂競居申
 候所 利高之様二も相聞候得共 外二
 銀主無之 此上少々之御損益二被拘候
 而者 所詮御受返之期無御座 前断之
 通肝要之所柄二付 調達相成次第 御
 受返シ相成候八、と一統申事二付 早速
 當役中江及相談候処 孰茂 致同意候
 此時三職共在萩故 爰元暫役 波田太郎右衛門

たり委細申合 窪田彦右衛門差出 三職
 より及 御内間候所
 上御感被遊 御家来中半間々々江其段
 被仰聞御座候 彦右衛門出萩二而 三職申
 合候節 太郎左衛門申候者 此銀御返濟二付
 一統御馳走米之儀 御家老中を交候儀
 甚以如何敷 須佐之申合せ不行届仕方
 杯と申候二付 当時 為職役御家来一和を
 不相好 甚不心得之申分と 孰も気毒

【58頁】

一先般 御家来一統不容易儀 御願申上
 候所 御聞濟シ相成たる事二御座候へ八
 此上者 御家来中入はまり
 御家を守立 諸事御為筋之儀者
 銘々申合 屹度御所帯辺之御目途茂
 付 御家風古来之通 御立直シ不仕
 而者 第一 公邊之聞茂恐多 對
 上候而茂 臣下之身通り難相立 無左茂

【59頁】

存居候事
 一先般 御家来一統不容易儀 御願申上
 候所 御聞濟シ相成たる事二御座候へ八
 此上者 御家来中入はまり
 御家を守立 諸事御為筋之儀者
 銘々申合 屹度御所帯辺之御目途茂
 付 御家風古来之通 御立直シ不仕
 而者 第一 公邊之聞茂恐多 對
 上候而茂 臣下之身通り難相立 無左茂

然形之御仕法二而西東分一之御取統
 且々相立候而茂 行詰御危急之場二
 至候時八 御上下之氣毒不過之
 儀 第一三職之者 内々者 下推拳之次第
 も有之候得者 勵忠節 御為筋を者
 犯 威威不申上而者 不相濟儀二候處
 前断二相見候通 心底之隔有之故か
 空ク打過候二付 ケ様二而八御家来一統之
 申分無之儀二付 三職之者江直諫之道
 一 右廉書勘場ヨリ萩差出シ 加判中孰も
 同意之上 三職ヨリ及
 御間候処 廉書得と可被遊 御覽と之
 御事二而 御手元江差上置候由相聞
 候事
 付 窪田彦右衛門儀 此時市味上地御受

【60頁】

懸形之御仕法二而 御当分之御取統
 且々相立候而茂 行詰御危急之場二
 至候時八 御上下之氣毒不過之
 儀 第一三職之者 内々者 下推拳之次第
 も有之候得者 勵忠節 御為筋を者
 犯 威威不申上而者 不相濟儀二候處
 前断二相見候通 心底之隔有之故か
 空ク打過候二付 ケ様二而八御家来一統之
 申分無之儀二付 三職之者江直諫之道

【61頁】

開可申と申合せ 氣付之次第第一ツ書を
 以三職迄申出候事
 付り 廉書控之儀八別紙有之候事
 一 右廉書勘場ヨリ萩差出シ 加判中孰も
 同意之上 三職ヨリ及
 御間候処 廉書得と可被遊 御覽と之
 御事二而 御手元江差上置候由相聞
 候事
 付 窪田彦右衛門儀 此時市味上地御受

右之儀二付 出秋滞留仕 右廉書
之次第申上之儀 三職江追々
及催促候事

一 右廉書 右之儀二付申上之儀 三職江追々
出秋滞留仕 右廉書 之次第申上之儀 三職江追々
及催促候事

一 右廉書 右之儀二付申上之儀 三職江追々
出秋滞留仕 右廉書 之次第申上之儀 三職江追々
及催促候事

一 右廉書 右之儀二付申上之儀 三職江追々
出秋滞留仕 右廉書 之次第申上之儀 三職江追々
及催促候事

一 右廉書 右之儀二付申上之儀 三職江追々
出秋滞留仕 右廉書 之次第申上之儀 三職江追々
及催促候事

【62頁】

返之儀二付 出秋滞留仕 右廉書
之次第申上之儀 三職江追々

及催促候事

一 右廉書 太郎左衛門儀 最初者同意二而 及

御聞候所 御聞請不宜故歟 別心致

出来候様 権六・彦七移り有之候由相聞

候事

一 太郎左衛門老入立 節々 御前罷出 御用

申上 御密用承り候様相見候由二候處

【63頁】

須佐罷歸 御家来中不拘大小身二 自身

同意之者ヨリ 追々宅江相招キ

御黒印頂戴仕せ候 右 御黒印之次第八

御内密之儀 一向他言不仕用 御目附

列座二而申聞世有之候 尚 為御安心

二而御座候間 神文を以御請申上候様と

太郎左衛門ヨリ相授ケ候付 銘々血判相調候

御密用と八年申 彼者同意輩より

頂戴仕せ 不拘階級二茂 分親疎を以

取捌是ヨリ人心いよいよ弥不平二而 自然と御家来
 不和致出来候様相成候事
 一 右 御黒印 於萩詰懸り 御家来中江八
 御用人江取捌被仰付 大概相濟候上
 権六・彦七儀 言人別
 御前被召出 先達而 御家来中ヨリ差出候
 廉書尤二存候哉と之御事二付 尤之
 次第二奉存候通申上候由 左候而 御家来
 中江 御黒印被差下候段 加判を以
 其後 太郎左衛門儀 御所帯為御引調 致
 出萩候所 右御用筋を者 等閑二打過
 御密用而已取捌仕 在勤之内一兩人江
 申聞候者 万一之儀有之候時八 御味方
 被為作候へ八 於身柄者 善悪共二 奉從
 君二候 須佐二おひて 真忠之侍十四人
 程誘へ候杯と内咄仕候 於詰懸中二
 彼者所存如何様之心得二候哉 諂諛

【64頁】

取捌 是ヨリ人心いよいよ弥不平二而 自然と御家来
 不和致出来候様相成候事
 一 右 御黒印 於萩詰懸り 御家来中江八
 御用人江取捌被仰付 大概相濟候上
 権六・彦七儀 言人別
 御前被召出 先達而 御家来中ヨリ差出候
 廉書尤二存候哉と之御事二付 尤之
 次第二奉存候通申上候由 左候而 御家来
 中江 御黒印被差下候段 加判を以

【65頁】

被成御聞せ候由之事
 一 其後 太郎左衛門儀 御所帯為御引調 致
 出萩候所 右御用筋を者 等閑二打過
 御密用而已取捌仕 在勤之内一兩人江
 申聞候者 万一之儀有之候時八 御味方
 被為作候へ八 於身柄者 善悪共二 奉從
 君二候 須佐二おひて 真忠之侍十四人
 程誘へ候杯と内咄仕候 於詰懸中二
 彼者所存如何様之心得二候哉 諂諛

之妄言 甚以不道 其意儀 彼者在職
 二而八 いか躰之儀出来可仕哉も難計 不
 成御為儀二候間 退役之儀申出之外
 有之間敷と寄々申合候事
 右御仕組筋之御用 半途二て 別御用
 有之候由二而 須佐罷歸候処 其砌 左之
 御咎事有之候事

【66頁】

非常之御咎事二付御歎
 之次第 天 第二

一 享和元年辛酉二月廿七日早朝 窪田彦右衛門
 宅江 組侍・組中間多人數罷越 彦右衛門を
 召捕 御茶屋江連出候 波田太郎右衛門 年行司
 郎左右衛門 裏判 今朝出勤 差控候様二と
 職座ヨリ沙汰相成 其後 思召之旨も有之
 候と之御事二而 御役座召上 先逼塞被仰
 付候 増野作左衛門 御動方 是又 思召之旨

【67頁】

非常之御咎事二付御歎
 之次第 天 第二

一 享和元年辛酉二月廿七日早朝 窪田彦右衛門
 宅江 組侍・組中間多人數罷越 彦右衛門を
 召捕 御茶屋江連出候 波田太郎右衛門 年行司
 郎左右衛門 裏判 今朝出勤 差控候様二と
 職座ヨリ沙汰相成 其後 思召之旨も有之
 候と之御事二而 御役座召上 先逼塞被仰
 付候 増野作左衛門 御動方 是又 思召之旨

有之御役被召上 先逼塞被仰付候 入江
 左治馬儀也 思召之旨有之 逼塞被仰付候
 棕小左衛門儀也 御茶屋被召出候 右六人之面々
 いか様之過失有之候哉 八不存事候得とも
 忠勤を励候者 二御座候 不尋常御沙汰
 筋二付 孰茂驚入候 就中 彦右衛門儀者
 諸人 二越へ勇氣之生質二而 御為と
 存付候儀は 不諂 権家注¹ 一筋二身命を抛于
 尽忠節候 既二職役 宅野太郎左衛門 先達而

御密用を取捌候節も 御密用筋 早速
 世上江致露頭 色々と評判有之 御家来
 中 人心不穩趣二付 御不為之儀と存付
 候故 太郎左衛門宅江罷越 何角と及議論
 候内 太郎左衛門申方二 善悪共二 奉從
 君と相演候 諂諛之申方二付 太郎左衛門を令
 恥罷歸 公用之外 不申承之段 手紙を以
 申入候由 其節忠志有之面々 追々伝承
 候而 彦右衛門 此度之参り懸り 畢竟忠

【68頁】

有之御役被召上 先逼塞被仰付候 入江
 左治馬儀也 思召之旨有之 逼塞被仰付候
 棕小左衛門儀也 御茶屋被召出候 右六人之面々
 いか様之過失有之候哉 八不存事候得とも
 忠勤を励候者 二御座候 不尋常御沙汰
 筋二付 孰茂驚入候 就中 彦右衛門儀者
 諸人 二越へ勇氣之生質二而 御為と
 存付候儀は 不諂 権家注¹ 一筋二身命を抛于
 尽忠節候 既二職役 宅野太郎左衛門 先達而

【69頁】

御密用を取捌候節も 御密用筋 早速
 世上江致露頭 色々と評判有之 御家来
 中 人心不穩趣二付 御不為之儀と存付
 候故 太郎左衛門宅江罷越 何角と及議論
 候内 太郎左衛門申方二 善悪共二 奉從
 君と相演候 諂諛之申方二付 太郎左衛門を令
 恥罷歸 公用之外 不申承之段 手紙を以
 申入候由 其節忠志有之面々 追々伝承
 候而 彦右衛門 此度之参り懸り 畢竟忠

*1 権家 = 権勢のある家柄。権門。勢家。

義二凝候而之事二候得者 職座と隔意
 有之候而者不成 御為儀 平和仕せ 可然と
 申合せ 波田太郎左衛門取扱二而 何も無已前二
 双方申宥 此懸合者相濟候儀 於太郎左衛門も
 此儀を宿意二挟ミ 御目代杯示合せ候而
 達 上聞 餘之執行筋迄も讒訴なと
 仕儀者有之間敷 定而其罪可有之 候得共
 石州已来 同譜代之御家来 去冬迄も
 御為筋之儀二付候而者 別而 無親疎申合

彦右衛門を其罪二伏シ 不日内 匹夫之手二懸
 候段者 不辨武門之禮儀仕方 甚不及
 落着候 其余之人々茂 夫々之過失を以
 御咎為被仰付二而者可有之候得共 右躰之
 太郎左衛門沙汰筋二而者 甚不審二存候故
 大組・御手廻月番ヨリ覺書を以 過失之
 次第致問出候処 夫々申聞せ有之候 然処
 孰茂不忠之筋作廻 少も無之 他家江
 懸合之越度も無之 悉皆兼々

【70頁】

義二凝候而之事二候得者 職座と隔意
 有之候而者不成 御為儀 平和仕せ 可然と
 申合せ 波田太郎左衛門取扱二而 何も無已前二
 双方申宥 此懸合者相濟候儀 於太郎左衛門も
 此儀を宿意二挟ミ 御目代杯示合せ候而
 達 上聞 餘之執行筋迄も讒訴なと
 仕儀者有之間敷 定而其罪可有之 候得共
 石州已来 同譜代之御家来 去冬迄も
 御為筋之儀二付候而者 別而 無親疎申合

【71頁】

彦右衛門を其罪二伏シ 不日内 匹夫之手二懸
 候段者 不辨武門之禮儀仕方 甚不及
 落着候 其余之人々茂 夫々之過失を以
 御咎為被仰付二而者可有之候得共 右躰之
 太郎左衛門沙汰筋二而者 甚不審二存候故
 大組・御手廻月番ヨリ覺書を以 過失之
 次第致問出候処 夫々申聞せ有之候 然処
 孰茂不忠之筋作廻 少も無之 他家江
 懸合之越度も無之 悉皆兼々

御為筋之儀二付 太郎左衛門所存と違却故
 色々相求候而之過失二候 各密々申合候処
 假令 太郎左衛門 去冬已来一統申合候
 御為筋之儀者 反覆仕 加判中江諛 私之
 宿意を以同意之御目代役抔示合 讓を
 構注¹ 奉迷 上候共 萩當役同意者仕間
 敷儀 甚不審二存候付 萩當役 小原権六・
 小国彦七江飛脚を以相尋候処 兩人共二
 右御咎之御沙汰筋一向移り無之 初而

【72頁】

御為筋之儀二付 太郎左衛門所存と違却故
 色々相求候而之過失二候 各密々申合候処
 假令 太郎左衛門 去冬已来一統申合候
 御為筋之儀者 反覆仕 加判中江諛 私之
 宿意を以同意之御目代役抔示合 讓を
 構注¹ 奉迷 上候共 萩當役同意者仕間
 敷儀 甚不審二存候付 萩當役 小原権六・
 小国彦七江飛脚を以相尋候処 兩人共二
 右御咎之御沙汰筋一向移り無之 初而

【73頁】

承之 驚入候由相聞候 萩當役不存 種々之儀二
 候時者 上二茂不被知召事共二而者無之
 哉 甚以不及落着候 太郎左衛門儀 如此振廻を
 仕候上者 御家来多人数之内二者 義心二凝
 彦右衛門を救出抔仕 太郎左衛門同意之者と及
 鬪争申間敷二不相限 自然と右躰之
 騒動共二至候而者 乍恐 終二御家之御
 大難出来可仕哉と互二歎息仕候事
 一 三月廿八日 昨日已来 市中其外入口々々打廻り

承之 驚入候由相聞候 萩當役不存 種々之儀二
 候時者 上二茂不被知召事共二而者無之
 哉 甚以不及落着候 太郎左衛門儀 如此振廻を
 仕候上者 御家来多人数之内二者 義心二凝
 彦右衛門を救出抔仕 太郎左衛門同意之者と及
 鬪争申間敷二不相限 自然と右躰之
 騒動共二至候而者 乍恐 終二御家之御
 大難出来可仕哉と互二歎息仕候事
 一 三月廿八日 昨日已来 市中其外入口々々打廻り

*1 讓を構(ざんをかまえ) = そしる。

之者多人數差出之甚嚴重之振廻二候
 且此度窪田・棕過失之御究方江差出候
 役人之内荻野直左衛門儀者兼々諂諛注²不信
 之者故去冬忠義一統之連判へも御家来
 多人數之内彼者一人二限判形不仕せ程
 之者二て御家来中諫呆候人柄太郎左衛門も
 其段者委細存之儀二候過失御糾明之
 儀者心底二少も信義を不失兼而之持
 方堅固二而邪曲無之人柄を祐可差出

【74頁】

之者多人數差出 甚嚴重之振廻二候
 且 此度窪田・棕 過失之御究方江差出候
 役人之内 荻野直左衛門儀者 兼々諂諛注²不信
 之者故 去冬忠義一統之連判へも御家来
 多人數之内 彼者一人二限 判形不仕せ程
 之者二て御家来中 諫呆候人柄 太郎左衛門も
 其段者委細存之儀二候 過失御糾明之
 儀者 心底二少も信義を不失 兼而之持
 方堅固二而 邪曲無之人柄を祐 可差出

【75頁】

儀二候処 いか様之心得を以 ケ様之人柄を差出
 候哉 其余之人々も太郎左衛門同意輩斗二候
 御目代荻野忠左衛門儀も 太郎左衛門縁者二而
 兼て万事
 謀ル合候段者 衆指之所指二候 假令
 上ヨリ御目當を以被仰付候共 御為と奉存
 候ハ、 太郎左衛門同意輩計二て者 諸人之折合
 不宜と申上とも可仕儀二候處 甚以未練之
 仕方二候 加之 此度之一件二付 何かと申候者
 者不及御伺 大小身共二 太郎左衛門存分二取計

儀二候処 いか様之心得を以 ケ様之人柄を差出
 候哉 其余之人々も太郎左衛門同意輩斗二候
 御目代荻野忠左衛門儀も 太郎左衛門縁者二而
 兼て万事
 謀ル合候段者 衆指之所指二候 假令
 上ヨリ御目當を以被仰付候共 御為と奉存
 候ハ、 太郎左衛門同意輩計二て者 諸人之折合
 不宜と申上とも可仕儀二候處 甚以未練之
 仕方二候 加之 此度之一件二付 何かと申候者
 者不及御伺 大小身共二 太郎左衛門存分二取計

*2 諂諛(てんゆ) = へつらう。

之候と申付候所は、何角と申出候所は、此の果て替
 と申付候人柄も、其の御扱に、此方同志之者
 の御申付候所は、其罪相番を以、其罰を断
 る候と、何ぞ右躰之儀を外様之者江洩シ候而
 人心を威シ候様之取計可仕哉、甚不及落着
 仕方二候、加判中と候而も、ケ様之人柄へ致同
 意取計之儀、其所存甚不及合点候故
 此上者、須佐當役中江、何かと可申入道者
 無之候、雖然、御領内之模様、甚だ不穩、隣
 々々、其の御扱、御為儀、且、右逼塞候
 面々、左迄之罪二ても無之、此余被處重
 科候時者、忽御騒動二茂至り、乍恐
 御家難出来可仕段難計、此段乍氣付
 閣二而者不忠之至り、其上去冬、已来互二
 忠義を尽、可奉守、御家を示合候人柄
 左迄之罪も無之、二、縲繼注之苦を受候を
 不知顔二而差置、太郎左衛門八致同意、身之
 栄耀を希候而、何ぞ面皮可有之哉、利二

【76頁】

候様と被仰付候、何角と不申出時者、此余御咎
 被仰付候人柄者無之候扱と、此方同志之者
 江茂申聞せ候、其罪相番を以、其罰を断
 候八、何ぞ右躰之儀を外様之者江洩シ候而
 人心を威シ候様之取計可仕哉、甚不及落着
 仕方二候、加判中と候而も、ケ様之人柄へ致同
 意取計之儀、其所存甚不及合点候故
 此上者、須佐當役中江、何かと可申入道者
 無之候、雖然、御領内之模様、甚だ不穩、隣

【77頁】

郷江之聞へも不成、御為儀、且、右逼塞候
 面々、左迄之罪二ても無之、此余被處重
 科候時者、忽御騒動二茂至り、乍恐
 御家難出来可仕段難計、此段乍氣付
 閣二而者不忠之至り、其上去冬、已来互二
 忠義を尽、可奉守、御家を示合候人柄
 左迄之罪も無之、二、縲繼注之苦を受候を
 不知顔二而差置、太郎左衛門八致同意、身之
 栄耀を希候而、何ぞ面皮可有之哉、利二

*1 縲繼（るいせつ）= 縄目に掛かること。縛られて獄に入ること。

依り齡を全せんよりハ義ニ依り命を輕
 せん事 武士之本意と申合候 乍尔
 馬之先ニ遂忠死候といひ成舌長キ
 邪佞之輩モ嘲哂ハ仕間敷候得共 死所
 之能々不見立而者 却而不忠之名を取
 可申儀 何分得と思惟仕 此余者一分々々
 之存寄を以 御為宜様取計 武運ニ
 尽候時者 互ニ致通達 忠死を一時ニ決シ
 可申と追々申合 御菩提所

【78頁】

依り齡を全せんよりハ 義ニ依り命を輕
 せん事 武士之本意と申合候 乍尔
 御馬之先ニ遂忠死候ハ、いか成舌長キ
 邪佞之輩モ嘲哂ハ仕間敷候得共 死所
 之能々不見立而者 却而不忠之名を取
 可申儀 何分得と思惟仕 此余者一分々々
 之存寄を以 御為宜様取計 武運ニ
 尽候時者 互ニ致通達 忠死を一時ニ決シ
 可申と追々申合 御菩提所

【79頁】

御先祖様御牌前江拜禮仕 又者氏神
 詣拜仕 只々御家運長久を奉祈 千
 辛万苦仕候事
 同夜以外大雨ニ而 前後左右不相分候處
 銘々出萩之存立有之 追々出足仕 往還
 筋二而各参逢 互ニ心底を無覆蔵申合
 候内 追々来添十人ニ相成候 出萩申出之
 旨趣 豫申合候処 何茂同様之儀ニて候事
 太郎左衛門 右躰之振廻故 須佐ニ而出萩之段

御先祖様御牌前江拜禮仕 又者氏神
 詣拜仕 只々御家運長久を奉祈 千
 辛万苦仕候事
 同夜以外大雨ニ而 前後左右不相分候處
 銘々出萩之存立有之 追々出足仕 往還
 筋二而各参逢 互ニ心底を無覆蔵申合
 候内 追々来添十人ニ相成候 出萩申出之
 旨趣 豫申合候処 何茂同様之儀ニて候事
 太郎左衛門 右躰之振廻故 須佐ニ而出萩之段

*1 嘲哂(ちょうろう) = あざけりなぶる。ばかにする。

石出より我輩ら出立を茂仕せ申間敷儀
二付執事江中江罷出出候儀工他心儀
お徳一人立帰同志之者江お取立用事
出候事

一 小国融藏儀者此度之大変二付父彦七
萩在役之儀いづれ之に底二而ケ様之取計
仕候哉 其身之上も甚氣遣敷存候故 聞
懸ケ早速致出萩 年寄を以承諾候処
彦七儀者 一向存不申儀 身柄無別条由

承之 一方致安心 此余御為筋之儀二付
所存も有之候得共 聞懸ケ 俄二致出足候故
須佐御用所届無二罷出候故 罷歸候事
奈古二而幸便有之 親族之方江届之儀
頼遣シ 彼駅二致止宿 明日又々出萩可
致と存候内 須佐出之者二出會 一同二罷
出候事
一 三月廿九日未明二又々跡ヨリ吉人来添 十式人二
相成候 只様人数相加リ 夜明二而者 道中

【80頁】

届出候而茂 決而出立を茂仕せ申間敷儀
二付 執茂道中江罷出 出萩之届手紙
相認 一人立帰同志之者江相頼 御用所
差出候事

一 小国融藏儀者 此度之大変二付 父彦七
萩在役之儀 いか様之心底二而 ケ様之取計
仕候哉 其身之上も甚氣遣敷存候故 聞
懸ケ早速致出萩 年寄を以承諾候処
彦七儀者 一向存不申儀 身柄無別条由

【81頁】

承之 一方致安心 此余御為筋之儀二付
所存も有之候得共 聞懸ケ 俄二致出足候故
須佐御用所届無二罷出候故 罷歸候事
奈古二而幸便有之 親族之方江届之儀
頼遣シ 彼駅二致止宿 明日又々出萩可
致と存候内 須佐出之者二出會 一同二罷
出候事

一 三月廿九日未明二又々跡ヨリ吉人来添 十式人二
相成候 只様人数相加リ 夜明二而者 道中

之見入颯々敷者有之間敷哉と三手二
 相分り 御城下入込之節者 行路を分ち
 候而 松本御下屋敷注¹ 御川屋敷注² 江一應
 落付 随分穩便二仕 御本屋敷江追々二
 落付申候人数左之通
 松原勘五郎 栗山藤蔵 大谷伊八
 小国融蔵 城市軍次 多根茂右衛門
 増野多中 金子順平 仲井半蔵
 松原源五郎 吉賀兵之進 大草甚右衛門

右之面々言上之趣申合候処 孰茂同様之事
 候故 一紙二相調 御歎可申上と示合せ候内
 在秋之詰懸り中 追々寄集り 様子を
 相尋候故 御為二付候而之申上事 全私
 事二而無之二付 委細申聞せ候所 詰懸り
 之内ニモ今度之変ニ付候而者 須佐之様子
 委敷承り申候上者 御歎候も可申上心底二罷
 在候 然時者 一紙二相調候而 可差出と申合
 猶又 兼々忠志を見続候者を者 詰懸りヨリ

【82頁】

之見入颯々敷者有之間敷哉と三手二
 相分り 御城下入込之節者 行路を分ち
 候而 松本御下屋敷注¹ 御川屋敷注² 江一應
 落付 随分穩便二仕 御本屋敷江追々二
 落付申候人数左之通

松原勘五郎 栗山藤蔵 大谷伊八
 小国融蔵 城市軍次 多根茂右衛門
 増野多中 金子順平 仲井半蔵
 松原源五郎 吉賀兵之進 大草甚右衛門

【83頁】

右之面々言上之趣申合候処 孰茂同様之事
 候故 一紙二相調 御歎可申上と示合せ候内
 在秋之詰懸り中 追々寄集り 様子を
 相尋候故 御為二付候而之申上事 全私
 事二而無之二付 委細申聞せ候所 詰懸り
 之内ニモ今度之変ニ付候而者 須佐之様子
 委敷承り申候上者 御歎候も可申上心底二罷
 在候 然時者 一紙二相調候而 可差出と申合
 猶又 兼々忠志を見続候者を者 詰懸りヨリ

*1 松本御下屋敷 =
 *2 御川屋敷 =
 *3 御本屋敷 =

示合と一同二御歎申上候 尤連書之申出 黨を
 結二似寄候半歟 此段奉恐入候得共 私之
 持方ホと以御厄害を申上筋二而も無之
 持方ホと奉考忠義二凝一之命と抛手不
 尋常儀を申上事二候得者
 上御賢明を以 御聞濟シ有之候時者 其段
 者 御仁恕を茂可被遊御事と一決仕候而
 申出之次第左之通

御歎申上候事

宅野太郎左衛門儀 被仰付候御政道筋 事二より
 候而者 小原権六・小国彦七八一向相聞不申様
 承り候 御政道筋之儀者 三職申談 御伺
 をも可仕筈之処 太郎左衛門取捌 甚以不可然
 奉存候 右之故 御家来中一和仕 自然と
 御不為筋出来仕候 御家来中一和何寄
 以肝要之儀二御座候処 所詮 只今之通
 二而者 一和之期二至り不申
 御上下之氣毒不過之奉存候 依茲

【84頁】

示合せ 一同二御歎申上候 尤連書之申出 黨を
 結二似寄候半歟 此段奉恐入候得共 私之
 持方等を以 御厄害を申上筋二而も無之
 御為を奉考 忠義二凝候而 一命を抛手不
 尋常儀を申上事二候得者
 上御賢明を以 御聞濟シ有之候時者 其段
 者 御仁恕を茂可被遊御事と一決仕候而
 申出之次第左之通

御歎申上候事

【85頁】

宅野太郎左衛門儀 被仰付候御政道筋 事二より
 候而者 小原権六・小国彦七八一向相聞不申様
 承り候 御政道筋之儀者 三職申談 御伺
 をも可仕筈之処 太郎左衛門取捌 甚以不可然
 奉存候 右之故 御家来中一和仕 自然と
 御不為筋出来仕候 御家来中一和何寄
 以肝要之儀二御座候処 所詮 只今之通
 二而者 一和之期二至り不申
 御上下之氣毒不過之奉存候 依茲

若し其の指し役等最易後役之候に
 様之度七の御意 御賢慮を以 御為
 宜敷人柄江被仰付候様奉存候 且又
 増野作左衛門 入江左次馬 柴田十郎左衛門 御聞込之
 筋有之 先逼塞被仰付候 然処 右人数八
 孰茂忠勤を励候もの共二御座候得者
 御慈悲を以被遂 御救免 被下候様 奉願候
 誓約前茂有之二付 御歎申出候間 何卒

先般 御意を以茂被仰聞氣付之筋も
 有之候時者 一分々々を以申出候様との御事
 奉得其旨候 然処 此度之儀者 急難差起
 太郎左衛門右躰之取捌二而者 御家いか程之
 御大難可致出来哉難計 乍恐 私共一同
 之氣付二付 連名を以御歎申出候間 旁
 之趣可然御取計可被下候 頼存候 以上

【86頁】

太郎左衛門儀 御役被差易 後役之儀者
 権六・彦七江被仰聞 御賢慮を以 御為
 宜敷人柄江被仰付候様奉存候 且又
 此度 窪田彦右衛門 椋小左衛門被召捕 波田太郎右衛門
 増野作左衛門 入江左次馬 柴田十郎左衛門 御聞込之
 筋有之 先逼塞被仰付候 然処 右人数八
 孰茂忠勤を励候もの共二御座候得者
 御慈悲を以被遂 御救免 被下候様 奉願候
 誓約前茂有之二付 御歎申出候間 何卒

【87頁】

被差免被下候様奉存候 左候而 太郎右衛門
 十郎左衛門儀者 帰役被仰付被下候様奉願候
 先般 御意を以茂被仰聞氣付之筋も
 有之候時者 一分々々を以申出候様との御事
 奉得其旨候 然処 此度之儀者 急難差起
 太郎左衛門右躰之取捌二而者 御家いか程之
 御大難可致出来哉難計 乍恐 私共一同
 之氣付二付 連名を以御歎申出候間 旁
 之趣可然御取計可被下候 頼存候 以上

二月廿九日

松原勘五郎	松原左衛門	松原昌見
栗山藤藏	大谷伊八	松原源五郎
仁保内蔵	内藤正左衛門	小国融藏
松原利右衛門	城市軍次	田根茂右衛門
増野多中	吉賀兵之進	金子順平
増野智兵衛	仲井半蔵	松原源五郎
大草甚右衛門	重富良助	松井七右衛門
野村文次	荻野孫右衛門	大谷源吾

三好源之進	多治右衛門	品川昌見
城市屯	村岡幾之進	三輪五郎
宅野伴内	松野繁	秋山作之進
品川小才		

益田勘右衛門殿

一 當時在秋當役中 益田勘右衛門 小原権六
 小国彦七二而候得共 権六・彦七者 身通之儀
 有之候故 名前相除候而 差出候事

【88頁】

三月廿九日

松原勘五郎	松原文左衛門	松本良左衛門
栗山藤藏	大谷伊八	松原八郎右衛門
仁保内蔵	内藤正左衛門	小国融藏
松原利右衛門	城市軍次	田根茂右衛門
増野多中	吉賀兵之進	金子順平
増野 左衛門	仲井半蔵	松原源五左衛門
大草甚右衛門	重富良助	松井七右衛門
野村文次	荻野孫右衛門	大谷源吾

三好源之進	多治右衛門	品川昌見
城市屯	村岡幾之進	三輪五郎
宅野伴内	松野繁	秋山作之進
品川小才		

益田勘右衛門殿

一 當時在秋當役中 益田勘右衛門 小原権六
 小国彦七二而候得共 権六・彦七者 身通之儀
 有之候故 名前相除候而 差出候事

【89頁】

一 右申出候内、孝貞の御後、御後之儀を様立候也。
 御賢慮を以被相調候、是等之御
 用筋者、勿論不能申上、御聞せをも可被成儀二
 候得共、此度之御咎一件も、廉有儀二候へ共
 兩人江者、未然二御聞せ不被成儀故、為念申出
 仕候、其上當役中之内二而も、萩・須佐職座
 之儀者、別而一致不仕而者、御不為之儀と
 奉存候故、旁勿論之儀ながら申上仕候事
 右書附、御用所江持参、勘右衛門江引渡候処

一 覽之上請込相成候事
 右御歎、連名之内、宅野伴内、松野繁
 儀者、書付差出候已後、不同意之由、益田
 勘右衛門江申出候通相聞候、勿論、多勢を催候
 心底無之儀二付、其分二而差置候事
 同夜、志兩人御用所罷出候様との儀二付
 大組兩人・御手廻兩人罷出候処、益田勘右衛門
 申聞せ候者、申出之趣及御聞候処、可被遊
 御吟味との御事二候、且、此度之儀者

【90頁】

一 右申出候内二、太郎左衛門後役之儀者、権六・彦七江
 被仰聞、御賢慮を以被相調候、是等之御
 用筋者、勿論不能申上、御聞せをも可被成儀二
 候得共、此度之御咎一件も、廉有儀二候へ共
 兩人江者、未然二御聞せ不被成儀故、為念申出
 仕候、其上當役中之内二而も、萩・須佐職座
 之儀者、別而一致不仕而者、御不為之儀と
 奉存候故、旁勿論之儀ながら申上仕候事
 右書附、御用所江持参、勘右衛門江引渡候処

【91頁】

一 覽之上請込相成候事
 右御歎、連名之内、宅野伴内、松野繁
 儀者、書付差出候已後、不同意之由、益田
 勘右衛門江申出候通相聞候、勿論、多勢を催候
 心底無之儀二付、其分二而差置候事
 同夜、志兩人御用所罷出候様との儀二付
 大組兩人・御手廻兩人罷出候処、益田勘右衛門
 申聞せ候者、申出之趣及御聞候処、可被遊
 御吟味との御事二候、且、此度之儀者

御末家様方へも被仰合候間 急二埒明
 候様二者無之候条 早速引取候様との
 儀二付 被仰聞之旨 奉得其意候 乍尔
 此度之儀者 銘々覚悟を究罷出候
 得者 歎出之筋有無之所被仰出候上 乍恐
 御家御安堵之御萌を 不奉見而者 引
 取候様難仕候間 夫迄者 御屋敷端二滞
 留被仰付被下候様奉存候 乍尔 被仰聞
 之旨一統へも申聞せ候而 趣申出可仕と

右邊下り執事口令如今度申出之
 次第 甚以不容易儀 孰茂身命を抛
 罷出候儀二候得者 何分 御家御安堵之
 御萌を御見請不仕而者 引取間却と
 銘々思詰候而申談 猶在萩之者と而も
 同様之心得二候得者 何分之被仰出有之
 迄者 全ク帰シ候様不相成と申候二付 又々
 御用所罷出 孰へ茂申聞候処 何分
 御家御安堵之御萌を奉見候迄者 引取

【92頁】

御末家様方へも被仰合候間 急二埒明
 候様二者無之候条 早速引取候様との
 儀二付 被仰聞之旨 奉得其意候 乍尔
 此度之儀者 銘々覚悟を究罷出候
 得者 歎出之筋有無之所被仰出候上 乍恐
 御家御安堵之御萌を 不奉見而者 引
 取候様難仕候間 夫迄者 御屋敷端二滞
 留被仰付被下候様奉存候 乍尔 被仰聞
 之旨一統へも申聞せ候而 趣申出可仕と

【93頁】

相演罷下り 孰茂申合候処 今度申出之
 次第 甚以不容易儀 孰茂身命を抛
 罷出候儀二候得者 何分 御家御安堵之
 御萌を御見請不仕而者 引取間却と
 銘々思詰候而申談 猶在萩之者と而も
 同様之心得二候得者 何分之被仰出有之
 迄者 全ク帰シ候様不相成と申候二付 又々
 御用所罷出 孰へ茂申聞候処 何分
 御家御安堵之御萌を奉見候迄者 引取

と之始あ仕也
 益田因^{益田}下^下り申事^{申事}由^由 勘右衛門方江相演
 候内 益田次郎三郎方 今夜出萩二而
 御前ヨリ罷下り申間候者 何分引取可然と
 御父子様被思召候段申間候付 又々一統江
 申聞せ仕候而 可有御座と相答候 権六・彦七
 ヲリ茂何分引取候様
 御父子様被思召候段 申聞せ有之候二付
 此上者 出萩之銘々 御留仕候而者 不御為
 儀有之間敷事二而も無之 何分御為
 才一之儀と種々申合候得共 前段 太郎左衛門
 被差易候様二と申出 須佐引取候而 彼者
 下知を請候様有之候而者 士道難相立
 乍去 御為筋と候時者 御重恩之各 自
 身之節操を立貫候儀全無之 いか様二
 候ても 御為宜敷可取計儀と色々
 申合候処 各須佐引取候時者 御家来多
 人数之内 又々別人出萩御歎之程も難
 計 其上 此度之御咎人六人之内 両人者

【94頁】

を者 得不仕由申事之由 勘右衛門方江相演
 候内 益田次郎三郎方 今夜出萩二而
 御前ヨリ罷下り申間候者 何分引取可然と
 御父子様被思召候段申間候付 又々一統江
 申聞せ仕候而 可有御座と相答候 権六・彦七
 ヲリ茂何分引取候様
 御父子様被思召候段 申聞せ有之候二付
 此上者 出萩之銘々 御留仕候而者 不御為
 儀有之間敷事二而も無之 何分御為

【95頁】

第一之儀と種々申合候得共 前段 太郎左衛門
 被差易候様二と申出 須佐引取候而 彼者
 下知を請候様有之候而者 士道難相立
 乍去 御為筋と候時者 御重恩之各 自
 身之節操を立貫候儀全無之 いか様二
 候ても 御為宜敷可取計儀と色々
 申合候処 各須佐引取候時者 御家来多
 人数之内 又々別人出萩御歎之程も難
 計 其上 此度之御咎人六人之内 両人者

トリ未と作付申上り候迄は故に殘ル四人
 其儀也申上り候者其儀也申上り候者
 承り申上り候者又此度之取計萩當役者
 不存様申儀 伝承り候時者 悉皆 太郎左衛門
 所為と相心得 太郎左衛門と遂同死候方 忠義
 端と落着仕間敷物二ても無之 千万一
 左様共 有之候而者 不相濟儀 人心平穩
 なる時者 是等之儀者 得と勘弁可仕候へ共

危急之期ニ臨ミ候而者 世人之不料作廻を
 仕出可申程も難計ニ付 何分各滞萩仕候
 方 先八穩便之筋ニも相当可申哉と 孰も
 申合 又々御用所江罷出 御家御安堵之
 御萌を奉見候迄者 御屋敷端ニ滞留
 被仰付被下候様 御歎申上候 随分穩便ニ
 仕 須佐引取候も同様ニ 相慎居可申段申
 入仕候而 無據用事ニ罷立候二茂 時刻
 之差引仕 外人之目ニ當リ不申様 相慎

【96頁】

トリ注1等被仰付 番等被付置候得共 残ル四人
 者其儀も無之 此者共も太郎左衛門 兼而之
 取計筋不得其意段 追々物語仕候をも
 承り居候儀 況又此度之取計 萩當役者
 不存様申儀 伝承り候時者 悉皆 太郎左衛門
 所為と相心得 太郎左衛門と遂同死候方 忠義
 端と落着仕間敷物二ても無之 千万一
 左様共 有之候而者 不相濟儀 人心平穩
 なる時者 是等之儀者 得と勘弁可仕候へ共

【97頁】

危急之期ニ臨ミ候而者 世人之不料作廻を
 仕出可申程も難計ニ付 何分各滞萩仕候
 方 先八穩便之筋ニも相当可申哉と 孰も
 申合 又々御用所江罷出 御家御安堵之
 御萌を奉見候迄者 御屋敷端ニ滞留
 被仰付被下候様 御歎申上候 随分穩便ニ
 仕 須佐引取候も同様ニ 相慎居可申段申
 入仕候而 無據用事ニ罷立候二茂 時刻
 之差引仕 外人之目ニ當リ不申様 相慎

*1 トリ = 不明。「ト」(ぼく)、「臣」(しん、おみ)など。

一 前文ニ若見ハ今度ノ儀ニ由ルモ御末家ノ
 儀々ト仰合々ト申上ル所ナリト申上ル所
 多ク御末家ノ儀々ト申上ル所ナリト申上
 ル所ナリト申上ル所ナリト申上ル所ナリ
 仕立ト申上ル所ナリト申上ル所ナリト申上
 此度ノ儀々ト申上ル所ナリト申上ル所ナリ
 御末家様ノ儀々ト申上ル所ナリト申上ル所
 ナリト申上ル所ナリト申上ル所ナリト申上

御家御為筋之儀者
 御父子様江申上候上者 勿論申上も可仕儀
 二付 其段物筋江相届候而 益田清之助様
 御宅江罷越 御直二申上度段 相演候得共
 御機嫌相注3故 御相對不被為成候 夫ヨリ益田
 頼母様注4御宅罷出候得共 御彼方様二も御
 機嫌相二而 御相對不被為成由二而 年寄
 兩人被差出候得共 御直二對候而無之而者
 難申述儀二付 罷出候趣者追々可被聞召

【98頁】

罷在候 夫故 御當役中を始メ 御目付方
 よりも一度も制止二預り候儀も無之候事
 一 前文ニ相見候通 今度之儀者 御末家中
 様と被仰合と之御事 勘右衛門ヨリ申聞世有之
 候故 多人數之内二者 追々存附有之 何分
 此度之趣 先達而 御末家様方江申上
 仕置候八、御歎筋被仰合候節 御評論之
 御便二も可相成候間 罷出候様申儀二付
 御末家様之儀者 外御親類様共違

【99頁】

御家御為筋之儀者
 御父子様江申上候上者 勿論申上も可仕儀
 二付 其段物筋江相届候而 益田清之助様注2
 御宅江罷越 御直二申上度段 相演候得共
 御機嫌相注3故 御相對不被為成候 夫ヨリ益田
 頼母様注4御宅罷出候得共 御彼方様二も御
 機嫌相二而 御相對不被為成由二而 年寄
 兩人被差出候得共 御直二對候而無之而者
 難申述儀二付 罷出候趣者追々可被聞召

*2 益田清之助 = 寄組益田親愛、初兼充、次親賢、清之助。益田玄蕃元祥二男景祥家系。4,096石、山口問田深野、小郡且村下郷、舟木中山、奥阿武吉部内麻生深谷。

*3 相 = よくない。御機嫌相。気分相。

*4 益田頼母 = 寄組益田房実、初兼豹、頼母。実内藤与三右衛門広方三男、益田玄蕃元祥五男就景家系。1,067石。小郡陶、前大津三隅津黄。享和元年四月十二日卒。44歳。



【100頁】

候得者 御取次を者御頼申間敷段申入
 夫ヨリ益田隼人様注¹ 周布左平太様注²へも罷出
 度存候内 最早夜も明ケ 道中之濡レ衣
 類 人目も怪敷有之候故 直様罷帰候
 何分近々御末家様方二も被聞召上儀二
 候得者 必先達而申上二も及申間敷
 此上者只々穩便二相慎三 被仰出之旨を
 相待居可申と各申合候事

一 四月四日 御末家中様 益田助左衛門殿注³ 御前

【101頁】

二而出萩之面々 被成御相對 様子可被聞召候
 尤出萩之者不残と候而者多人数 颯々敷
 有之候間 両三人可被召出と之御事 権六・
 彦七を以被仰聞候 孰茂此度之儀者
 忠義二凝 身命を抛 罷出候儀二候へ共 御直二
 可被聞召と之儀 別而 難有次第二候 猶在
 勤之内二も去冬已来之一件二付候而 可
 被聞召と之儀二候八、何とそ罷出度抔と
 申者も有之候得共 出萩之者と被仰聞

*1 益田隼人 = 寄組益田就雄、初兼雄、富五郎、隼人。依父就昌早世從祖父広道相続也。文政十年四月十二日卒。72歳。益田玄蕃元祥四男就之家系。1,086石。奥阿武木与、小郡小侯。
 *2 周布左平太 =
 *3 益田助左衛門 =

其指且取三人之指所指之指之取人数
 其有可然之指者之指者之指何之上出
 萩之内ヨリ四人罷出候 御書院後座敷
 二而 益田清之助様 益田頼母様 益田
 隼人様 周布左平太様 益田助左衛門殿 御列
 座二而 権六・彦七を茂御一席江被召出
 御相当之御挨拶有之 去冬已来之儀
 可被聞召候間 無覆蔵申上仕候様二と之
 御事二付 左之通相演候

【102頁】

候儀 且両三人と被仰出候儀二候得者 多人數
 者 不可然と権六・彦七申候付 御伺之上 出
 萩之内ヨリ四人罷出候 御書院後座敷
 二而 益田清之助様 益田頼母様 益田
 隼人様 周布左平太様 益田助左衛門殿 御列
 座二而 権六・彦七を茂御一席江被召出
 御相当之御挨拶有之 去冬已来之儀
 可被聞召候間 無覆蔵申上仕候様二と之
 御事二付 左之通相演候

【103頁】

御當家御所帶至而御差詰 過ル巳ノ年
 非常之御俵約被仰出候得共 御所帶御
 取直之御目途も無御座
 御當代様注1 御代初 天明六年御ケ条被
 差出 其後追々御書附被差出 繁雜二
 相成 御難渋之御所帶向二て 御法令難
 相立 結句御不為之御事二付 去冬
 御家来一統二忠志を発シ 職役 増野
 舍人 當役 俣賀次郎左衛門 御役被指替

*1 御當代様 = 益田就恭 (なりやす)

たり候程天取古事之後より御書附
 不殘封込之御書付より御書附上
 宅野太郎左衛門 次郎左衛門後役 小原権六
 小国彦七江被仰付 前断大壮之御願
 とも申上候 已後 被召出候儀二御座候得者
 三人共二肝要之所 勘場一廉 御為
 宜敷取捌不仕而者 不相叶儀 別而
 太郎左衛門儀 須佐引請二而八大任二而御座

【104頁】

被下候様 猶天明六年已後之御書附
 不殘 封込二被仰付被下候様 御願申上
 候処 御願被遂御許容候 舍人後役
 宅野太郎左衛門 次郎左衛門後役 小原権六
 小国彦七江被仰付 前断大壮之御願
 をも申上候 已後 被召出候儀二御座候得者
 三人共二肝要之所 勘場一廉 御為
 宜敷取捌不仕而者 不相叶儀 別而
 太郎左衛門儀 須佐引請二而八大任二而御座

宅野最初より高島節と善親疎申合候
 者共者 追々内々存寄を相加候 就中
 窪田彦右衛門儀者 太郎左衛門取捌筋 不宜
 存候而 御為を奉考 何角と及議論
 申候内 太郎左衛門儀 善悪共二奉從
 君と申候故 彦右衛門 兼而勇氣之生質二
 御座候故 太郎左衛門を諂諛之人と存 深く
 恥しめ及争論候 且又 御家老中之
 儀者 前断御家来一統ヨリ 御願申上候

【105頁】

候故 最初ヨリ御為筋を無親疎申合候
 者共者 追々内々存寄を相加候 就中
 窪田彦右衛門儀者 太郎左衛門取捌筋 不宜
 存候而 御為を奉考 何角と及議論
 申候内 太郎左衛門儀 善悪共二奉從
 君と申候故 彦右衛門 兼而勇氣之生質二
 御座候故 太郎左衛門を諂諛之人と存 深く
 恥しめ及争論候 且又 御家老中之
 儀者 前断御家来一統ヨリ 御願申上候

程二 御家御危急之場 二行懸候迄
 何之無所為 打遣候段 重職二乍居
 取計筋モ可有之儀 御為を不存人
 柄と最初ヨリ 太郎左衛門 遮而相述候処 只
 今二相成候而者 御家老中を而已申談
 權六・彦七を初 最初御為筋を申談候
 銘々と者 隔意二罷成 先之所存と者
 表裏二罷成候 其上此度御咎人之
 御沙汰筋 古來稀成儀二御座候處
 權六・彦七者一切相聞せ不申 只今之通
 二而者 御家來一和不仕候故 太郎左衛門退役
 被仰付被下候様 御願申上候 尚此度御咎
 之面々 一切私曲等之越度無御座 忠
 義二逸り候而之取作廻 太郎左衛門所存
 と相違二付 罪科を求候而 申上仕
 たる類モ有之儀と相見申候 其上過失
 御究之儀者 兼而持方正直二而 依怙
 無之人柄江祐 可被仰付儀二御座候処

【106頁】

【107頁】

願々敷無之様 随分心配仕 御屋敷へも
 目立不申様 追々二入込仕 穩便二相慎
 罷在候 於御家来中も 御為筋之儀
 聊忘却不仕 先年御所帶御差詰二
 付 御領分市味と申所 御上地二相成居
 候 御分高之減少者 暫シか間二而も不容易
 儀 其上古来ヨリ御預り之御国境注一肝要
 之所柄二付 一統申合せ 借銀仕 御請返
 之目論見をも仕候 當今乍恐

【108頁】

御賢明之御時節 一廉被遊御取 被
 盡御節儉 御旅役其外非常之御手
 當等茂 被為成候様無御座而者 御大事
 出来可仕哉と 甚以 奉恐入候儀二御座候
 何分 御家御成立被成 御為宜敷様
 被仰合被下候様奉願候事
 右之通演説二而申上候 四人之者代ル、
 申上候儀 言舌と文章次第不同者可
 之候得共 大概前出之旨を申上候處 被

【109頁】

願々敷無之様 随分心配仕 御屋敷へも
 目立不申様 追々二入込仕 穩便二相慎
 罷在候 於御家来中も 御為筋之儀
 聊忘却不仕 先年御所帶御差詰二
 付 御領分市味と申所 御上地二相成居
 候 御分高之減少者 暫シか間二而も不容易
 儀 其上古来ヨリ御預り之御国境注一肝要
 之所柄二付 一統申合せ 借銀仕 御請返
 之目論見をも仕候 當今乍恐

*1 古来ヨリ御預り之御国境 = 石州境仏坂関門の防衛は防長両国の北の守りて、関ヶ原以後益田家が担当した。市味村は現萩市田万川地区の村で仏坂街道筋にあり、仏坂関門に最も近い村である。

御召上候而 被仰聞候者 各方申出候筋も
 御為を奉考候故之儀 於御末家中候而も
 御為を奉考候儀 追々趣次第御尋被成
 儀茂可有之候間 後々滞萩仕候様被仰聞
 候故 幾重も 御為宜敷様被仰合被下
 候様奉希候段 申上罷下候事
 一 四月廿一日 各出萩後数日を経 御末家様方
 追々御集談も御座候得共 尔今為何 被仰出も
 無之候 於須佐者 太郎左衛門取計二て 怨敵退
 行る之由也
 散と号シ 密々二御祈祷執行仕らせ候由
 且 各同志之内 若年之者江窃二申聞候者
 何とそ時者
 上御味方を仕候へと申聞候由 案外千萬
 之心得 甚不穩儀二候 右躰之心底二而
 取計候時者 此上無筋之儀申上間敷事
 二茂無之二付 各心底之所を明固二神
 明二誓 上書仕可然哉 乍尔 時節と者
 乍申 御譜代之銘々 如此儀を改而申上

【110頁】

御召上候而 被仰聞候者 各方申出候筋も
 御為を奉考候故之儀 於御末家中候而も
 御為を奉考候儀 追々趣次第御尋被成
 儀茂可有之候間 後々滞萩仕候様被仰聞
 候故 幾重も 御為宜敷様被仰合被下
 候様奉希候段 申上罷下候事
 一 四月廿一日 各出萩後数日を経 御末家様方
 追々御集談も御座候得共 尔今為何 被仰出も
 無之候 於須佐者 太郎左衛門取計二て 怨敵退

【111頁】

散と号シ 密々二御祈祷執行仕らせ候由
 且 各同志之内 若年之者江窃二申聞候者
 何とそ時者
 上御味方を仕候へと申聞候由 案外千萬
 之心得 甚不穩儀二候 右躰之心底二而
 取計候時者 此上無筋之儀申上間敷事
 二茂無之二付 各心底之所を明固二神
 明二誓 上書仕可然哉 乍尔 時節と者
 乍申 御譜代之銘々 如此儀を改而申上

之禮也外子... 是北次子...
 之相黃泉之下... 無是非次第...
 冥魂... 各先祖...
 不弁... 各迎...
 無實之讓... 間々有之...
 儀 況薄劣之身 其難可恐事二候得者
 右誓言仕候八、神明感心も有之、攘災
 二七、若相成哉 第一前段取捌二而者 色々
 無実之儀申上 若茂御疑惑共被為在
 候時者 御賢慮を奉安候端共相成
 可申儀と 彼是衆評有之 何分赤心之
 所誓 言上書可仕と相決 左之通相調
 候事

神文前書之文

宅野太郎左衛門取捌筋 御為不宜奉存
 候付 御役被差替被下候様御歎申上
 候所被 聞召上 可被遊御吟味之段
 被仰聞 奉得其旨候 然処 近比承候へ者

【112頁】

候段 心外千萬之至 無是非次第 ケ様
 之儀 黄泉注¹之下江茂通シ候八、各先祖
 靈魂いか程か無本意可存 各迎も其儀
 不弁二ても無之候得共 古来名高歴々も
 無實之讓二而忠志を不遂事 間々有之
 儀 況薄劣之身 其難可恐事二候得者
 右誓言仕候八、神明感心も有之、攘災
 二も可相成哉 第一前段取捌二而者 色々
 無実之儀申上 若茂御疑惑共被為在

【113頁】

候時者 御賢慮を奉安候端共相成
 可申儀と 彼是衆評有之 何分赤心之
 所誓 言上書可仕と相決 左之通相調
 候事

神文前書之事

宅野太郎左衛門取捌筋 御為不宜奉存
 候付 御役被差替被下候様御歎申上
 候所被 聞召上 可被遊御吟味之段
 被仰聞 奉得其旨候 然処 近比承候へ者

*1 黄泉（よみ）= 死者が住んでいると信じられている国。

右は歎也... 御許容候上二モ 何ぞ
 於下所存有之候様 當役中之内二茂 疑
 念之族有之二而者無御座哉 其趣者
 太郎左衛門儀 兼而腹心之人柄江申聞せ候者
 自然之時者注2 御味方仕候様二申入候由 いか
 様之心得を以 右躰之申方二御座候哉
 於私共者御譜代之銘々 何ぞ利心可有
 御座哉 太郎左衛門申方 甚以不審千萬 不
 穩儀二御座候 右等之次第二而者 いか様之
 讓言仕候哉も難計 氣毒千萬 至而
 心痛仕罷居候 畢竟 太郎左衛門退役之
 御願申上候も 御家来中一和仕 奉遂其
 節度所存二御座候得共 萬事
 御上御為宜敷 偏二 御家御繁栄
 奉祈候外 別心無御座候 改而 不能申上
 儀二御座候得共 此御時節之儀二付 乍恐
 私共心底之所 神文を以申上候 以上
 右於偽申上者... 神文略之

【114頁】

【115頁】

*2 自然之時者 = 万が一の時は。

松原勘五郎 松原文左衛門 松本良左衛門
 栗山藤蔵 大谷伊八 松原八郎右衛門
 内藤正左衛門 仁保内蔵 小国融蔵
 松原利右衛門 多根茂右衛門 金子順平
 城市軍次 増野貞左衛門 増野多中
 仲井半蔵 吉賀兵之進 松原源五左衛門
 大草甚右衛門 荻野孫右衛門 兼重三左衛門
 重富竜助 三好源之進 大谷源吾
 野村文次 三輪五郎 多々治右衛門
 城市 屯 松井七右衛門 品川昌見
 秋山作之進 渡辺源助 品川小才
 大谷徳左衛門 近藤直之進 松野甚五右衛門
 鈴川次郎左衛門 村岡幾之進 仲井玄桂
 神原由軒 横山東仙 高本道慶
 河村牧太 永富次郎左衛門 永富春斎
 松野永次 田原弥五右衛門 椋木六右衛門
 品川玄道 充無シ

【116頁】

【117頁】

松原勘五郎 松原文左衛門 松本良左衛門
 栗山藤蔵 大谷伊八 松原八郎右衛門
 内藤正左衛門 仁保内蔵 小国融蔵
 松原利右衛門 多根茂右衛門 金子順平
 城市軍次 増野貞左衛門 増野多中
 仲井半蔵 吉賀兵之進 松原源五左衛門
 大草甚右衛門 荻野孫右衛門 兼重三左衛門
 重富竜助 三好源之進 大谷源吾
 野村文次 三輪五郎 多々治右衛門
 城市 屯 松井七右衛門 品川昌見
 秋山作之進 渡辺源助 品川小才
 大谷徳左衛門 近藤直之進 松野甚五右衛門
 鈴川次郎左衛門 村岡幾之進 仲井玄桂
 神原由軒 横山東仙 高本道慶
 河村牧太 永富次郎左衛門 永富春斎
 松野永次 田原弥五右衛門 椋木六右衛門
 品川玄道 充無シ

右之内先之御歎出二者連名無之人柄也
 有之候得共是八追而様子承知二而御
 歎筋追而承り同意二存候間何分御
 歎出仕候者同様二被仰付候様二物筋江
 申出此度之神文江相加り候事
 右之通相調候得共此儀表方物筋江差出
 筋候て茂有之間敷二付同志之内御側近ク
 被召仕候者江一統ヨリ取計相頼候一応者
 可然と同意仕受相候處其後何そ不任
 不任候者之申付候て及
 上達候儀二而者無之候其上此度之一件二付
 御評論之儀者御末家様江御任せ切之儀と
 相聞候得者御末家様江申上可然事二て者
 無之哉と申儀二付彼是申合候処君臣
 之間者有犯注一而無隱道理と承り候得者心
 底聊覆蔵不仕儀故前文之上書可仕と
 相決候得共御末家様江申上候儀者いか可有
 之哉と又致評論候処御末家様之儀者

【118頁】

右之内 先之御歎出二者 連名無之人柄也
 有之候得共 是八追而様子承知二而 御
 歎筋追而承り同意二存候間 何分御
 歎出仕候者同様二被仰付候様二 物筋江
 申出 此度之神文江相加り候事

【119頁】

右之通相調候得共 此儀表方物筋江差出
 筋候て茂 有之間敷二付 同志之内 御側近ク
 被召仕候者江 一統ヨリ取計 相頼候 一応者
 可然と同意仕 受相候處 其後何そ不任
 不任候者之申付候て及
 上達候儀二而者無之候 其上此度之一件二付
 御評論之儀者 御末家様江御任せ切之儀と
 相聞候得者 御末家様江申上 可然事二て者
 無之哉と申儀二付 彼是申合候処 君臣
 之間者有犯注一而 無隱道理と承り候得者 心
 底聊覆蔵不仕儀故 前文之上書可仕と
 相決候得共 御末家様江申上候儀者 いか可有
 之哉と又致評論候処 御末家様之儀者

*1 犯 杞力？

他家と申論二八至り申間敷 苦かる間敷
 儀と致一決 同志之者三人 御末家様方
 御評論之席江罷出 右之書附申上仕候処
 被聞召趣次第
 上江茂可被仰上由二て 被成御留置候事
 一 四月廿六日小原権六・小国彦七ヨリ申聞せ有之
 候者 先達而申出之次第 被聞召上 此度之
 儀者 御末家様方江 御判断被成御頼候処
 此内追々被仰合之次第 別紙之通二御座候
 尤只今屹と別紙之通二御沙汰被仰付と申
 分け二て者無御座候 御内評之所 下江茂被成
 御聞世候 此余何そ趣も有之候八、可被聞召
 と之御事二候 尤世評茂可有之候得者 早く
 何分之御沙汰可被仰出候間 趣茂有之候八、
 早速書調候而 差出候様と申聞せ有之候
 且又當春 大組・御手廻・四組ヨリ三職まで
 差出候廉書之写江 御末家様方思召
 之所 夫々被成御附紙 被差下候由二而

【120頁】

他家と申論二八至り申間敷 苦かる間敷
 儀と致一決 同志之者三人 御末家様方
 御評論之席江罷出 右之書附申上仕候処
 被聞召趣次第
 上江茂可被仰上由二て 被成御留置候事
 一 四月廿六日小原権六・小国彦七ヨリ申聞せ有之
 候者 先達而申出之次第 被聞召上 此度之
 儀者 御末家様方江 御判断被成御頼候処
 此内追々被仰合之次第 別紙之通二御座候

【121頁】

尤只今屹と別紙之通二御沙汰被仰付と申
 分け二て者無御座候 御内評之所 下江茂被成
 御聞世候 此余何そ趣も有之候八、可被聞召
 と之御事二候 尤世評茂可有之候得者 早く
 何分之御沙汰可被仰出候間 趣茂有之候八、
 早速書調候而 差出候様と申聞せ有之候
 且又當春 大組・御手廻・四組ヨリ三職まで
 差出候廉書之写江 御末家様方思召
 之所 夫々被成御附紙 被差下候由二而

引渡有之候執事口合拜見之仕由相
渡而下候事

竹下屋書之儀と別紙有之

御末家様方ヨリ被差下候御書物与志通
宅野家様方ヨリ被差下候御書物与志通
宅野家様方ヨリ被差下候御書物与志通
宅野家様方ヨリ被差下候御書物与志通
宅野家様方ヨリ被差下候御書物与志通
宅野家様方ヨリ被差下候御書物与志通
宅野家様方ヨリ被差下候御書物与志通
宅野家様方ヨリ被差下候御書物与志通
宅野家様方ヨリ被差下候御書物与志通
宅野家様方ヨリ被差下候御書物与志通

いか躰之御政道筋 相聞せ無之故之儀哉
其廉預連 不相見候間 権六・彦七・身柄
引請之儀二付 心當可有之存候間 令
相對承候所 御黒印被差出候儀二付 未
然二無承知 尚又 今度御咎事一卷
二付 是又同様之参懸 此外格別兩人
之衆二おいて氣附無之申分二候 然又
右両条之儀二付候而者 権六・彦七江
未然二巨細二被仰聞候而者 臨時二又

【122頁】

引渡有之候故 孰茂申合拜見可仕由相
演 取下候事 御末家様方ヨリ被差下候御書物与志通

付り 廉書之儀者別紙有之

御末家様方ヨリ被差下候御書物与志通

宅野太郎左衛門儀 被仰付之御政道筋 事二
より候而者 小原権六・小国彦七江相聞せ
不申候様承知之由 いつ連ヨリ被承候哉も
不存候得共 御政道筋者 當役中申談
御同等可被仕儀者勿論 左様可有之儀

【123頁】

いか躰之御政道筋 相聞せ無之故之儀哉
其廉預連 不相見候間 権六・彦七・身柄
引請之儀二付 心當可有之存候間 令
相對承候所 御黒印被差出候儀二付 未
然二無承知 尚又 今度御咎事一卷
二付 是又同様之参懸 此外格別兩人
之衆二おいて氣附無之申分二候 然又
右両条之儀二付候而者 権六・彦七江
未然二巨細二被仰聞候而者 臨時二又

*1 預 類? (P81L1 および P77L7 参照) 或いは「期」?

是二家之難捌ありも窮らて可有之相
 見候 於其段者 各中推察之識有之
 御差引可有之様二申上候 然者 太郎左衛門
 一筋二自己之作廻と申二而者無之候
 事 訊聞移り無之時者 憤り尤之儀二候
 巨細各承知申趣二候 御用向二寄候而八
 銘々又八一統と申所次第も可有之事二
 相考候 此砌 萩・須佐共二在役三人進
 退之儀者 甚以有之間敷御時節歟と

【124頁】

存候 乍尔太郎左衛門 老極二付御断被申出たる
 儀二候得者 追々御吟味之筋も可有御座
 候得共 先八吉人被差出 兩職可被仰付
 御様子歟と於各者存事二候 旁之趣
 得と勘弁可被申候事
 此度御咎被仰付候面々 いつ連も忠勤
 を励候者共二候得者 御慈悲を以被遂
 御救免被下候様との儀 且太郎右衛門 十郎左衛門
 儀者 帰役被仰付被下候様二との儀 然処

【125頁】

孰茂夫々不束筋有之 御咎被仰付
 たる事二候 然共 此余之御咎筋者 御
 了簡を以 輕ク被仰付被下候様との儀者
 御賢慮可被成御座御事 尚各共ヨリも
 成文御取持可申上候 乍尔 兩人歸役之儀
 早速左様御沙汰被仰付もの二而可有
 之哉 追年御遣ひ程之儀者 思召茂可
 有御座御事二候得共 只今其沙汰可被
 仰付儀哉 於各も不及落着候 扱又 各方
 誓約前も有之候二付 御歎申出杯との儀
 私之誓約も荐二被申立候者 不本意
 之儀 上を輕し候筋二可相当哉と存候
 且此度之儀者 急難差發 御家いか
 程之御大難可致出来哉 難計被存候故
 一同之氣付二付連名を以 御歎被申
 出候由 然共いか程之御家御急難
 哉八不存候得共 事颯々敷連書を以
 申出有之 多人數出萩之儀 致方も

【126頁】

【127頁】

孰茂夫々不束筋有之 御咎被仰付
 たる事二候 然共 此余之御咎筋者 御
 了簡を以 輕ク被仰付被下候様との儀者
 御賢慮可被成御座御事 尚各共ヨリも
 成文御取持可申上候 乍尔 兩人歸役之儀
 早速左様御沙汰被仰付もの二而可有
 之哉 追年御遣ひ程之儀者 思召茂可
 有御座御事二候得共 只今其沙汰可被
 仰付儀哉 於各も不及落着候 扱又 各方

誓約前も有之候二付 御歎申出杯との儀
 私之誓約も荐二被申立候者 不本意
 之儀 上を輕し候筋二可相当哉と存候
 且此度之儀者 急難差發 御家いか
 程之御大難可致出来哉 難計被存候故
 一同之氣付二付連名を以 御歎被申
 出候由 然共いか程之御家御急難
 哉八不存候得共 事颯々敷連書を以
 申出有之 多人數出萩之儀 致方も

下智之吾中、おいて合点系、是の意
能く考合有之候様存候事

同与志通

此度各出萩之趣、書上之、以御歎之
書面令披見候、尚演説具二承申候
然處、去年以来、多人、教夜之書上之
仕方、同志之面々、毎々集會二付而者
不穩、自然と騷立候、御為いか、被存
候哉、誠二御為と被存儀二候者、蜜々衆
談之思惟、可有之、同志とても物通り無
差別、人数を催シ、御政務筋之評論
且御執行ひ之是非を茂、種々批判も
可有之候、忠諫之趣、君臣之操、其道
を立、従容として諫をなし、節二逼り
候而者、身命をも投うち、假令諫言
信用無之共、君臣之禮違犯有之
間敷儀二候半哉、御譜代重恩之各
仕官之身として、不似合之仕方と

【128頁】

此度各出萩之趣、書上を以御歎之
書面令披見候、尚演説具二承申候
然處、去年以来、多人、度々書上之
仕方、同志之面々、毎々集會二付而者
不穩、自然と騷立候、御為いか、被存
候哉、誠二御為と被存儀二候者、蜜々衆

同与志通

【129頁】

談之思惟、可有之、同志とても物通り無
差別、人数を催シ、御政務筋之評論
且御執行ひ之是非を茂、種々批判も
可有之候、忠諫之趣、君臣之操、其道
を立、従容として諫をなし、節二逼り
候而者、身命をも投うち、假令諫言
信用無之共、君臣之禮違犯有之
間敷儀二候半哉、御譜代重恩之各
仕官之身として、不似合之仕方と

林以持又計度此習之仰付之面之八丈之
 之冠科難遁也且露頭之儀也存之
 又之出不審筋之以礼明之仰付之落罪
 之之罪之恒重之以先段之御咎被仰付
 退比之始之私私之物之御咎被仰付
 幕之申立之御咎被仰付之批判之段
 上之量り出萩之御咎被仰付之御咎被仰付
 加之多人教出萩之御咎被仰付之御咎被仰付
 結構先達而御黒印を以被仰聞 各

神文を以申出之処 盟約何連二可相依
 歟 何ぞ歎出之筋候八、一兩人出浮二而
 申出之手段も可有之 銘々之志を以
 出萩之所 途中より不斗一同多人數
 相成たるとの演説二候得共 いか程之御
 急難含有之段者 不存事候へ共
 事颯々敷 黨を結ぶ二似寄たる
 振廻 第一御国法二相違ひ候段者 深
 恐入候事二而八無之哉 且 毎度愁訴

【130頁】

存候 将又 此度御咎被仰付候面々八 夫々
 之罪科難遁儀 且つ露頭之儀も有之
 又者 御不審筋を以礼明被仰付 落罪
 之士 罪之軽重を以 先段之御咎被仰付
 置たる儀二候処 私之誓約有之候由を以
 荐二申立 剩 御沙汰筋 種々批判之段
 上を量り 御政道を妨類二相当候半歟
 加之 多人數出萩有之 連書申出之
 結構 先達而御黒印を以被仰聞 各

【131頁】

神文を以申出之処 盟約何連二可相依
 歟 何ぞ歎出之筋候八、一兩人出浮二而
 申出之手段も可有之 銘々之志を以
 出萩之所 途中より不斗一同多人數
 相成たるとの演説二候得共 いか程之御
 急難含有之段者 不存事候へ共
 事颯々敷 黨を結ぶ二似寄たる
 振廻 第一御国法二相違ひ候段者 深
 恐入候事二而八無之哉 且 毎度愁訴

今乃發之云と書上才繁多事乃時ハ情
 上下疑然也出奉らる此信用と疑也
 牙然と君臣之隔遠と相成畢竟
 此路半も亦在いへ程忠志節儀有
 之しと七と在也外し此と正理も亦叶
 年ハ以去去年以來之取作廻終二者
 騷動端も至り御家御外聞不可然
 此上下之批判他之口舌も亦聞風説
 區々付而者

【132頁】

ケ間敷言上書上等 繁多なる時八御
 上下疑惑も出来候而 御信用も難成
 自然と君臣之隔遠と相成 畢竟
 御政事も不立 いか程忠志節儀有
 之候而も 其道二外候時者 正理二不相叶
 事二候 各去年以來之取作廻 終二者
 騷動端二も至り 御家御外聞不可然
 御上下之批判 他之口舌二相懸り 風説
 區々 付而者

公邊御首尾相二も相障り可申哉 述懐
 之根元 御為を被存候筋 御家を
 大切二被存取捌二可相当哉 得と考合
 可有之事二存候 先達而 廉書を以
 被申出之趣 御承引被成御座 追々被遂
 御吟味御事 然二 此度又候申出之廉 元
 来主君之行ひ 且微細之意氣地
 をも無會得 私之誓約を本と被申出
 歟之様二不及落着候 然共 御俟約立

【133頁】

公邊御首尾相二も相障り可申哉 述懐
 之根元 御為を被存候筋 御家を
 大切二被存取捌二可相当哉 得と考合
 可有之事二存候 先達而 廉書を以
 被申出之趣 御承引被成御座 追々被遂
 御吟味御事 然二 此度又候申出之廉 元
 来主君之行ひ 且微細之意氣地
 をも無會得 私之誓約を本と被申出
 歟之様二不及落着候 然共 御俟約立

之儀二付 段々心魂を碎き 厚志二おいて八
 感入候 且 御節儉之御様子二付而者 御
 行状躰之儀也 尚又 被用御心を 万端
 以味之候也 於其段者 各共ヨリ精々
 可申上候 幾重茂忠志義心と候而も
 私二誓約を結び 君慮御政理をも不
 相軽 種々之申分 甚以 難得其意候
 依之此度申出之廉 并 先達而書立之廉
 夫々江当り 付紙を以 各心底申述候間
 以生執之覽者合可有之存候 此余趣も
 有之候八、随分可承候 何篇勘弁有
 之傍輩中 無隔意 御上下礼節相
 立候様心得肝要二候
 一 四月廿七日 昨日被差下候御書立物 早速ヨリ
 いつ連も拜見仕り申合候趣者 於各茂
 御為筋を祐 奉考申上候処 被於御末家
 様方候而者 下之存付を八大二致相違候
 然ル時者

【134頁】

之儀二付 段々心魂を碎き 厚志二おいて八
 感入候 且 御節儉之御様子二付而者 御
 行状躰之儀也 尚又 被用御心を 万端
 以味之候也 於其段者 各共ヨリ精々
 可申上候 幾重茂忠志義心と候而も
 私二誓約を結び 君慮御政理をも不
 相軽 種々之申分 甚以 難得其意候
 依之此度申出之廉 并 先達而書立之廉
 夫々江当り 付紙を以 各心底申述候間

【135頁】

得と熟覽者合可有之存候 此余趣も
 有之候八、随分可承候 何篇勘弁有
 之傍輩中 無隔意 御上下礼節相
 立候様心得肝要二候

一 四月廿七日 昨日被差下候御書立物 早速ヨリ

いつ連も拜見仕り申合候趣者 於各茂
 御為筋を祐 奉考申上候処 被於御末家
 様方候而者 下之存付を八大二致相違候
 然ル時者

御父子様各赤心之所を以一筋之御願
 可申上哉乍去趣茂有之候八、可被成御承知
 之儀二候得者最初ヨリ各存付之所を
 書調候而今一應備御覽候儀二而可有
 之と衆評一決仕左之通書調候而演説
 書相添差出候

非常之御咎事二付御歎之

次第地

第二

御末家様ヨリ被差下候御書立江

御答書

宅野太郎左衛門儀 被仰付之御政道筋 事二寄
 候而者 小原権六・小国彦七江相聞せ不申様
 承知仕候 孰ヨリ承候哉 御政道筋者當役中
 申談御伺可仕儀八勿論 左様可有之儀
 いか躰之御政道筋相聞せ無之故之儀哉

【136頁】

御父子様注¹江各赤心之所を以 一筋之御願
 可申上哉 乍去 趣茂有之候八、可被成御承知
 之儀二候得者 最初ヨリ各存付之所を
 書調候而 今一應備 御覽候儀二而 可有
 之と衆評一決仕 左之通書調候而演説
 書相添差出候

【137頁】

非常之御咎事二付御歎之

次第 地 第二

御末家様ヨリ被差下候御書立江

御答書

宅野太郎左衛門儀 被仰付之御政道筋 事二寄
 候而者 小原権六・小国彦七江相聞せ不申様
 承知仕候 孰ヨリ承候哉 御政道筋者當役中
 申談御伺可仕儀八勿論 左様可有之儀
 いか躰之御政道筋相聞せ無之故之儀哉

之屋敷不引種者彦七身柄引請之
 所分高下者之引引尋家引引
 御尋被成候所
 御黒印被差出候儀二付 未然二承知不仕
 猶又 此度御咎事一卷二付 是又 同様之
 参懸り 此外格別兩人之者氣付無之
 段申上候 然所 右兩条之儀二付而八 権六・
 彦七江未然二巨細被仰聞候而八 臨時二又
 所二爰と難捌 障りも窮而可有之 被思
 召 於此段者御推察之訳有之 御差引可

有之様被仰上候 然者 太郎左衛門一筋二自己之
 作廻と申二而八無御座事之訳 聞移り無之
 時者 憤り尤之儀二被思召候 巨細被成御承知
 候御事二候 御用向二寄候而八 銘々又八一統
 と申す品次第も可有之儀と御考被遊候由 委
 細御入割被仰聞 乍恐 御尤之御事奉存候
 私共最初氣付候所八 御蜜用筋之儀八
 御目利を以 其人々々江被仰付御事二而も
 可有之哉二御座候得共 賞罰者 政事之

【138頁】

其廉預不申故 権六・彦七身柄引請之
 儀二付 心当可有之被思召 御尋被成候所
 御黒印被差出候儀二付 未然二承知不仕
 猶又 此度御咎事一卷二付 是又 同様之
 参懸り 此外格別兩人之者氣付無之
 段申上候 然所 右兩条之儀二付而八 権六・
 彦七江未然二巨細被仰聞候而八 臨時二又
 所二爰と難捌 障りも窮而可有之 被思
 召 於此段者御推察之訳有之 御差引可

【139頁】

有之様被仰上候 然者 太郎左衛門一筋二自己之
 作廻と申二而八無御座事之訳 聞移り無之
 時者 憤り尤之儀二被思召候 巨細被成御承知
 候御事二候 御用向二寄候而八 銘々又八一統
 と申す品次第も可有之儀と御考被遊候由 委
 細御入割被仰聞 乍恐 御尤之御事奉存候
 私共最初氣付候所八 御蜜用筋之儀八
 御目利を以 其人々々江被仰付御事二而も
 可有之哉二御座候得共 賞罰者 政事之

根元二而可有御座 就中 此度之御咎多
 人数 不尋常被仰付御座候得者 是等之
 儀者 御政務筋江預り候者江者示合 御伺
 をも申上儀と奉存候 其上太郎左衛門・権六・
 彦七儀者 去冬一同二被召出候節 何事も
 別體一心之心得二而 可奉遂其節段
 太郎左衛門發語二而申合候由 万一兩人之者
 心得違之筋も有之時は 幾度も存寄
 を 萬事 御為宜敷様可申談儀 無

左候時者 勿論一和仕 可励忠勤儀二御座候
 然時者 御入割を以 被仰聞八御座候共 御
 諫をも申上 示談之上取計可仕儀歟と
 奉存 前断申上候次第二御座候

此砌 萩・須佐共二在役三人進退之儀者 甚以
 有之間敷御時節歟と被思召候 乍尔 太郎左衛門
 老極二付 御断申出たる儀二而候得者 追々御
 吟味之筋も可有御座候得共 先者一人被
 差出 両職二可被仰付御様子歟と被思召候

【140頁】

【141頁】

身之疑心は有赤く仕之也

七私に家御奉付し頼り其後之人を退之
治新まはは湯島外下流に多事御在
其其の在御三つハ内家奉一和仕居候
其其の在御三つハ内家奉一和仕居候
之月談侍居候家奉中此地走也其外
其其の在御三つハ内家奉一和仕居候
度段申合候 其節 太郎左衛門儀者 在秋仕
追而様子承候而申候趣者 御家老中之儀八

御家御為と不存人柄は忠臣一統江
相如不申儀二而可有之所 いか様之心得を以
一統江申合候哉と致立腹 申募候得共 御家
来中一和肝要之儀と存付候故 大小身
不洩申合候通申聞せ 漸落着仕せ候 彼者
前断之心得二罷居候処 只今二而八 御家老
衆并縁者申合 初発二御為筋を申談候
人柄と八 自然と不快相成申候 此度御咎
之人柄之内二も 忠義二誇り 太郎左衛門と争

【142頁】

旁之趣と得考弁可仕之通
私共最初氣付候所者 在役三人進退之
儀願者 此御時節不可然御事奉存候 乍尔
太郎左衛門取捌二而八 御家来一和仕間敷と
奉存候 其趣者 旧冬御領分上地所御取返
之申談仕候節 御家来中御馳走出米之外
吉歩方 右御借銀御返済年限中 差上
度段申合候 其節 太郎左衛門儀者 在秋仕
追而様子承候而申候趣者 御家老中之儀八

【143頁】

御家御為を不存人柄二候得者 忠臣一統江
相如不申儀二而可有之所 いか様之心得を以
一統江申合候哉と致立腹 申募候得共 御家
来中一和肝要之儀と存付候故 大小身
不洩申合候通申聞せ 漸落着仕せ候 彼者
前断之心得二罷居候処 只今二而八 御家老
衆并縁者申合 初発二御為筋を申談候
人柄と八 自然と不快相成申候 此度御咎
之人柄之内二も 忠義二誇り 太郎左衛門と争

論杯仕候と宿意二挟三 色々之過失を
 相求たる二て八無御座哉と 人心不穩候 此
 儀先達而も可申上儀二御座候得共 讒訴注一二
 似寄候故 申上を八不仕候 其上御歎出筋
 御許容之上二而も 趣次第二て八一和之妨二
 茂可相成哉と奉存 差控申候 此余彼者
 不行届取捌筋も有之様相聞候得共 事
 姦敷御座候故 申上難仕奉存候 何分前断
 之通二而者 所詮一和仕間敷 御不為と奉

御座候故申出候次第ニ申上候

一 此度御咎被仰付候面々 孰茂 勵忠勤候者
 共二候得者 偏二御慈悲を以被遂 御救免
 被下候様と之儀 且 太郎右衛門・十郎左衛門儀八帰役注二
 被仰付被下候様二と御歎之筋 被聞召上候 然
 処 孰茂夫々不束筋有之 御咎被仰付たる
 事候 然共 此余之御咎筋八 御了簡を以
 軽ク被仰付被下候様との儀八 御賢慮可被成
 御座御事 尚成丈御取持をも可被仰上 乍

【144頁】

論杯仕候を宿意二挟三 色々之過失を
 相求たる二て八無御座哉と 人心不穩候 此
 儀先達而も可申上儀二御座候得共 讒訴注一二
 似寄候故 申上を八不仕候 其上御歎出筋
 御許容之上二而も 趣次第二て八一和之妨二
 茂可相成哉と奉存 差控申候 此余彼者
 不行届取捌筋も有之様相聞候得共 事
 姦敷御座候故 申上難仕奉存候 何分前断
 之通二而者 所詮一和仕間敷 御不為と奉

【145頁】

存候故 御歎申出候次第二御座候

一 此度御咎被仰付候面々 孰茂 勵忠勤候者
 共二候得者 偏二御慈悲を以被遂 御救免
 被下候様と之儀 且 太郎右衛門・十郎左衛門儀八帰役注二
 被仰付被下候様二と御歎之筋 被聞召上候 然
 処 孰茂夫々不束筋有之 御咎被仰付たる
 事候 然共 此余之御咎筋八 御了簡を以
 軽ク被仰付被下候様との儀八 御賢慮可被成
 御座御事 尚成丈御取持をも可被仰上 乍

*1 讒訴(ざんそ) = 讒言(人を陥れるため、事実を曲げその人を悪く言うこと)して訴えること。

*2 帰役 = 波田太郎右衛門は年行司役、柴田十郎左衛門は裏判役。(47頁参照)

亦其人帰後之儀、早速左様御沙汰被仰付
 物二而可有之哉、追年御遣方之儀ハ、思召も
 可御座候事候得共、只今其沙汰可被仰付
 儀哉、難被及、御落着之通被仰聞、是以
 難有仕合奉存候
 私共最初氣付候処者、御咎筋之儀、御歎
 出仕候上、帰役之儀迄申上候者、恐多儀二
 御座候得共、右兩人者當三月御上納前
 太郎左衛門、就御用在萩仕候故、御上納之御
 借銀事ニ付引請出精仕、且々御間を茂
 合せ候趣ニ御座候、只今被差替候而ハ、銀主
 之所存不平二而、御当用之御間も相兼
 可申哉、尚裏判役之儀者、於須佐者、御勝
 手方注³要之役座二付、只今被差替候
 而者、他所銀主之思入悪敷可有御座
 来御上納御手当等、御為不可然様奉
 存候故、御為筋と奉考、氣付之次第
 申上候、ケ様申候得者、重役之太郎左衛門儀者

【146頁】

尔 兩人帰役之儀ハ早速左様御沙汰被仰付
 物二而可有之哉、追年御遣方之儀ハ、思召も
 可有御座候事候得共、只今其沙汰可被仰付
 儀哉、難被及、御落着之通被仰聞、是以
 難有仕合奉存候
 私共最初氣付候処者、御咎筋之儀、御歎
 出仕候上、帰役之儀迄申上候者、恐多儀二
 御座候得共、右兩人者當三月御上納前
 太郎左衛門、就御用在萩仕候故、御上納之御

【147頁】

借銀事ニ付 引請出精仕 且々御間を茂
 合せ候趣ニ御座候 只今被差替候而ハ 銀主
 之所存不平二而 御当用之御間も相兼
 可申哉 尚裏判役之儀者 於須佐者 御勝
 手方注³要之役座二付 只今被差替候
 而者 他所銀主之思入悪敷可有御座
 来御上納御手当等 御為不可然様奉
 存候故 御為筋と奉考 氣付之次第
 申上候 ケ様申候得者 重役之太郎左衛門儀者

*3 御勝手方 = 会計関係を司る役職。当職が業務繁忙の時、代行するのが裏判役の職務であるから、益田家の經理はほぼ全面的に裏判役の職掌として一任されていたことになる。

退後候御付被下候様御歎申出 十郎左衛門儀者
 歸役被仰付被下候様申出候段 不都合之様二
 可被思召候得共 太郎左衛門儀者 前断申上候様
 最初者御家老中を不忠二申成 其後致
 同意 尚又 荻野直左衛門儀 兼而所勤方
 不宜二付 旧冬一統大義御願申出候節も
 彼者吉人除判仕候 是又 太郎左衛門 近来八
 何角申合候様承り候 右躰之懦弱なる
 人柄二御座候得者 御借銀方之儀二付

申上候 一旦過失を以御咎被仰付候共
 御心入を以 被遂 御許容候而八 人材其
 器二當り候もの者を 御賢慮次第 再役
 被仰付候而も不苦御儀歟と 乍憚 乍考
 御歎申出候次第二御座候
 私共誓約前も有之 御歎申出杯と之儀 私
 之誓約を荐二申立候 不本意儀 上を輕シ
 候筋二可相当哉と被思召候 且 此度之儀者

【148頁】

退後候御付被下候様御歎申出 十郎左衛門儀者
 歸役被仰付被下候様申出候段 不都合之様二
 可被思召候得共 太郎左衛門儀者 前断申上候様
 最初者御家老中を不忠二申成 其後致
 同意 尚又 荻野直左衛門儀 兼而所勤方
 不宜二付 旧冬一統大義御願申出候節も
 彼者吉人除判仕候 是又 太郎左衛門 近来八
 何角申合候様承り候 右躰之懦弱なる
 人柄二御座候得者 御借銀方之儀二付

【149頁】

候而茂 御為不可然様奉存 前断之通
 申上候 一旦過失を以御咎被仰付候共
 御心入を以 被遂 御許容候而八 人材其
 器二當り候もの者を 御賢慮次第 再役
 被仰付候而も不苦御儀歟と 乍憚 乍考
 御歎申出候次第二御座候
 私共誓約前も有之 御歎申出杯と之儀 私
 之誓約を荐二申立候 不本意儀 上を輕シ
 候筋二可相当哉と被思召候 且 此度之儀者

急難差発 御家いか程之御大難 可致
 出来哉 難計奉存候故 一同之氣付二付 連
 名を以御歎申出候 いか程之御家御急難
 哉者御存知不被遊候得共 事颯々敷連書
 を以申出仕 多人数出萩等之儀 仕方も
 可有之哉と被思召候 能々考合仕候様との
 御事 奉恐入候
 私共最初氣付候処者 私之誓約を荐二
 申立候者 不本意儀 下以氣毒千萬 奉
 恐入候得共 御咎人御救免之儀 尋常之
 儀二而 御歎等可申上筋二而 無御座候故
 正直有躰之所を以 無覆蔵申上候 誓
 約と計申候而者 御不審二茂可被思召哉
 其趣者 去冬御家来一統 大義御願仕
 候節 御政道筋 不拘職分儀二而も 氣
 付候儀者可申上 且又 邪倭之者二而も
 御前向 品能被召遣候得者 遠慮仕 其
 過失をも不申上様相成 不心得之儀二

【150頁】

急難差発 御家いか程之御大難 可致
 出来哉 難計奉存候故 一同之氣付二付 連
 名を以御歎申出候 いか程之御家御急難
 哉者御存知不被遊候得共 事颯々敷連書
 を以申出仕 多人数出萩等之儀 仕方も
 可有之哉と被思召候 能々考合仕候様との
 御事 奉恐入候
 私共最初氣付候処者 私之誓約を荐二
 申立候者 不本意儀 下以氣毒千萬 奉

【151頁】

恐入候得共 御咎人御救免之儀 尋常之
 儀二而 御歎等可申上筋二而 無御座候故
 正直有躰之所を以 無覆蔵申上候 誓
 約と計申候而者 御不審二茂可被思召哉
 其趣者 去冬御家来一統 大義御願仕
 候節 御政道筋 不拘職分儀二而も 氣
 付候儀者可申上 且又 邪倭之者二而も
 御前向 品能被召遣候得者 遠慮仕 其
 過失をも不申上様相成 不心得之儀二

事許已奉去奉候御申上御忠勤奉遂
 之節度候之御款申上御若邪倭之
 族色々之申成等仕間敷二も不限候故古
 失小過を以不相応之御咎被仰付候時八
 互二救合可仕段一統之申合御座候然共
 御不為筋二相当候儀者勿論誓約と
 御座候而も相背奉遂其節候段臣下
 之道二て御座候得共太郎左衛門取計二而
 成御沙汰被仰出候故御不為筋出来
 稀

仕間敷物二ても無之哉と奉考候故御款
 申上候且多人数出萩連名を以申出仕
 候段者御款出二も申上候通幾重も奉
 恐入候氣付之筋有之候時者職座迄内々
 申出又者老人別御款出をも可仕儀御座
 候得共此度之御沙汰二付何角と申候者八
 大小身二不限不及御伺太郎左衛門存分二取計
 候通彼者口出二而申候故御屋敷罷出
 御款不申上而者心底之所達

【152頁】 79

奉存 已来者無覆蔵申上 励忠勤 奉遂
 其節度段をも御款申上候付 若邪倭之
 族 色々之 申成等仕間敷二も不限候故 古
 失小過を以 不相応之御咎被仰付候時八
 互二救合可仕段 一統之申合御座候 然共
 御不為筋二相当候儀者 勿論誓約と
 御座候而も相背 奉遂其節候段 臣下
 之道二て御座候得共 太郎左衛門 取計二而
 成御沙汰被仰出候故 御不為筋出来
 稀

【153頁】

仕間敷物二ても無之哉と奉考候故 御款
 申上候 且多人数出萩 連名を以申出仕
 候段者 御款出二も申上候通 幾重も奉
 恐入候 氣付之筋有之候時者 職座迄内々
 申出 又者 老人別御款出をも可仕儀御座
 候得共 此度之御沙汰二付 何角と申候者八
 大小身二不限 不及御伺 太郎左衛門 存分二取計
 候通 彼者口出二而申候故 御屋敷罷出
 御款不申上而者心底之所 達

上聴候程七難計何分有躰之取捌二而者
御家来中未々迄 多人數之儀 一和不仕
いか程之儀 出来可仕哉と 甚以御氣遣
奉存 無是非出萩仕候 先達而申上候
通 道中已来随分穩便二仕 恐入罷
在候事

在候事

此度出萩書上を以御歎之書面被遊御覽
尚演説具二被聞召上 然処 去年以来 度々
多人數書上之仕方 同志之面々毎々集

會二而 自然と不穩 騷立候躰 御為いか、相心
得候哉 誠二御為と奉存候八、蜜々衆談
之思惟も可有之と之御事 御尤之御儀
奉存候

去年已来御家来中申談 乍憚 御家を
守立 御家運興隆を期シ奉リ 一統
盟約誓言仕候而 職役・當役をも御願
出之上 被差替候儀二付 一廉御家御興
隆之御驗無之而者 臣下之節義 難

【154頁】

上聴候程七難計 何分有躰之取捌二而者
御家来中未々迄 多人數之儀 一和不仕
いか程之儀 出来可仕哉と 甚以御氣遣
奉存 無是非出萩仕候 先達而申上候
通 道中已来随分穩便二仕 恐入罷
在候事

此度出萩書上を以御歎之書面被遊御覽
尚演説具二被聞召上 然処 去年以来 度々
多人數書上之仕方 同志之面々毎々集

【155頁】

會二而 自然と不穩 騷立候躰 御為いか、相心
得候哉 誠二御為と奉存候八、蜜々衆談
之思惟も可有之と之御事 御尤之御儀
奉存候

去年已来御家来中申談 乍憚 御家を
守立 御家運興隆を期シ奉リ 一統
盟約誓言仕候而 職役・當役をも御願
出之上 被差替候儀二付 一廉御家御興
隆之御驗無之而者 臣下之節義 難

相立奉存 同意之者 折節付會候而も
 御為筋を論シ 氣付次第色々申合候儀二
 御座候 御政道筋不拘職分儀二而も 御
 譜代之銘々二御座候得者 氣付候儀者
 無覆蔵申上 忠節奉遂其節度段
 御歎申出被遂 御免候故 差控罷居候而八
 不忠之至二而 可有御座奉存 同志之者
 蜜々二申合候得共 御政道筋之儀 申出
 候者 下卜々 不容易儀二付 多人數申合
 衆智を聚候而 申合不仕而者 落着難
 相成二付 先達而職座・當役座迄一ツ書
 差出候節も 月番頭江集会仕候 益田
 古孫左衛門様注1 繁沢古次郎兵衛様注2 二も御當家
 岩国之儀は御家来中ヨリ持立候と古
 来申傳之通 被成御意候段 慥二承傳申候
 無左候而も 御譜代之御家来 御為筋
 を申談候儀者 勿論臣下之節と奉考候
 申出候迎も 御取捨之儀者 御賢慮も

【156頁】

相立奉存 同意之者 折節付會候而も
 御為筋を論シ 氣付次第色々申合候儀二
 御座候 御政道筋不拘職分儀二而も 御
 譜代之銘々二御座候得者 氣付候儀者
 無覆蔵申上 忠節奉遂其節度段
 御歎申出被遂 御免候故 差控罷居候而八
 不忠之至二而 可有御座奉存 同志之者
 蜜々二申合候得共 御政道筋之儀 申出
 候者 下卜々 不容易儀二付 多人數申合

【157頁】

衆智を聚候而 申合不仕而者 落着難
 相成二付 先達而職座・當役座迄一ツ書
 差出候節も 月番頭江集会仕候 益田
 古孫左衛門様注1 繁沢古次郎兵衛様注2 二も御當家
 岩国之儀は御家来中ヨリ持立候と古
 来申傳之通 被成御意候段 慥二承傳申候
 無左候而も 御譜代之御家来 御為筋
 を申談候儀者 勿論臣下之節と奉考候
 申出候迎も 御取捨之儀者 御賢慮も

*1 益田古孫左衛門 =
 *2 繁沢古次郎兵衛 =
 *3 御當家岩国之儀は御家来中ヨリ持立候 =

一存御座且執政之者取計筋も可有御座
 儀と奉存候 於太郎左衛門茂 最初八権六彦七
 一同二 何分於尔下 氣付之筋有之候八、
 承と申たる儀二御座候 全騷立候而 不成
 御為 集會杯仕候所存 少も無御座候へ共
 前断之通 被聞召上候段 無是非仕合
 奉恐入候事

同志迎茂 物通り無差別人数を催シ
 御政務筋之評論 且 御取行之是非

之を種々と批判も可有之候 忠諫之趣
 君臣之操 其道を立 従容として諫を
 なし 節に逼り候而者 身命を抛テ 假令
 諫言信用無之とても 君臣之禮 違
 犯有之間敷儀二候半哉 御譜代重恩
 之各 仕官之身として不似合之仕方
 と被思召候段 奉得其旨 奉恐入候
 尋常之御時節二御座候八、一人立而御
 諫言をも可申上儀二御座候得共 御家

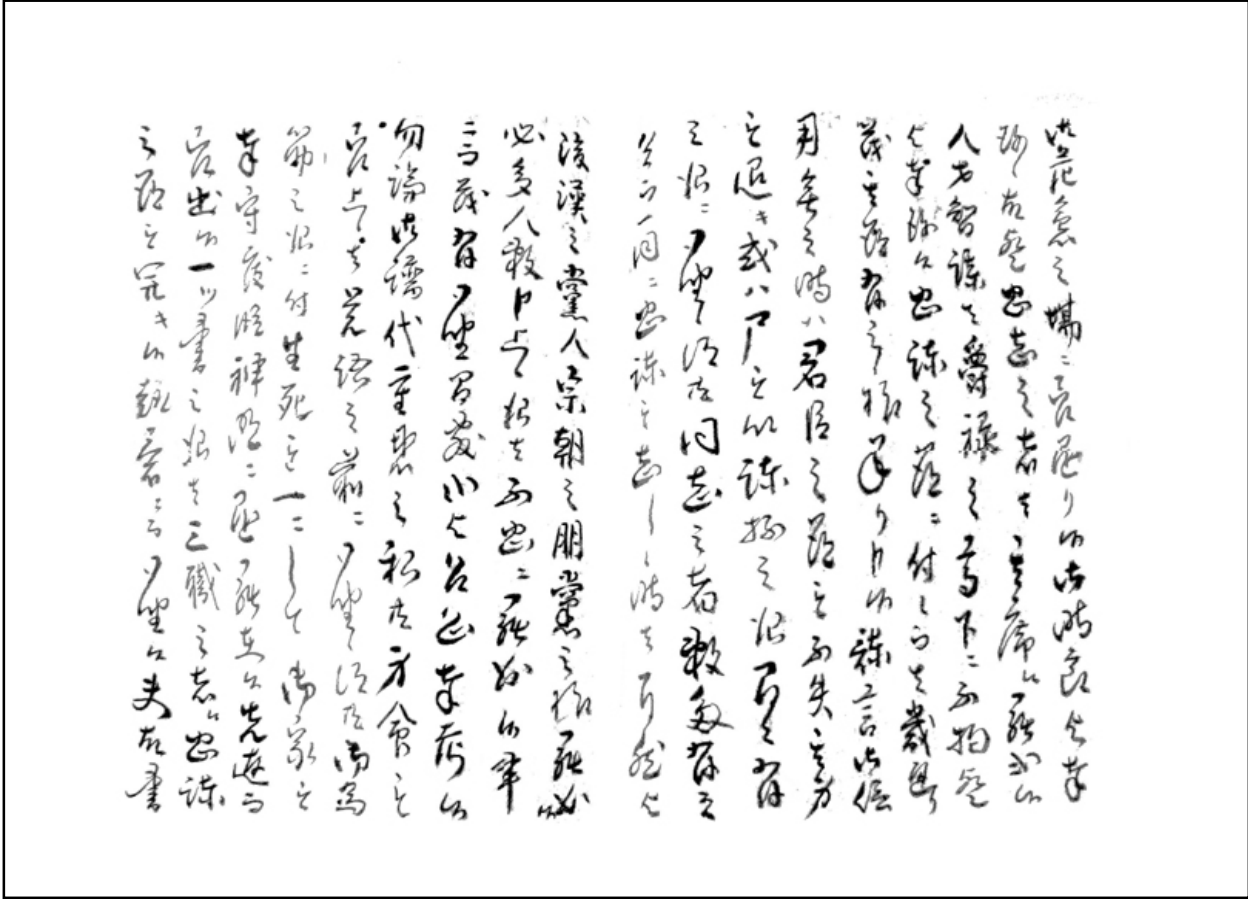
【158頁】

可有御座しほあるへく 且 執政之者取計筋も可有御座しほあるへく
 儀と奉存候 於太郎左衛門茂宅野 最初八権六彦七小原
 一同二 何分於尔下しもにおいて 氣付之筋有之候八、
 承と申たる儀二御座候 全騷立候而 不成
 御為 集會杯仕候所存 少も無御座候へ共
 前断之通 被聞召上候段 無是非仕合
 奉恐入候事おそれりたりてまつり

同志迎茂とても 物通り無差別人数を催シ
 御政務筋之評論 且 御取行之是非

【159頁】

之を種々と批判も可有之候 忠諫之趣
 君臣之操 其道を立 従容として諫を
 なし 節に逼り候而者 身命を抛テ 假令
 諫言信用無之とても 君臣之禮 違
 犯有之間敷儀二候半哉 御譜代重恩
 之各 仕官之身として不似合之仕方
 と被思召候段 奉得其旨 奉恐入候
 尋常之御時節二御座候八、一人立而御
 諫言をも可申上儀二御座候得共 御家



【160頁】

御危急之場二差懸り候御時節と 奉
 存候故歟 忠志之者者 其席江罷出候
 人才知謀者 爵禄之高下二不拘歟
 と奉存候 忠諫之道二付候而者 幾通り
 茂其道有之候様承り申候 諫言御信
 用無之時八 君臣之道を不失 其身
 を退キ 或八戸を以諫杯之儀 間々有
 之儀二御座候得共 同志之者数多有之
 候而 一同二忠諫を志し候時者 自然と

【161頁】

後漢之黨人 宗朝之朋黨注1 之様罷成候
 必多人数申上候儀者 不忠二罷成候事
 二而茂有御座間敷哉と 乍恐 奉考候
 勿論御譜代重恩之私共 身命を
 差上候者 覚悟之前二御座候得共 御為
 筋之儀二付 生死を一二して 御家を
 奉守度段 神明二懸罷在候 先達而
 差出候一ツ書之儀者 三職之者江忠諫
 之道を開キ候趣意二而御座候 夫故書

*1 後漢之黨人 宗朝之朋党 = 卷末補注参照。 <後漢之黨人> 後漢では国政が外戚や宦官によって左右されたので、気骨のある臣下が激しく抵抗した。 <宗朝之朋党> 太宗朝では、懲戒処分という本来の貶官制度がそのまま機能していた。この為各時代毎に大量の士人が貶謫され、殺された。

調方等上書之文跡二ても無御座段
 御賢察被遊候半と奉存候
 此度御咎被仰付候面々 夫々之罪科難
 遁儀 且 露頭之儀も有之 又者 御不審
 筋を以 紕明被仰付 落罪之上罪之輕
 重を以 先段々御咎被仰付置たる儀二
 候処 私之誓約有之由を荐二申立 剩 御
 沙汰筋種々批判之段 上を量り 御政
 事を妨類二相当候半歟 加之 多人數出
 萩仕 連書申出之結構 先達而
 御黒印を以被仰聞 銘々神文を以 申出候
 所 盟約いつ連二可相依歟 何ぞ歎出之
 筋候八、一兩人出浮二而 申出之手段も可有
 之 銘々之志を以 出萩之所 途中ヨリ一同二
 多人數相成たると之演説二御座候 いか
 程之御急難 含有之段者 不被成御存
 候得共 事颯々敷 黨を結ふ二似寄候
 振廻 第一御国法二相違之段者 深恐

【162頁】

調方等上書之文跡二ても無御座段
 御賢察被遊候半と奉存候

此度御咎被仰付候面々 夫々之罪科難
 遁儀 且 露頭之儀も有之 又者 御不審
 筋を以 紕明被仰付 落罪之上罪之輕
 重を以 先段々御咎被仰付置たる儀二
 候処 私之誓約有之由を荐二申立 剩 御
 沙汰筋種々批判之段 上を量り 御政
 事を妨類二相当候半歟 加之 多人數出

【163頁】

萩仕 連書申出之結構 先達而
 御黒印を以被仰聞 銘々神文を以 申出候
 所 盟約いつ連二可相依歟 何ぞ歎出之
 筋候八、一兩人出浮二而 申出之手段も可有
 之 銘々之志を以 出萩之所 途中ヨリ一同二
 多人數相成たると之演説二御座候 いか
 程之御急難 含有之段者 不被成御存
 候得共 事颯々敷 黨を結ふ二似寄候
 振廻 第一御国法二相違之段者 深恐

入候事二而八無御座哉 且 每度愁訴ケ
 間敷言上書上等 繁多なる時八御上下
 疑惑も出来候而 御信用も難成 自然と
 君臣之隔遠と相成 畢竟 御政事も
 不立 いか程忠志節義有之候而も 其
 道二外レ候時者 正理二不相叶候て之御事
 奉恐入候

此度御咎被仰付候人数者 孰茂旧冬
 已来忠節を励候者二御座候得者

御慈悲を以 其過を被遊 御免被下候様
 御歎をも申出 演説を茂仕り候 右過失之
 次第 忠義二はやり候而 其科を受候
 類も有之候歟と奉存候故 申上候御事二
 御座候 私之持ち方を以 愁訴等申上二ても
 無御座様 乍憚 奉考候 全以 上を量り
 御政道を妨候心底 毛頭無御座候
 先達而 御黒印を以被仰聞 神文
 を以申上候筋も御座候得共 此度之儀八

【164頁】

入候事二而八無御座哉 且 每度愁訴ケ
 間敷言上書上等 繁多なる時八御上下
 疑惑も出来候而 御信用も難成 自然と
 君臣之隔遠と相成 畢竟 御政事も
 不立 いか程忠志節義有之候而も 其
 道二外レ候時者 正理二不相叶候て之御事
 奉恐入候

此度御咎被仰付候人数者 孰茂旧冬
 已来忠節を励候者二御座候得者

【165頁】

御慈悲を以 其過を被遊 御免被下候様
 御歎をも申出 演説を茂仕り候 右過失之
 次第 忠義二はやり候而 其科を受候
 類も有之候歟と奉存候故 申上候御事二
 御座候 私之持ち方を以 愁訴等申上二ても
 無御座様 乍憚 奉考候 全以 上を量り
 御政道を妨候心底 毛頭無御座候
 先達而 御黒印を以被仰聞 神文
 を以申上候筋も御座候得共 此度之儀八

御家来一和お仕奉るに付お仕候
 深奉恐入候得共 御家之御大難ニ至り
 可申哉と 奉存候故 申上候次第第二御座候
 此度之御歎出 中々尋常之儀ニてハ
 無御座 御為筋と奉氣付候故 身命
 を抛于御歎出仕り候 銘々存寄次第罷出
 候得共 此元へ罷出 追々多人数罷成候
 次第第二御座候 御大難出来可仕哉 難計
 段申上候者 御家来末々迄多人数之
 内ニ性急之者も可有之儀ニ御座候得共
 いか様之作廻可仕哉 萬一不所存ニ而 思詰
 鬭争ニもおよび可申哉 千萬一左様之
 儀共有之候而ハ 御家之御大難と奉
 存 其上御領内 甚以 不穩参懸り二付
 無是非出萩仕 氣付之次第御歎
 申出候儀ニ御座候
 去年已来之取作廻 終ニ者騒動端ニも至り
 御家御外聞不可然 御上下之批判 他之口

【166頁】

偏二御家来一和不仕参懸二付 於此段者
 深奉恐入候得共 御家之御大難ニ至り
 可申哉と 奉存候故 申上候次第第二御座候
 此度之御歎出 中々尋常之儀ニてハ
 無御座 御為筋と奉氣付候故 身命
 を抛于御歎出仕り候 銘々存寄次第罷出
 候得共 此元へ罷出 追々多人数罷成候
 次第第二御座候 御大難出来可仕哉 難計
 段申上候者 御家来末々迄多人数之

【167頁】

内二者 性急之者も可有之儀ニ御座候得共
 いか様之作廻可仕哉 萬一不所存ニ而 思詰
 鬭争ニもおよび可申哉 千萬一左様之
 儀共有之候而ハ 御家之御大難と奉
 存 其上御領内 甚以 不穩参懸り二付
 無是非出萩仕 氣付之次第御歎
 申出候儀ニ御座候

去年已来之取作廻 終ニ者騒動端ニも至り
 御家御外聞不可然 御上下之批判 他之口

舌二懸 風説區々二付而八 公邊之御首尾
 相二も相障可申哉 述懐之根元 御為と
 奉存候筋 御家を御大切二奉存候 取捌二
 可相当哉 得と考合可有之と被思召候 先
 達而 廉書を以申出之趣 被遊御承引 追々
 被遂御吟味候御事 然二 此度又々申出之
 廉 元来主君之行 且微細之意氣地
 を茂無會得 私之誓約を本と仕申出
 歟之様 被思召候通り 重畳奉恐入候

【168頁】

旧冬已来之儀者 御家来一統之儀 私共計ヨリ
 十口申上苦敷御座候 併 太郎左衛門儀 旧冬
 誓約被明之以要言仕候儀乍存 眼前
 騒動端二も可相成儀を取計候故 無據
 此度出萩仕候様罷成候次第八 別紙二も
 申上候通 気毒千萬奉存候 此度之儀も
 見合罷居候時八 銘々之災難八無之
 儀歟と奉存候得共 一日も早く一和之期二
 相成不申而八 甚不成御為儀と奉存

【169頁】

舌二懸 風説區々二付而八 公邊之御首尾
 相二も相障可申哉 述懐之根元 御為と
 奉存候筋 御家を御大切二奉存候 取捌二
 可相当哉 得と考合可有之と被思召候 先
 達而 廉書を以申出之趣 被遊御承引 追々
 被遂御吟味候御事 然二 此度又々申出之
 廉 元来主君之行 且微細之意氣地
 を茂無會得 私之誓約を本と仕申出
 歟之様 被思召候通り 重畳奉恐入候

之石才會と抽出萩仕の取捌筋行
 而不申段者無是非次第奉恐入候得共
 忠志之所八御賢察被遣候様奉希候
 御倭約之儀二付 心魂を砕候 於志者 被遊
 御感 御節儉之御様子二付而八 御行状躰
 之儀茂 尚又被用御心 萬端御吟味可被成候
 於此段者 精々可被仰上と之御事
 身二餘り 誠以難有仕合奉存候
 幾重茂 忠志義心と候而も 私二誓約を結
 君慮御政理を不相憚 種々之申分 甚以
 御不審被思召候由 依之 此度申出之廉 并
 先達而書立之廉 夫々江当御附紙を以
 被仰聞候間 と得熟覽考合仕 此余趣も
 御座候八可申上候 何邊勘弁仕 傍輩中
 無隔意 御上下禮節相立候様 心得肝要
 被思召と之御事 奉畏難有仕合奉存候
 前断申上候次第 此度被仰聞候趣二付
 何角と過を銚候而申上候心底二而者

【170頁】

候故 身命を拋出萩仕候 取捌筋行
 届不申段者 無是非次第 奉恐入候得共
 忠志之所八御賢察被遣候様奉希候
 御倭約之儀二付 心魂を砕候 於志者 被遊
 御感 御節儉之御様子二付而八 御行状躰
 之儀茂 尚又被用御心 萬端御吟味可被成候
 於此段者 精々可被仰上と之御事
 身二餘り 誠以難有仕合奉存候
 幾重茂 忠志義心と候而も 私二誓約を結

【171頁】

君慮御政理を不相憚 種々之申分 甚以
 御不審被思召候由 依之 此度申出之廉 并
 先達而書立之廉 夫々江当御附紙を以
 被仰聞候間 と得熟覽考合仕 此余趣も
 御座候八可申上候 何邊勘弁仕 傍輩中
 無隔意 御上下禮節相立候様 心得肝要
 被思召と之御事 奉畏難有仕合奉存候
 前断申上候次第 此度被仰聞候趣二付
 何角と過を銚候而申上候心底二而者

全書ノ望ミ初發ニ所存ノ和紙ニ上
仕候

覺

御末家様方御思召之趣御書立両通
之以被仰聞 恐入候儀二奉存候 猶又先
達而三職迄差出候一ツ書此附紙之趣
拜見仕奉對 御當家厚キ御思召之旨
奉感佩候 右両通御書付 屹と御書立
之通ニ被仰付二而モ無御座 御内々被仰聞候

筋ニ御座候間 下氣付之筋有之候八、 申上
候様と之御入割被仰聞候付 初發御歎
出之節 下氣付之所 無覆藏腰書注¹江
相調 御内々申上仕度 各様迄差出申候間
下赤心之所 乍恐 被遊 御思惟 何邊二モ
御家来中一和仕 御為宜様御裁断
奉願候 事長キ儀二付 前後不文 不図
失敬筋ニ相当候儀モ可有御座哉と奉
恐入候 旁之趣 可然御取計可被下候 以上

【172頁】

全無御座候 初發ヨリ所存之所 乍恐 申上
仕候

覺

御末家様方御思召之趣 御書立両通
を以被仰聞 恐入候儀二奉存候 猶又先
達而 三職迄差出候一ツ書 御附紙之趣
拜見仕 被對 御當家 厚キ御思召之旨
奉感佩候 右両通御書付 屹と御書立
之通ニ被仰付二而モ無御座 御内々被仰聞候

【173頁】

筋ニ御座候間 下氣付之筋有之候八、 申上
候様と之御入割被仰聞候付 初發御歎
出之節 下氣付之所 無覆藏腰書注¹江
相調 御内々申上仕度 各様迄差出申候間
下赤心之所 乍恐 被遊 御思惟 何邊二モ
御家来中一和仕 御為宜様御裁断
奉願候 事長キ儀二付 前後不文 不図
失敬筋ニ相当候儀モ可有御座哉と奉
恐入候 旁之趣 可然御取計可被下候 以上

*1 腰書 =

右之通相調為之旨下候 申書為御進書先
 達向之職迄書出候 腰書之字は此附紙
 在候之旨下候分在 孰茂拜見仕候上仕
 以上之旨迄書出候 申書入候迄書出候
 以上之旨迄書出候 申書出候

付申書式ケ所振紙之儀 申書出候
 申分ニ書之儀 申書出候
 趣八左ニ詳ニ相見候事

一 其後權六・彦七ヨリ申聞せ候者 申出之次第

御末家様方被聞召候 然処 腰書ニ相見候
 廉者 本書之注解之様ニ而 申所不分明
 二候 何分いか様ニ祐被仰付候ハ、御為宜敷ト
 下氣付之所書調 差出候様被思召候 且 被
 差下候両通之御書立物 并 當春三職迄
 差出候廉書之写江 御付紙相成被差下
 候分共二 下に二留置候様被思召ト之御事ニ而
 六通相渡候付 受取候而申合候処 御為筋二
 當不当者 難計儀ニ候得共 初發ヨリ下氣

【174頁】

右之通相調 尚被差下候 本書両通 并 先
 達而 三職迄差出候 廉書之写江 御附紙
 相成 被差下候分共二 孰茂拜見仕 返上仕
 候間 宜敷取計吳候様申入 演説書共二
 以上六通 權六・彦七迄差出候事
 付 本書式ケ所振紙之儀者 此度差出
 候分二者無之候 追而 付候而差出候
 趣八左ニ詳ニ相見候事

一 其後權六・彦七ヨリ申聞せ候者 申出之次第

【175頁】

御末家様方被聞召候 然処 腰書ニ相見候
 廉者 本書之注解之様ニ而 申所不分明
 二候 何分いか様ニ祐被仰付候ハ、御為宜敷ト
 下氣付之所書調 差出候様被思召候 且 被
 差下候両通之御書立物 并 當春三職迄
 差出候廉書之写江 御付紙相成被差下
 候分共二 下に二留置候様被思召ト之御事ニ而
 六通相渡候付 受取候而申合候処 御為筋二
 當不当者 難計儀ニ候得共 初發ヨリ下氣

付之御腰書・御調差出候儀ニ候。此余ノ
 所ト被仰聞候而モ 格別之申分モ無之候
 乍去 太郎左衛門 退役之儀ト 御咎人御救免
 太郎右衛門・十郎左衛門歸役之儀ト 〆ル所申上候様
 と之御事ニ可有之候 是以 最初申出候
 外 一向存寄無之候 乍尔ト得相考候得者
 窪田彦右衛門・椋小左衛門儀者 落罪之上 〆リ被
 仰付 番等モ被仰付有之候得者 只今何之
 無障 太郎右衛門・作左衛門・左治馬・十郎左衛門同様ニ

御救免ト仰付時モ 又改ラ考ル所同意章
 之外 人柄被差出 再度御糺明モ被仰付
 品ニ寄候而者 此内御究方江被差出候役人
 中を者 一廉御咎不被仰付而ハ 御政道モ
 難相立筋モ可有御座哉 太郎右衛門・十郎左衛門
 歸役之儀モ 腰書ニ相見候通 御為筋ト
 奉考申出候得共 兩人者歸役 太郎左衛門八御
 免役ト申候時者 是又 太郎左衛門を初 彼者
 同意之面々折合申間敷ト之思召共ニ而

【176頁】

付之所 腰書ニ相調差出候儀ニ候 此余ノ
 所ト被仰聞候而モ 格別之申分モ無之候
 乍去 太郎左衛門 退役之儀ト 御咎人御救免
 太郎右衛門・十郎左衛門歸役之儀ト 〆ル所申上候様
 と之御事ニ可有之候 是以 最初申出候
 外 一向存寄無之候 乍尔ト得相考候得者
 窪田彦右衛門・椋小左衛門儀者 落罪之上 〆リ被
 仰付 番等モ被仰付有之候得者 只今何之
 無障 太郎右衛門・作左衛門・左治馬・十郎左衛門同様ニ

【177頁】

御救免被仰付候時者 又改而 太郎左衛門同意章
 之外 人柄被差出 再度御糺明モ被仰付
 品ニ寄候而者 此内御究方江被差出候役人
 中を者 一廉御咎不被仰付而ハ 御政道モ
 難相立筋モ可有御座哉 太郎右衛門・十郎左衛門
 歸役之儀モ 腰書ニ相見候通 御為筋ト
 奉考申出候得共 兩人者歸役 太郎左衛門八御
 免役ト申候時者 是又 太郎左衛門を初 彼者
 同意之面々折合申間敷ト之思召共ニ而

一者之奉行詰御全儀被仰付候時者 家を弄
 所之抛上と犯し 御家を守 御身之上を
 奉護候輩と 家を全し 身を全し 御家
 御身上を不奉憂 當座之御意二任せ候
 族々も天鑑明公御出候之御意に御心
 分二し御心御意に御心御意に御心御意に
 下御家之御騒動も御心御意に御心御意に
 外御家御心御意に御心御意に御心御意に
 二茂三十日におよび被遂御分別候而 被仰出
 候儀 勿論御為筋之儀 聊御諫者有之
 間敷 其上此余一筋二御咎人御救免之
 儀を申上候時者 斯迄御為と存詰候心
 底薄ク共相聞 私黨二似寄可申段 甚以
 氣毒之至候得者 彦右衛門・小左衛門儀者 知行
 無減少被立下 此上之御裁許者 御仁心
 之程を可奉待候 太郎左衛門退役之儀も 各三リ
 御願二付 被差易と御座候時ハ 彼者同意

【178頁】

可有之哉 行詰御全儀被仰付候時者 家を弄
 身を抛 上を犯シ 御家を守 御身之上を
 奉護候輩と 家を全し 身を全し 御家
 御身上を不奉憂 當座之御意二任せ候
 族と者 天鑑明成儀注¹ 忠倭 其差別者 相
 分可申候得共 何分兩輪二相成候而者 手之
 下 御家之御騒動二も相成可申哉 然時ハ
 外聞旁 却而 御為いか、可有御座哉 何
 を申候而も 御上御為之儀 御末家様方

【179頁】

二茂三十日におよび被遂御分別候而 被仰出
 候儀 勿論御為筋之儀 聊御諫者有之
 間敷 其上此余一筋二御咎人御救免之
 儀を申上候時者 斯迄御為と存詰候心
 底薄ク共相聞 私黨二似寄可申段 甚以
 氣毒之至候得者 彦右衛門・小左衛門儀者 知行
 無減少被立下 此上之御裁許者 御仁心
 之程を可奉待候 太郎左衛門退役之儀も 各三リ
 御願二付 被差易と御座候時ハ 彼者同意

*1 天鑑 = 天帝が御覧になること。天帝の照覧。

之者何角と申間敷二も不_あ相_あ限_あ候得共 是八
 彼者引受二て者 御領内不平之段者 現在
 諸人之眼前二相見候儀二候得者 内意被_あ
 仰聞 御役御断申出之上 御役被差替候
 時者 其御煩も有之間敷儀候処 折柄
 御役御断申出候儀 願之通被遂御免候時八
 格別差支リ之筋も有之間敷儀 左候而
 忠義之人柄被召出候時者 御領内御静謐
 可相成候得者 太郎左衛門儀者被差替候こそ
 此後便之御捌二て可有之儀 此等之儀者 御評
 論・御諫も有之間敷儀二候得共 何分彼者
 在役二て者 所詮御家来一和不仕 御不為
 出来可仕候得者 其段可申出候 尤太郎左衛門儀八
 去年被召出候節 下ヨリ内々推挙之次第も
 有之候得者 先見之暗所 恐入候得共 御為
 御不為之場二至り候而者 先見失候者 幾度
 茂相誤 推挙之人二て候八、猶以相退ケ 面々
 其罪を受候而 御為宜筋二取計可申

【180頁】

之者 何角と申間敷二も不_あ相_あ限_あ候得共 是八
 彼者引受二て者 御領内不平之段者 現在
 諸人之眼前二相見候儀二候得者 内意被_あ
 仰聞 御役御断申出之上 御役被差替候
 時者 其御煩も有之間敷儀候処 折柄
 御役御断申出候儀 願之通被遂御免候時八
 格別差支リ之筋も有之間敷儀 左候而
 忠義之人柄被召出候時者 御領内御静謐
 可相成候得者 太郎左衛門儀者被差替候こそ

【181頁】

御穩便之御捌二て可有之儀 此等之儀者 御評
 論・御諫も有之間敷儀二候得共 何分彼者
 在役二て者 所詮御家来一和不仕 御不為
 出来可仕候得者 其段可申出候 尤太郎左衛門儀八
 去年被召出候節 下ヨリ内々推挙之次第も
 有之候得者 先見之暗所 恐入候得共 御為
 御不為之場二至り候而者 先見失候者 幾度
 茂相誤 推挙之人二て候八、猶以相退ケ 面々
 其罪を受候而 御為宜筋二取計可申

御下之申意ハ候ニテ候ニテ申上之旨
 裁断之可奉待ト申合 先達而差出候
 両通之腰書物之内 志通ハ前篇ニ有之
 通式ケ所振紙相調申候 志通ハ各身
 通之儀ニ付 一應所存之所申出候へ者 此余
 可申上筋無之故 其俣相添差出候段
 申入 左之通演說書相調 演說書共二三
 通権六・彦七迄差出候事

覚

御末家様方御思召之趣 御書立両通
 を以被仰聞 畏入候儀ニ奉存候 尚又
 達而 三職迄差出候一ツ書御附紙之趣
 拜見仕 被對 御當家 厚御思召之旨
 奉感佩候 右両通御書附 屹と御書立
 之通ニ被仰付二ても無御座 御内々被
 仰聞候筋ニ御座候間 下氣付之筋
 有之候ハ、申上候様との御入割被仰聞
 候付 初發御歎出之節 氣付之趣

【182頁】

儀 臣下之本意ニ候得者 其段をも申上 御
 裁断を可奉待と申合 先達而差出候
 両通之腰書物之内 志通ハ前篇ニ有之
 通式ケ所振紙相調申候 志通ハ各身
 通之儀ニ付 一應所存之所申出候へ者 此余
 可申上筋無之故 其俣相添差出候段
 申入 左之通演說書相調 演說書共二三
 通権六・彦七迄差出候事

覚

【183頁】

御末家様方御思召之趣 御書立両通
 を以被仰聞 畏入候儀ニ奉存候 尚又
 達而 三職迄差出候一ツ書御附紙之趣
 拜見仕 被對 御當家 厚御思召之旨
 奉感佩候 右両通御書附 屹と御書立
 之通ニ被仰付二ても無御座 御内々被
 仰聞候筋ニ御座候間 下氣付之筋
 有之候ハ、申上候様との御入割被仰聞
 候付 初發御歎出之節 氣付之趣

孝後病腰書江相調 御内々申上仕度
 各様迄差出申候間 下赤心之所 乍恐
 御思惟被遊 何邊二も御家来中一和仕
 御為宜様 御裁断奉希候 事長千儀
 二付 前後不文 不凶失敗筋二相当候儀も
 可有御座哉と奉恐入候 旁之趣可然御取
 計被下候様 演説書を以申出候処 尚又 於
 尔下 御為筋氣付之所 夫々書記差
 出候様との御事 奉得其旨 乍恐 所存之

所附紙仕差出申候 此余 先達而 差出候
 腰書之通御座候間 然否之所者 何分
 御家御為宜様 御裁断被成下候様 宜
 御取計可被下候 已上

五月朔日

一當春大組出子色四組分三職迄差出候
 廉書写江御附紙相成 被差下候者 各江
 拜見被仰付との御事と相移り 拜見相済
 返上仕候処 下二留置候様との御事二候

【184頁】

無覆蔵腰書江相調 御内々申上仕度
 各様迄差出申候間 下赤心之所 乍恐
 御思惟被遊 何邊二も御家来中一和仕
 御為宜様 御裁断奉希候 事長千儀
 二付 前後不文 不凶失敗筋二相当候儀も
 可有御座哉と奉恐入候 旁之趣可然御取
 計被下候様 演説書を以申出候処 尚又 於
 尔下 御為筋氣付之所 夫々書記差
 出候様との御事 奉得其旨 乍恐 所存之

【185頁】

所附紙仕差出申候 此余 先達而 差出候
 腰書之通御座候間 然否之所者 何分
 御家御為宜様 御裁断被成下候様 宜
 御取計可被下候 已上

五月朔日

一當春大組・御手廻・四組ヨリ三職迄差出候
 廉書写江御附紙相成 被差下候者 各江
 拜見被仰付との御事と相移り 拜見相済
 返上仕候処 下二留置候様との御事二候

然時ハ物筋ハ能事有ク月番ハ渡方
 在ル第ニラニ有之ニ候 物筋ハ月番ハ
 月番在令神書原書ニ在之候ニ職
 忠諫之儀ニ完ニ申書ニ有之候方ニ
 最初ハ在好相在末ハ御方御覽ニ
 入候ニ有之候ハ御方御覽ニ在之
 入候ニ御方御覽ニ在之候ニ在之
 全知ハ加判中茂ニ在之候ニ孰モ同意ニ
 申上相成候由 其節承り及之候

上御聞請之所いか、哉も 下江者不相知候得共
 追々御様子之以 奉考候得者 奉感心候儀
 共段々有之 難有仕合奉存罷居候処 此
 度御末家様方ヨリ 御附紙被成被差下候故 拜見
 仕候處 重畳難有仕合二者奉存候へ共
 上御行状躰之儀迄も書載有之候儀を
 斯迄御末家中様御評論ニ懸候者 當
 役中いか様之心得ニ候哉 切々無是非仕
 合と存候得共 是者何を申候而も後言無

【186頁】

然時ハ物筋ハ能事有ク月番ハ渡方
 在ル第ニラニ有之ニ候 物筋ハ月番ハ
 月番在令神書原書ニ在之候ニ職
 忠諫之儀ニ完ニ申書ニ有之候方ニ
 最初ハ在好相在末ハ御方御覽ニ
 入候ニ有之候ハ御方御覽ニ在之
 入候ニ御方御覽ニ在之候ニ在之
 全知ハ加判中茂ニ在之候ニ孰モ同意ニ
 申上相成候由 其節承り及之候

【187頁】

上御聞請之所いか、哉も 下江者不相知候得共
 追々御様子之以 奉考候得者 奉感心候儀
 共段々有之 難有仕合奉存罷居候処 此
 度御末家様方ヨリ 御附紙被成被差下候故 拜見
 仕候處 重畳難有仕合二者奉存候へ共
 上御行状躰之儀迄も書載有之候儀を
 斯迄御末家中様御評論ニ懸候者 當
 役中いか様之心得ニ候哉 切々無是非仕
 合と存候得共 是者何を申候而も後言無

詮事二候 右之内存故 此廉書之儀二付
 而者 此余何角と儀論仕候も 氣毒千
 萬 畏入候故 其俣請込申候 当時別心之
 者者心底いか、哉 難計候得共 最初申合
 差出候儀二付 入披見 可然と申合せ 在萩之
 者江者追々入内見 取歸候而 月番所江
 相渡可申と申談候事
 五月三日 前段相見候迎 腰書物江又々振紙
 相調 演説書相添差出候様 権六・彦七一應
 引請候処 其後内々申聞せ候者 何分太郎左衛門
 只今二而被差替候儀 御末家様方二茂
 御取計被成苦敷 可有御座と存候間 一人
 被差出 兩職被仰付候八、夫二而落着仕
 可然事二者無御座哉 と得思惟可然段
 申事二付 打寄皆々種々評議仕候得共 彼
 者取計二者 又々御不為出来 無覚束
 存候得者 此儀八何ヶ度も及落着兼候段
 兩人江相答候事

【188頁】

詮事二候 右之内存故 此廉書之儀二付
 而者 此余何角と儀論仕候も 氣毒千
 萬 畏入候故 其俣請込申候 当時別心之
 者者心底いか、哉 難計候得共 最初申合
 差出候儀二付 入披見 可然と申合せ 在萩之
 者江者追々入内見 取歸候而 月番所江
 相渡可申と申談候事

五月三日 前段相見候迎 腰書物江又々振紙
 相調 演説書相添差出候様 権六・彦七一應

【189頁】

引請候処 其後内々申聞せ候者 何分太郎左衛門
 只今二而被差替候儀 御末家様方二茂
 御取計被成苦敷 可有御座と存候間 一人
 被差出 兩職被仰付候八、夫二而落着仕
 可然事二者無御座哉 と得思惟可然段
 申事二付 打寄皆々種々評議仕候得共 彼
 者取計二者 又々御不為出来 無覚束
 存候得者 此儀八何ヶ度も及落着兼候段
 兩人江相答候事

一 御末家様方ヨリ被差下候御書立物を以
 相考候得者 今後下存付之所 振紙江
 書記シ差出候得共 是以 御聞濟可被
 為有哉難計候 勿論此度之御歎出
 不尋常儀二付 御為筋二相当不申時者
 其罪不輕事二付 孰茂最初ヨリ身命
 を差捨申出候段者 今更 孰茂不及示
 談候 此上者 無據 一筋之御願申出ノ外
 無之と致一決 願書相調 判形相濟

以裁断速々 在裁之御願申出ノ外
 之御願可申出と 致落着居候 然処 大谷
 伊八一座之人々 江申候者 一筋之御願 物筋
 差出候期二至り候八、 身柄所存も有之候
 御承知可被下哉と申候付 いか様之儀候哉と
 相尋候処 伊八申候者 其期二臨候八、 身不肖
 二者御座候得共 須佐職役被仰付 太郎左衛門
 と両職二被仰付 彼者と進退を同様二
 被仰付被下候様 二物筋申出 右一筋之

【190頁】

一 御末家様方ヨリ被差下候御書立物を以
 相考候得者 今後下存付之所 振紙江
 書記シ差出候得共 是以 御聞濟可被
 為有哉難計候 勿論此度之御歎出
 不尋常儀二付 御為筋二相当不申時者
 其罪不輕事二付 孰茂最初ヨリ身命
 を差捨申出候段者 今更 孰茂不及示
 談候 此上者 無據 一筋之御願申出ノ外
 無之と致一決 願書相調 判形相濟

【191頁】

御裁断速々二相成候八、 明朝者前断一筋
 之御願可申出と 致落着居候 然処 大谷
 伊八 一座之人々江申候者 一筋之御願 物筋
 差出候期二至り候八、 身柄所存も有之候
 御承知可被下哉と申候付 いか様之儀候哉と
 相尋候処 伊八申候者 其期二臨候八、 身不肖
 二者御座候得共 須佐職役被仰付 太郎左衛門
 と両職二被仰付 彼者と進退を同様二
 被仰付被下候様 二物筋申出 右一筋之

四彩と先表方 御聞二入申間敷と
 跡は身柄御出候而 両職之所御落着
 可有之哉と申事二付 孰茂申候者 御忠
 志感入候 御身柄御両職御座をも被為作候
 御所存二御座候得者 両職二而御不為者出来
 仕間敷候得者 随分落着可仕と相述
 候処 伊八申候者 於身柄者御存之通 未熟
 之者二候得共 御譜代之各方 一筋之御願
 を茂被仰出候時者 乍恐 御家之御災害

【192頁】

御願を者 先表方 御聞二入申間敷と
 存候 身柄罷出候而 両職之所御落着
 可有之哉と申事二付 孰茂申候者 御忠
 志感入候 御身柄御両職御座をも被為作候
 御所存二御座候得者 両職二而御不為者出来
 仕間敷候得者 随分落着可仕と相述
 候処 伊八申候者 於身柄者御存之通 未熟
 之者二候得共 御譜代之各方 一筋之御願
 を茂被仰出候時者 乍恐 御家之御災害

【193頁】

二而者無之哉 身柄在役と而も 此余いか程之
 儀可有之哉 難計候得共 先差懸候御災害
 を除申度との寸志計二御座候 勿論非力之
 身柄被召出 御為二相成候儀二而も無御座
 第一申出候申茂 其通り可被仰付哉 難計
 儀二御座候得共 何分御一統之思召次第二
 可仕と申儀二付 孰茂申合候処 太郎左衛門を退
 役被仰付被下候様 御願申上候身として
 其人と同役所勤可仕と之所存 誰人も

二而者無之哉 身柄在役と而も 此余いか程之
 儀可有之哉 難計候得共 先差懸候御災害
 を除申度との寸志計二御座候 勿論非力之
 身柄被召出 御為二相成候儀二而も無御座
 第一申出候申茂 其通り可被仰付哉 難計
 儀二御座候得共 何分御一統之思召次第二
 可仕と申儀二付 孰茂申合候処 太郎左衛門を退
 役被仰付被下候様 御願申上候身として
 其人と同役所勤可仕と之所存 誰人も

改之志之始也外 功之旨之始也
 家難之萌也外 存之始也
 官控之始也外 拔群之始也
 之始也外 伊八之始也
 伊八之始也外 伊八之始也
 伊八之始也外 伊八之始也
 伊八之始也外 伊八之始也
 伊八之始也外 伊八之始也
 伊八之始也外 伊八之始也

同意仕者如左連名在左之通
 松原勘五郎 松原文左衛門
 栗山藤藏 大谷伊八
 内藤正左衛門 仁保内蔵
 松原利右衛門 多根茂右衛門
 金子順平 増野貞左衛門
 仲井半蔵 吉賀兵之進
 大草甚右衛門 荻野孫右衛門
 重富竜助 三好源之進

【194頁】

断而无之儀 心外二存等二候処 差懸り御
 家難之萌相見候故 自己之心外を者
 差捨 御為を存候者 拔群之忠志顯然
 二候 然者 伊八罷出候時者 太郎左衛門と両職
 二て茂 御不為筋も出来仕間敷と評定
 相決 御忠志之程 御尤存候間 御望出可
 然段 伊八江相答候事
 付り 此願書之儀者別紙有之候事
 付り 最初御願之節 連名無之銘々も

【195頁】

同意仕相加候 連名左之通
 松原勘五郎 松原文左衛門 松本良左衛門
 栗山藤藏 大谷伊八 松原八郎右衛門
 内藤正左衛門 仁保内蔵 小国融蔵
 松原利右衛門 多根茂右衛門 城市軍次
 金子順平 増野貞左衛門 増野多中
 仲井半蔵 吉賀兵之進 松原源五左衛門
 大草甚右衛門 荻野孫右衛門 兼重三左衛門
 重富竜助 三好源之進 大谷源吾

中村文次 三輪五郎 多々治右衛門
 城市 屯 松井七右衛門 品川昌見
 秋山作之進 渡邊源助 品川小才
 大谷徳左衛門 近藤直之進 品川小才
 鈴川次郎左衛門 村岡幾之進 松野甚五右衛門
 神原由軒 横山東仙 高本道慶
 河村牧太 永富次郎左衛門 永富春斎
 松野永次 田原弥五右衛門 椋木六右衛門
 品川玄道 河上安右衛門 品川伴蔵

東井重兵衛 田村源内 大村勘左衛門
 坪田門次

一 権六・彦七ヨリ相尋候者 今日殿中之模様 在
 勤之衆を始 各様御形容不尋常候 何
 歟被仰合候御様子と 致御見請候 事之
 様子承度と 相尋候付 格別之儀も無之
 と及挨拶候得共 再度相尋申候故 一統申
 合せ二而 此上者行詰之所 兩人江者明シ可申候
 兩人承候八、 役筋之儀 決而上達も仕間敷

【196頁】

野村文次 三輪五郎 多々治右衛門
 城市 屯 松井七右衛門 品川昌見
 秋山作之進 渡邊源助 品川小才
 大谷徳左衛門 近藤直之進 品川小才
 鈴川次郎左衛門 村岡幾之進 松野甚五右衛門
 神原由軒 横山東仙 高本道慶
 河村牧太 永富次郎左衛門 永富春斎
 松野永次 田原弥五右衛門 椋木六右衛門
 品川玄道 河上安右衛門 品川伴蔵

【197頁】

原井平左衛門 田村源内 大村勘左衛門
 坪田門次

一 権六・彦七ヨリ相尋候者 今日殿中之模様 在
 勤之衆を始 各様御形容不尋常候 何
 歟被仰合候御様子と 致御見請候 事之
 様子承度と 相尋候付 格別之儀も無之
 と及挨拶候得共 再度相尋申候故 一統申
 合せ二而 此上者行詰之所 兩人江者明シ可申候
 兩人承候八、 役筋之儀 決而上達も仕間敷

物二ても無之候得共 全ク他家江對シ候而之論と八
 雲泥之違二候 上達二及候とも不苦儀二而可
 有之候間 在躰之所を致内咄 可然と申合
 一筋之御願書草稿をも見せ候所 熟覽
 可仕由二付 任其意候 其後持参二而 此儀者
 申者乍疎 御一大事之儀 御決定之上茂
 尚又 御思慮可有之儀肝要二存候由相述
 草稿差返候事

一 同日權六・彦七ヨリ申聞せ候者 此内御末家様ヨリ

被差下候御書立物江 下氣付之所附紙
 御調 尚御演説書を以被仰出之趣 御末家様へ
 申上候処 御咎人御救免之儀者 下ヨリ差出候
 附紙之通二御取持可被成候 太郎左衛門退役之
 儀者 先二被仰聞候通 只今被差替候御時
 節二而無之と被思召 両職之所吉人者
 大谷伊八江可被仰付哉との御評議候 人柄
 を茂被成御聞せ候儀二候得者 と得御評定
 有之趣被仰出候様と申儀二付 一統申合

【198頁】

物二ても無之候得共 全ク他家江對シ候而之論と八
 雲泥之違二候 上達二及候とも不苦儀二而可
 有之候間 在躰之所を致内咄 可然と申合
 一筋之御願書草稿をも見せ候所 熟覽
 可仕由二付 任其意候 其後持参二而 此儀者
 申者乍疎 御一大事之儀 御決定之上茂
 尚又 御思慮可有之儀肝要二存候由相述
 草稿差返候事

一 同日權六・彦七ヨリ申聞せ候者 此内御末家様ヨリ

【199頁】

被差下候御書立物江 下氣付之所附紙
 御調 尚御演説書を以被仰出之趣 御末家様へ
 申上候処 御咎人御救免之儀者 下ヨリ差出候
 附紙之通二御取持可被成候 太郎左衛門退役之
 儀者 先二被仰聞候通 只今被差替候御時
 節二而無之と被思召 両職之所吉人者
 大谷伊八江可被仰付哉との御評議候 人柄
 を茂被成御聞せ候儀二候得者 と得御評定
 有之趣被仰出候様と申儀二付 一統申合

今一應内向申上之武運。若も一筋之
 御願可申上共申合候得共。又相考候得者。被
 差替候而茂。後役ノ人柄善悪共。奉從
 君。太郎左衛門同意之者共。若も加判中ヨリ御
 推挙共仕候節者。権六・彦七承候八、同意
 在者仕間敷。左候時者。當役中之争論二も
 相成。所詮一和仕間敷。夫ヨリ者。伊八被召出
 候而。兩職二被仰付。無親疎申合候而之
 取捌二而候八、一和之期二も至リ。御為宜

石州已来同譜代之御家来。御為を奉
 考。家を守。身を捨。不尋常儀を御願
 申上候心底之所者。御勤弁も可被成。下儀
 況。折柄。御役御断をも申上候儀。彼是退役
 可被仰付儀と相見候処。三十日余も御評論
 有之候而も御決談不被為成候者。太郎左衛門を
 被差替候而者。不相叶御様子可有之候。其段

【200頁】

候所 太郎左衛門取計 假令不筋無之共 各儀
 石州已来同譜代之御家来 御為を奉
 考 家を守 身を捨 不尋常儀を御願
 申上候心底之所者 御勤弁も可被成 下儀
 況 太郎左衛門儀者 齡七十 致仕之年二罷成
 折柄 御役御断をも申上候儀 彼是退役
 可被仰付儀と相見候処 三十日余も御評論
 有之候而も御決談不被為成候者 太郎左衛門を
 被差替候而者 不相叶御様子可有之候 其段

【201頁】

今一応御問申上 其上武運二尽候八、一筋之
 御願可申上共申合候得共 又相考候得者 被
 差替候而茂 後役ノ人柄善悪共 奉從
 君 太郎左衛門同意之者共 若も加判中ヨリ御
 推挙共仕候節者 権六・彦七承候八、同意
 在者仕間敷 左候時者 當役中之争論二も
 相成 所詮一和仕間敷 夫ヨリ者 伊八被召出
 候而 兩職二被仰付 無親疎申合候而之
 取捌二而候八、一和之期二も至リ 御為宜

一 邦之他邦他家江懸り合候儀二候八、各
 如斯存詰 一旦申出候儀 毛頭跡江者引
 申間敷候得共 千變萬化 評詮仕候而も
 私を差捨 御為宜敷二落着仕り候こそ
 臣下之忠節二而可有之 被於御家門様方
 候而茂 被對 御家御為筋二 何ぞ御諫
 可有御座哉 其上伊八忠志之所を内々
 移り有之儀二付 伊八被差出 兩職二被
 仰付候時者 一和之期二も至り可申哉 然時者

【202頁】 151

可これあるべき有之哉 他邦他家江懸り合候儀二候八、各
 如斯存詰 一旦申出候儀 毛頭跡江者引
 申間敷候得共 千變萬化 評詮仕候而も
 私を差捨 御為宜敷二落着仕り候こそ
 臣下之忠節二而可有之 被於御家門様方
 候而茂 被對 御家御為筋二 何ぞ御諫
 可有御座哉 其上伊八忠志之所を内々
 移り有之儀二付 伊八被差出 兩職二被
 仰付候時者 一和之期二も至り可申哉 然時者

【203頁】

於しちにおいて下格別可申上様無之段 權六・彦七へ
 申入候事
 一 五月四日 權六・彦七ヨリ申聞せ候者 須佐兩
 職之儀者 御末家様方御評議之處
 御承知之上 御落着相成候通二御座候
 然時者 先二被差出候腰書物江之付紙
 太郎左衛門退役之儀有之分を者被差除
 間敷哉と御末家様方被仰候由二而持
 參仕候故 一 被相決候上者 除候而茂 其

於しちにおいて下格別可申上様無之段 權六・彦七へ
 申入候事
 一 五月四日 權六・彦七ヨリ申聞せ候者 須佐兩
 職之儀者 御末家様方御評議之處
 御承知之上 御落着相成候通二御座候
 然時者 先二被差出候腰書物江之付紙
 太郎左衛門退役之儀有之分を者被差除
 間敷哉と御末家様方被仰候由二而持
 參仕候故 一 被相決候上者 除候而茂 其

利害無之儀二付 除候而相渡候事

同日權六・彦七ヨリ申聞せ候者 此度御歎之廉

御末家様方御内評被為濟

御父子様江も御伺被仰上候処 御評定之通二

御裁許可被仰出御様子二候 然時者 此度

之儀御為筋之儀二付 被仰出たる二而者

御座候得共 大壮之御歎被仰出候得八 御銘々

御差控者被仰出二可有之由申方二付 各

申候者 思召寄 御尤之儀二存候 勿論一件

相済候上者 御為と八乍申 不尋常儀を
御歎申上 奉勞 御賢惠候段者 恐入罷在
候得者 差控を者申出候覚悟二而罷居候
乍尔 一件之御沙汰相済候上 可申出と申合
候段相答候処 最早御裁断も被成御決候儀二
候得者 此所二而申出儀と兩人達而申候付
前二相見候人数 孰茂差控之儀申出候
文儀之儀者 御末家様方御好も有之 権六・
彦七差圖を以相調候事

【204頁】

【205頁】

新及以度御難題之御歎申出候処 御内々
 御末家様方ヨリ 段々御入割被仰聞 難有
 仕合奉存候 御作法も有之儀 別而 奉勞
 御賢惠候段 深ク恐入 迷惑至極奉存候
 依之身柄差控罷居申候 此段被成御沙汰
 可被下候 以上

五月四日

連名

右之通申出候処 孰茂先平躰注¹二而罷居可
 申候 尤出萩之者者 此内之通 随分相慎居
 旨を相待居候事 候様と被仰渡候故 孰茂 相慎居 被仰出之
 同日権六・彦七ヨリ申聞せ候者 伊八被召出 両職二
 被仰付候時者 於尔下 可申上儀無之段 御末家様江
 申上候処 其段覚書江相調差出候様との御事
 二付 左之通 書調相渡候 尤文儀之儀者
 御好も有之由二而 両人之差圖を受 相調候事
 覚

【206頁】

私共此度御難題之御歎申出候処 御内々
 御末家様方ヨリ 段々御入割被仰聞 難有
 仕合奉存候 御作法も有之儀 別而 奉勞
 御賢惠候段 深ク恐入 迷惑至極奉存候
 依之身柄差控罷居申候 此段被成御沙汰
 可被下候 以上

五月四日

連名

【207頁】

右之通申出候処 孰茂先平躰注¹二而罷居可
 申候 尤出萩之者者 此内之通 随分相慎居
 旨を相待居候事 候様と被仰渡候故 孰茂 相慎居 被仰出之
 同日権六・彦七ヨリ申聞せ候者 伊八被召出 両職二
 被仰付候時者 於尔下 可申上儀無之段 御末家様江
 申上候処 其段覚書江相調差出候様との御事
 二付 左之通 書調相渡候 尤文儀之儀者
 御好も有之由二而 両人之差圖を受 相調候事
 覚

此度須佐職座兩人二可被仰付哉之段

*1 平躰 = 普通にの意か？。

此内之御用所罷出候様と之儀二付 大組
五人御出候心 出萩之者須佐引取 相
慎居候様二と申渡有之候故 御歎出之筋八
いか、被仰付候哉 致問合候処 此内御末家様ヨリ

五月四日

五月十一日御用所罷出候様と之儀二付 大組
五人御出候心 出萩之者須佐引取 相
慎居候様二と申渡有之候故 御歎出之筋八
いか、被仰付候哉 致問合候処 此内御末家様ヨリ

五月十二日窪田彦右衛門儀 宿元被差返 身柄
隠居被仰付 嫡子茂次江家督無相違
被仰付候 椋小左衛門儀者 宿元被差返 改而遍
塞被仰付 日数廿日相立候而 御心入を以
無障 被遂 御免候 波田太郎右衛門・増野作左衛門

五月十二日窪田彦右衛門儀 宿元被差返 身柄
隠居被仰付 嫡子茂次江家督無相違
被仰付候 椋小左衛門儀者 宿元被差返 改而遍
塞被仰付 日数廿日相立候而 御心入を以
無障 被遂 御免候 波田太郎右衛門・増野作左衛門

【208頁】

御内々被仰聞 人柄御内意味之所 委曲
奉承知 乍恐 思召之通被仰付 可然御事
歟と奉存候 左候八、一和之期二も至り可
申哉と 於私共者奉存候事
五月四日

五月十一日御用所罷出候様と之儀二付 大組
五人御出候心 出萩之者須佐引取 相
慎居候様二と申渡有之候故 御歎出之筋八
いか、被仰付候哉 致問合候処 此内御末家様ヨリ

【209頁】

被仰聞之旨を見詰二仕 引取候様との御事
二付 孰茂承知仕 早速今夜出足 海邊
道中 道江相分り 須佐江罷歸 萩二而被
仰付之通 相慎罷在候事
五月十二日 窪田彦右衛門儀 宿元被差返 身柄
隠居被仰付 嫡子茂次江家督無相違
被仰付候 椋小左衛門儀者 宿元被差返 改而遍
塞被仰付 日数廿日相立候而 御心入を以
無障 被遂 御免候 波田太郎右衛門・増野作左衛門

入江左治馬・柴田十郎左衛門儀者 此内之逼塞
 御心入を以 孰茂無障 今日被遂 御免候
 出萩十二人之内八人者 帰宿之上 思召之旨
 有之候と之御事二而 逼塞被仰付 日数十日
 相立候而 御心入を以 無障 被遂 御免 松原
 勘五郎儀者 思召之旨有之 組頭役被召上
 逼塞被仰付 日数十五日相立 無障 被遂
 御免候 城市軍次・増野多中・松原源五左衛門
 儀者 是又 思召之旨有之 逼塞被仰付

【210頁】

入江左治馬・柴田十郎左衛門儀者 此内之逼塞
 御心入を以 孰茂無障 今日被遂 御免候
 出萩十二人之内八人者 帰宿之上 思召之旨
 有之候と之御事二而 逼塞被仰付 日数十日
 相立候而 御心入を以 無障 被遂 御免 松原
 勘五郎儀者 思召之旨有之 組頭役被召上
 逼塞被仰付 日数十五日相立 無障 被遂
 御免候 城市軍次・増野多中・松原源五左衛門
 儀者 是又 思召之旨有之 逼塞被仰付

【211頁】

日数十三日相立 無障被遂 御免候 勘五郎
 儀者出萩之節 組頭役職座江差上罷出
 軍次・多中・源吾左衛門儀者 先二逼塞之者
 御預ケ二而有之候所 孰茂外二吉人宛 同
 輩之者御預ケ有之候付 不尋常儀故 不
 顧其儀罷出候 依之残ル八人之者ヨリ者
 日数相増 御咎被仰付儀と相見候事
 此度御歎出之人數 萩詰懸り 并萩住
 宅之儀も出萩之銘々同様差控之儀

日数十三日相立 無障被遂 御免候 勘五郎
 儀者出萩之節 組頭役職座江差上罷出
 軍次・多中・源吾左衛門儀者 先二逼塞之者
 御預ケ二而有之候所 孰茂外二吉人宛 同
 輩之者御預ケ有之候付 不尋常儀故 不
 顧其儀罷出候 依之残ル八人之者ヨリ者
 日数相増 御咎被仰付儀と相見候事
 此度御歎出之人數 萩詰懸り 并萩住
 宅之儀も出萩之銘々同様差控之儀

戸心之儀は智之候旨有之候に 是等之儀
申了旨之儀は 申了旨有之候に 是等之儀
一 休息之御手廻中ヨリモ 此度六人之者 御咎
之次第ニ付 御許容之儀 左之通書附
を以御願申出候由事

付り 本文之趣ニ付 休息御手廻中ヨリモ
差控之儀申出候様 授ケ有之 左之
覚書を以申出候処 御免之御沙汰
有之候事

御願申上候事

波田太郎右衛門・増野作左衛門・入江左治馬・窪田
彦右衛門・柴田十郎左衛門・棕小左衛門 此度御咎被
仰付候処 彼者共儀者 旧冬已来 對
御家 専忠義相励候人柄ニ而御座候得者
少科之儀者 御慈悲を以被遂
御許容被下候様奉願候 若 被處殿科
候時者 各儀茂同様御咎被仰付被下
候様奉願候 去冬大義御願申上候節

申出候処 御咎被仰付儀ニ候得共 思召を以
御了簡 被仰付候段 御沙汰相成候事
一 休息之御手廻中ヨリモ 此度六人之者 御咎
之次第ニ付 御許容之儀 左之通書附
を以御願申出候由事

付り 本文之趣ニ付 休息御手廻中ヨリモ
差控之儀申出候様 授ケ有之 左之
覚書を以申出候処 御免之御沙汰
有之候事

御願申上候事

波田太郎右衛門・増野作左衛門・入江左治馬・窪田
彦右衛門・柴田十郎左衛門・棕小左衛門 此度御咎被
仰付候処 彼者共儀者 旧冬已来 對
御家 専忠義相励候人柄ニ而御座候得者
少科之儀者 御慈悲を以被遂
御許容被下候様奉願候 若 被處殿科
候時者 各儀茂同様御咎被仰付被下
候様奉願候 去冬大義御願申上候節

盟約前上之御座候得者 乍恐 御願申出候条
此段被成御沙汰可被下候 以上

三月廿七日

美谷源太左衛門 安岡虎助 原井平左衛門
金山新右衛門 大橋順蔵 村岡与三
齊藤治右衛門 山本小右衛門 坪田門次
田村源内 伊藤勘作 糸賀次右衛門
成田平蔵 田原傳右衛門 山下宗巴
大塚善次 宇野伊右衛門 大谷喜添

田根 一 有田 泊 山中庄介
柴田左治郎 岡部萬次 安富文蔵
田村貞右衛門 市山敬介 大野九郎右衛門
大野源八 大谷正八 増野四郎
神原 淨 伴田仁右衛門 村岡四郎右衛門
仲井半平 此兩人藝州罷越候付
松原和田介 連名除之

私共此度御難題之御願申上 恐入罷居

【214頁】

盟約前毛御座候得者 乍恐 御願申出候条
此段被成御沙汰可被下候 以上

三月廿七日

黒谷源太左衛門 安岡虎助 原井平左衛門
金山新右衛門 大橋順蔵 村岡与三
齊藤治右衛門 山本小右衛門 坪田門次
田村源内 伊藤勘作 糸賀次右衛門
成田平蔵 田原傳右衛門 山下宗巴
大塚善次 宇野伊右衛門 大谷喜添

【215頁】

田根 一 有田 泊 山中庄介
柴田左治郎 岡部萬次 安富文蔵
田村貞右衛門 市山敬介 大野九郎右衛門
大野源八 大谷正八 増野四郎
神原 淨 伴田仁右衛門 村岡四郎右衛門
仲井半平 此兩人藝州罷越候付
松原和田介 連名除之

私共此度御難題之御願申上 恐入罷居

之御許以存 御心入を以 御裁許被仰出
難有仕合奉存候 兼而御作法も有之
儀二御座候 大壮之御願申上 奉勞
御賢惠候段 深奉恐入候 依之差控
罷居申候間 此段被成御沙汰可被下候 以上

六月十一日

内願出之面々連名

右者今日大谷喜添勘場呼出二而 宅野
太郎左衛門ヨリ申渡候者 此度之儀 願之通被仰
出 依之御末家様思召寄二而 萩・須佐願出

之銘々差控申出可然と被仰聞候由二而 萩
二て者 一同二詰懸り中 差控申出候由 爰元
二て茂 先達而 願出之連判人数中ヨリ 被
申出可然由 萩ヨリ申来候段 太郎左衛門ヨリ授ケ
承り歸り候 尤今薄暮迄二 覚書差出候様
と之儀二付 月番所二而申合 前断覚書
相調 大谷喜添・仲井半平 勘場持参
仕候由事
六月十五日 大谷伊八儀 御用之儀有之

【216頁】 1581

候処 誠以厚 御心入を以 御裁許被仰出
難有仕合奉存候 兼而御作法も有之
儀二御座候 大壮之御願申上 奉勞
御賢惠候段 深奉恐入候 依之差控
罷居申候間 此段被成御沙汰可被下候 以上
五月十一日 此内願出之面々連名

右者今日大谷喜添勘場呼出二而 宅野
太郎左衛門ヨリ申渡候者 此度之儀 願之通被仰
出 依之御末家様思召寄二而 萩・須佐願出

【217頁】

之銘々差控申出可然と被仰聞候由二而 萩
二て者 一同二詰懸り中 差控申出候由 爰元
二て茂 先達而 願出之連判人数中ヨリ 被
申出可然由 萩ヨリ申来候段 太郎左衛門ヨリ授ケ
承り歸り候 尤今薄暮迄二 覚書差出候様
と之儀二付 月番所二而申合 前断覚書
相調 大谷喜添・仲井半平 勘場持参
仕候由事
六月十五日 大谷伊八儀 御用之儀有之

萩高心宅野左衛門一同二出萩仕候様
 此内御沙汰有之候所 宅野左衛門 病氣二付
 致延引 今日彼者一同二出萩仕候事
 一 六月十七日 大谷伊八儀 須佐職役被仰渡
 宅野太郎左衛門と両職被仰付候段 今日
 御直二被仰渡候由事

右之通 去冬已来可奉守 御家 申合せ候
 人々之内 反覆表裡之輩有之 御騒動

端二茂至り候者 御不為之御事 無是非
 次第二候 先之要言と相守り 御為を
 奉考候者 前断之通り 追々十八人
 御咎を蒙り候 是者 偏 宅野左衛門を始
 覆讒諛之族有之候故 如是 参懸り
 候者 眼前之次第候 雌雄を相決候八、
 天鑑明なる儀 忠倭之差別相分 可申
 候得共 忽両黨二相成候而 御領内干戈二
 および可申哉 然時者御大事二至り候儀

【218頁】

萩被召出 宅野太郎左衛門一同二出萩仕り候様
 此内御沙汰有之候所 宅野左衛門 病氣二付
 致延引 今日彼者一同二出萩仕候事
 一 六月十七日 大谷伊八儀 須佐職役被仰渡
 宅野太郎左衛門と両職被仰付候段 今日
 御直二被仰渡候由事

右之通 去冬已来可奉守 御家 申合せ候
 人々之内 反覆表裡之輩有之 御騒動

【219頁】

端二茂至り候者 御不為之御事 無是非
 次第二候 先之要言を相守り 御為を
 奉考候者 前断之通り 追々十八人
 御咎を蒙り候 是者 偏 宅野左衛門を始
 覆讒諛之族有之候故 如是 参懸り
 候者 眼前之次第候 雌雄を相決候八、
 天鑑明なる儀 忠倭之差別相分 可申
 候得共 忽両黨二相成候而 御領内干戈二
 および可申哉 然時者御大事二至り候儀

*1 讒諛(ざんゆ) = そしりへつらうこと

此段深奉恐入候儀二候 第一當春之御
 様子 段々御仁恕之御沙汰奉感候儀
 別心之者と候而も 追々奉悟
 御徳沢候八、自然と者 御為筋二一和可
 仕儀 此上者御家来中一致之心得を以
 御奉公奉遂其節候事 肝要之儀二候
 雖然 彼若既往之確執を以 忠直之
 者を毀候歟 又者 當時同志之者と候
 而も義を捨 利に趨り 邪曲 諛二陷
 候時者 勿論彼是之差別なく 屹と相
 正シ可申候 只々彦右衛門吉人 深入仕候故
 身を抛 蒙 御勘氣罷在候段 難默止
 候得共 當春以来之御様子
 御仁恕之御沙汰奉感心儀二候得者 追年
 者賢路開ケ 御仁徳流行仕候八、
 御勘氣御宥免等之儀茂 可有之御事
 二候 改而 不及申候得共 御為一途奉
 考 御奉公可奉遂其節と申合候事

【220頁】

【221頁】

= 「稲」の字ののぎ遍を言偏に置き換えた文字。(とう) DTP SOFT の設定に問題有り、活字を表記できない。

一 享和元年酉八月十四日増野正八組内棕
 小左衛門年寄證人之以正八分内意之趣
 當分ヨリ御用ニ立候養子仕小左衛門身柄
 居御願申出候様申入候由小左衛門身柄之
 儀者 當春御茶屋被召出候節 御家来
 多人數ヨリ御歎申出 其砌 古屋歸り被
 仰付 改而 逼塞被仰付 御心入を以

【222頁】

白紙

【223頁】

一 享和元年酉八月十四日 増野正八組内 棕
 小左衛門江 年寄證人を以 正八ヨリ内意之趣者
 當分ヨリ御用ニ立候養子仕 小左衛門身柄 隱
 居御願申出候様申入候由 小左衛門身柄之
 儀者 當春御茶屋被召出候節 御家来
 多人數ヨリ御歎申出 其砌 古屋歸り被
 仰付 改而 逼塞被仰付 御心入を以

無障被遂 御免 一圓相濟たる事二候処
 此度前断之内意申入候段 いか様之
 参懸り二候哉 不審二存候付 及問合 可然
 段各申合 半間中江廻文左左之通
 廻文を以致啓達候 椋小左衛門儀 當春
 御咎被仰付候節 御心入れを以 無障被遂
 御免 小左衛門身柄二付 御歎申上候銘々者
 不及申 孰茂 御慈悲之程 奉感心
 難有仕第奉存候 然処 此度組頭ヨリ
 彼者江年寄證人を以 當分ヨリ御用二立候
 養子御願申出 小左衛門身柄隠居之儀
 御願申出候様二と内意申聞せ 小左衛門身柄
 浮沈之境と相聞申候 當時御家来
 一和第一の砌 如此儀を申入候者 和解
 破却之發端二も相成可申哉と 氣毒
 不過之候 當役中を始 一和第一にして
 御為筋を 三 奉考候時節 組頭之
 於所存も既往之確執を心底二挟

【224頁】

無障被遂 御免 一圓相濟たる事二候処
 此度前断之内意申入候段 いか様之
 参懸り二候哉 不審二存候付 及問合 可然
 段各申合 半間中江廻文左左之通

廻文を以致啓達候 椋小左衛門儀 當春
 御咎被仰付候節 御心入れを以 無障被遂
 御免 小左衛門身柄二付 御歎申上候銘々者
 不及申 孰茂 御慈悲之程 奉感心
 難有仕第奉存候 然処 此度組頭ヨリ

【225頁】

彼者江年寄證人を以 當分ヨリ御用二立候
 養子御願申出 小左衛門身柄隠居之儀
 御願申出候様二と内意申聞せ 小左衛門身柄
 浮沈之境と相聞申候 當時御家来
 一和第一の砌 如此儀を申入候者 和解
 破却之發端二も相成可申哉と 氣毒
 不過之候 當役中を始 一和第一にして
 御為筋を 三 奉考候時節 組頭之
 於所存も既往之確執を心底二挟

不仁非義之内意を申入 廣大之
 御仁心を妨候所存者 定而 有之間敷儀
 決而 無余儀子細有之二而者 可有御座
 候得共 其様子与得不承候而者 不及
 落着候付 銘々増野正八宅罷越 様子
 相尋度も存候得共 此儀趣二寄候而者
 何角と及論争間敷儀二ても無之 左
 候時者 いか、敷有之候故 差控罷居
 寄々申合候所 別紙之通り二書立を以 正八

【226頁】

方江趣承合せ 尚小左衛門江も委敷 相尋候而
 事之様子 致承知度候故 及廻達候間
 御同意 御不同意之所 御肩書被成 可被差廻候
 已上

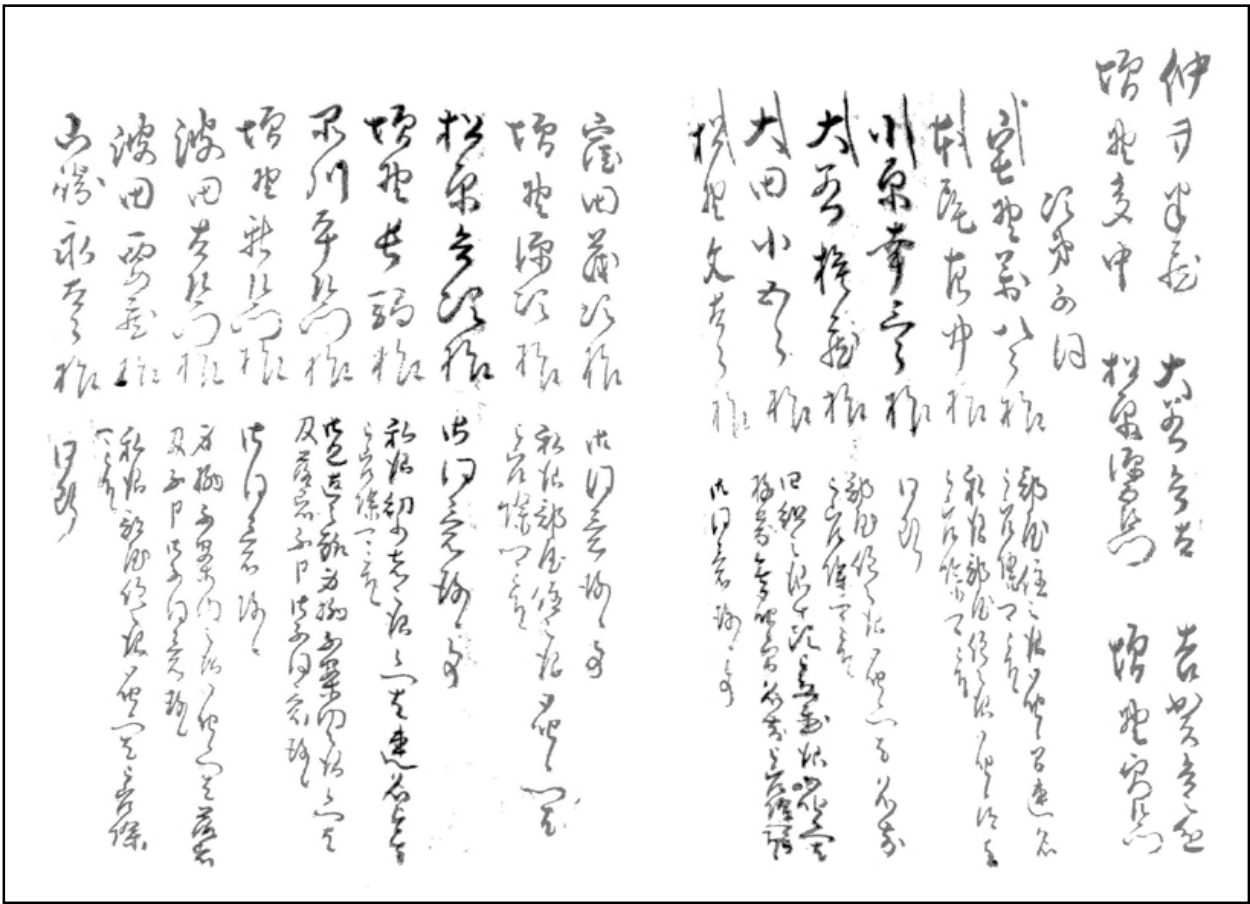
【227頁】

九月朔日

松原勘五郎 松本直馬 松原宗右衛門
 松本良左衛門 松原文左衛門 栗山藤蔵
 波田太郎右衛門 増野作左衛門 松原八郎右衛門
 内藤正左衛門 小国融蔵 入江左次馬

九月朔日

松原勘五郎 松本直馬 松原宗右衛門
 松本良左衛門 松原文左衛門 栗山藤蔵
 波田太郎右衛門 増野作左衛門 松原八郎右衛門
 内藤正左衛門 小国融蔵 入江左次馬



【228頁】

仲井半蔵 大谷兵太 吉賀兵之進
 増野多中 松原源五左衛門 増野貞左衛門
 次第不同
 宅野萬八郎様 部屋住之儀御座候間 連名
さしぞかれくたされ
 被差除可被下候
 本尾左中様 私儀部屋住之儀御座候得者
 被差除可被下候
 小原幸三郎様 同断
 大谷権蔵様 部屋住之儀御座候へ者名前
 被差除可被下候
 大田小五郎様 四組之儀者 頭被立置儀御座候へ者
たてあかれる
 存寄無御座候間 名前被差除可被下候
 松野文太郎様 御同意致候事

【229頁】

窪田茂次様 御同意致候事
 増野源次様 私儀部屋住之儀御座候へ者
 被差除可被下候
 松原兵次様 御同意致候事
 増野長駒様 私儀幼少者之儀候へ者連名
まじり
 被差除可被下候
 品川平左衛門様 御廻達之趣身柄不案内之儀候へ者
おくりあはせ
 及落着不申 御不同意致候
 増野新左衛門様 御同意致候
 波田太左衛門様 身柄不案内之儀御座候へ者 落着
 及不申 御不同意致候
 波田要蔵様 私儀部屋住之儀御座候へ者 被差除
 可被下候
 山崎永太郎様 同断

多根小源太様 御同意致候事
 井上龍蔵様 私儀格別存寄無御座候事
 市山傳左衛門様 私儀別而不案内者之儀御座
 候へ八 連名被差除可被下候
 尚々此廻文之儀者 不尋常儀御座候間 孰いすれヨリ
 被成御受取 何時御披見之段 被成御肩書
 御自身々々御持廻りニ々 在宿之御衆中江
 被成御直渡 廻り詰ヨリ月番 松原八郎左衛門
 増野貞左衛門間へ可被差返候 且又かつまた 差懸儀
 二付 在秋衆之儀者 連名差除申候 八ても方、
 右之通 及廻達候処 名下二相見候通 不同意
 之衆も有之候故 其分者差除 左之銘々ヨリ
 及被遣候次第左之通
 以手紙得御意候 然者御組内 椋小左衛門江
 當分ヨリ御用二相立候養子仕 身柄
 隠居之儀御願申出候様と 此内年寄
 證人を以 御内意被仰聞候由 致承知候
 右二付 御所存之所致承知度 別紙
 覚書を以得御意候間 夫々御答二趣キ

【230頁】

多根小源太様 御同意致候事
 井上龍蔵様 私儀格別存寄無御座候事
 市山傳左衛門様 私儀別而不案内者之儀御座
 候へ八 連名被差除可被下候
 尚々此廻文之儀者 不尋常儀御座候間 孰いすれヨリ
 被成御受取 何時御披見之段 被成御肩書
 御自身々々御持廻りニ々 在宿之御衆中江
 被成御直渡 廻り詰ヨリ月番 松原八郎左衛門
 増野貞左衛門間へ可被差返候 且又かつまた 差懸儀
 二付 在秋衆之儀者 連名差除申候 八ても方、
 右之通 及廻達候処 名下二相見候通 不同意
 之衆も有之候故 其分者差除 左之銘々ヨリ
 及被遣候次第左之通
 以手紙得御意候 然者御組内 椋小左衛門江
 當分ヨリ御用二相立候養子仕 身柄
 隠居之儀御願申出候様と 此内年寄
 證人を以 御内意被仰聞候由 致承知候
 右二付 御所存之所致承知度 別紙
 覚書を以得御意候間 夫々御答二趣キ

【231頁】

右之通 及廻達候処 名下二相見候通 不同意
 之衆も有之候故 其分者差除 左之銘々ヨリ
 及被遣候次第左之通
 以手紙得御意候 然者御組内 椋小左衛門江
 當分ヨリ御用二相立候養子仕 身柄
 隠居之儀御願申出候様と 此内年寄
 證人を以 御内意被仰聞候由 致承知候
 右二付 御所存之所致承知度 別紙
 覚書を以得御意候間 夫々御答二趣キ

被仰出可被下候以上

九月三日

杉原勘五郎 松本直馬
 松原宗右衛門 松原文左衛門
 波田太郎右衛門 増野作左衛門
 内藤正左衛門 小国融蔵
 松原兵次 窪田茂次
 増野貞左衛門 多根小源太
 仲井半蔵 増野多中
 松本良左衛門
 栗山藤蔵
 松原八郎右衛門
 入江左次馬
 吉賀兵之進
 増野新左衛門
 大谷兵太

松野文太郎 松原源五郎
 増野正八様

覚

一 御組内 椋小左衛門儀 当春御茶屋被召出候節
 大組・御手廻多人數御歎申上 其砌
 御慈悲を以 古屋滞被仰付 改而 逼塞被
 仰付候処 御心入を以 無障 被遂
 御免候段被仰渡 孰茂 御仁恵之程
 奉感心 難有仕合奉存候 其節 小左衛門

【232頁】

被仰出可被下候 以上

九月三日

松原勘五郎 松本直馬 松本良左衛門
 松原宗右衛門 松原文左衛門 栗山藤蔵
 波田太郎右衛門 増野作左衛門 松原八郎右衛門
 内藤正左衛門 小国融蔵 入江左次馬
 松原兵次 窪田茂次 吉賀兵之進
 増野貞左衛門 多根小源太 増野新左衛門
 仲井半蔵 増野多中 大谷兵太

【233頁】

松野文太郎 松原源五左衛門

増野正八様

覚

一 御組内 椋小左衛門儀 当春御茶屋被召出候節
 大組・御手廻多人數御歎申上 其砌
 御慈悲を以 古屋滞被仰付 改而 逼塞被
 仰付候処 御心入を以 無障 被遂
 御免候段被仰渡 孰茂 御仁恵之程
 奉感心 難有仕合奉存候 其節 小左衛門

一 役柄 只百と旨七の角を被仰と云ふ
 仰付一系に候事申中其の如組頭
 の候り遊遊と候との事申す候事
 意に候り申遠き事御座候事
 一 役柄申す仰付との事一役被仰候事
 之而仰申す仰付との事申す候事
 今申す一向御役目申す仰付との事
 申す候事申す仰付との事申す候事
 今申す一向御役目申す仰付との事
 申す候事申す仰付との事申す候事

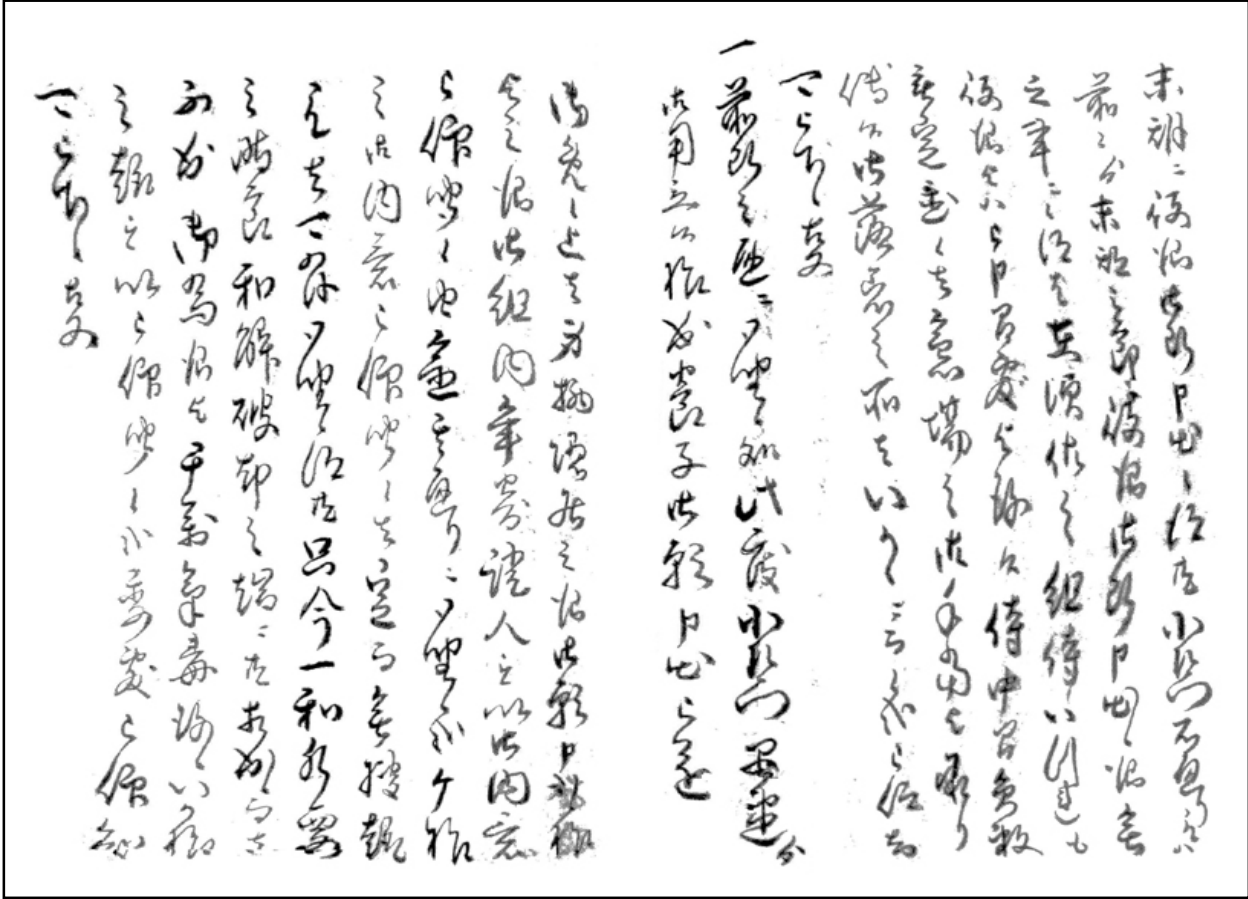
一 役柄 只百と旨七の角を被仰と云ふ
 仰付一系に候事申中其の如組頭
 の候り遊遊と候との事申す候事
 意に候り申遠き事御座候事
 一 役柄申す仰付との事一役被仰候事
 之而仰申す仰付との事申す候事
 今申す一向御役目申す仰付との事
 申す候事申す仰付との事申す候事
 今申す一向御役目申す仰付との事
 申す候事申す仰付との事申す候事

【234頁】

身柄 思召之旨七有之 役儀を者不被
 仰付候条 此段年寄中相心得 組頭
 江茂 申達置候様との御事二御座候由
 愈其通り相違無御座候哉と存候事
 一 役儀不被仰付との儀者 一役相立候役座
 を所勤不被仰付との御事二可有御座
 と存候 一向御役目不被仰付との事二而
 御座候時者 御用二無之人柄と 申す者二而
 可有御座候 御用二無之程之人柄を 何故

【235頁】

御咎無障 被遂 御免 知行可被立下哉
 此儀者 必定 組並之役目を者 勤仕被
 仰付と之御事二可有御座様二存候
 御身柄御落着をいか、二而御座候哉 仰出
 可被下候事
 一 在須佐之儀者 定勤同様之儀二而 組内ヨリ
 合力米被差出儀二御座候得共 是以 全
 役儀二て者被申間敷と存候 其子細者 老
 座之儀者 近年役席被立置候節は



【236頁】

末期二役儀御断申出候得共 小左衛門^標 右通二て八
 前々ヨリ末期之節 彼儀御断申出候儀無^{これ}
 之事^{なき}二候得者 在須佐之組侍 一いつ連も
 役儀と八被申間敷と存候 侍・中間員数
 被定置候者^{注1} 急場之御手当と承り
 傳候 御落着之所者 いか、二而候哉 被仰出^{おあせいでられ}
 可被下候事^{くださるべく}
 前断之通二御座候処 此度小左衛門へ早速ヨリ^標
 御用立候様成養子御願申出 被遂^{おゆるし}

【237頁】

御免候上者 身柄隠居之儀 御願申出候様
 と之儀 御組内年寄證人を以 御内意
 被仰聞候由 愈其通り二御座候哉^や ケ様
 之御内意被仰聞候者 定而 無據趣^{あためて よんじしころなき}
 二て者可有御座候得共 只今一和肝要^{は ことあるべく そらえたり}
 之時節 和解破却之端二共相成候而者^{あいなげそらうては}
 不成 御為儀と千萬気毒存候 いか様
 之趣を以 被仰聞候哉 委敷 被仰知^{おあせしうられ}
 可被下候事^{くださるべく}

*1 侍・中間人数 = 元禄六年の元禄組騒動以前、四組は一組64名(侍・中間の内訳不明)であったが、騒動後一組55人(侍25人、中間30人)編成に改組された。(増野家文書 12-4 四組人高其外覚書)

一仕官之身柄 不限大小身 一世之進退
 者 不容易儀 二御座候 小左衛門儀 右之
 御内意被仰聞候段者 當役中江毛
 被仰談候而 御内意被仰聞候哉 被仰知
 可被下候事

九月

最初増野正八ヨリ返答
 御手紙并御覺書致拝見候 今般
 被成御承知度趣者 御用邊へ毛相拘

儀二付 私二御答不相成候間 物筋申出
 御伺仕候上 趣二より可及御答候 為其
 如是御座候 以上

九月三日

増野正八

松原勘五郎様

又正三人へ当ル

二度目手紙案

以手紙得御意候 棕小左衛門儀 当春之

【238頁】

仕官之身柄 不限大小身 一世之進退
 者 不容易儀 二御座候 小左衛門儀 右之
 御内意被仰聞候段者 當役中江毛
 被仰談候而 御内意被仰聞候哉 被仰知
 可被下候事

九月

最初増野正八ヨリ返答
 御手紙并御覺書致拝見候 今般
 被成御承知度趣者 御用邊へ毛相拘

【239頁】

儀二付 私二御答不相成候間 物筋申出
 御伺仕候上 趣二より可及御答候 為其
 如是御座候 以上

九月三日

増野正八

松原勘五郎様

又正三人へ当ル

二度目手紙案

以手紙得御意候 棕小左衛門儀 当春之

此答之儀 尚免之儀 以款中 之儀
 之有及申 難御仁 惠之程 奉感心
 難有次第 奉存候 然此 度小左衛門儀
 當分より 立御用 候養子 御願申上 被遂
 御免候上 者 身柄 隱居之儀 御願申上 候様
 御内意 被仰聞 候趣二付 いか様之 御様子二
 候哉 御所存 之所致 承知度 先達而
 得御意 候処 御用 邊江も 相拘候 儀二付
 私二御答 も不被 相成候 物筋江 被仰出

【240頁】

御咎被遂 御免 其節御歎申上候銘々
 者 不及申 孰茂御仁惠之程奉感心
 難有次第奉存候 然此度小左衛門儀
 當分より立御用候養子 御願申上 被遂
 御免候上者 身柄隱居之儀 御願申上候様
 御内意被仰聞候趣二付 いか様之御様子二
 候哉 御所存之所致承知度 先達而
 得御意候処 御用邊江も相拘候儀二付
 私二御答も不被相成候 物筋江被仰出

此向之儀 亦之儀 亦之儀 亦之儀
 難致承知 勿論未 然之
 儀は御問 合合わせ 仕候段 御遠慮 二も存候得 共
 己二御内 意をも 被仰聞 候儀二付 事之
 様子表 方物筋 江茂も 問出申 度存候 へ共
 當時一 和第一 之儀二付 貴様 御落着
 之所を 致御問 合候次 第二御 座候 然此
 御伺い 不被仰 上而者 難被 仰下由 左候 八、
 御蜜事 共二御 座候哉 尚又 於御 身柄も

【241頁】

御向被仰上候上 御答可被仰下之通 御答之
 趣致承知候 御役筋之儀 勿論未然之
 儀は御問合合わせ仕候段 御遠慮二も存候得共
 己二御内意をも被仰聞候儀二付 事之
 様子表方物筋江茂も 問出申度存候へ共
 當時一和第一之儀二付 貴様御落着
 之所を致御問合候次第二御座候 然此
 御伺い不被仰上而者 難被仰下由 左候八、
 御蜜事共二御座候哉 尚又 於御身柄も

此所落居之而之内意と仰せ給ふ
致し同合し有今又何と仰せ給
は御子致し御後又一時御意
可致執下し仰下し御意と仰せ給
九月三日 前ノ人数連名

増野正八様

二度目正八分返答

御手紙致し拝見候 然者 棕小左衛門儀二付
又々被仰越 委細致承知候 先二得

此意御意御意御物儀二付私二御
返答不相成候間 物筋申出伺之上
趣二寄 可及御返答段者 御承知之前二
御座候 於身柄者 不落着と申訊一向
無御座候得共 被仰付候御用 大小事
共二 然・未然二不限 何廉被仰越候而も
私二御返答不相成候間 伺い相渡候上
可及御答候間 左様御承知可被成候 右
為御答 如是御座候 以上

【242頁】

御不落着之所を 御内意被仰聞 各ヨリ
致御問合候故 今更御伺い被仰上候哉
御様子致承知度 又々 得御意候間
御答趣可被仰下候 為其得御意候 以上
九月三日 前ノ人数連名
増野正八様

【243頁】

二度目正八ヨリ返答
御手紙致し拝見候 然者 棕小左衛門儀二付
又々被仰越 委細致承知候 先二得
御意候様 御用邊相拘儀二付 私二御
返答不相成候間 物筋申出伺之上
趣二寄 可及御返答段者 御承知之前二
御座候 於身柄者 不落着と申訊一向
無御座候得共 被仰付候御用 大小事
共二 然・未然二不限 何廉被仰越候而も
私二御返答不相成候間 伺い相渡候上
可及御答候間 左様御承知可被成候 右
為御答 如是御座候 以上

九月四日

増野正八

名當前二回シ

三度目紙案文

以手紙得御意候 然者 椋木小左衛門江貴様
御内意被仰聞候儀二付 再應致御聞合
候処 御用大小事共二 然・未然二不限
何ケ度得御意候而も 私二御答え不被相
成候間 御伺被相濟候上 可被及御返答
之通致承知候 表方致御問出儀二

【244頁】

九月四日 増野正八

名當前二回シ

三度目手紙案文

てがみをもつて
以手紙得御意候 然者 椋木小左衛門江貴様
御内意被仰聞候儀二付 再應致御聞合
候処 御用大小事共二 然・未然二不限
何ケ度得御意候而も 私二御答え不被相
成候間 御伺被相濟候上 可被及御返答
之通致承知候 表方致御問出儀二

【245頁】

物筋江申出儀二候得共 表方申
出候而者 當時 御為いか、可有御座哉と
存 既二御沙汰も相發シ 世人孰も承り
事之様子 不審二存候者 間々御座候故
於御役座も 既往之儀は御覆蔵無
之御聞せ可被下哉と存 當今一和第一
之時節 無御隔意 申承度 貴様
御落着之所を致御聞合候次第二
御座候処 表方江被仰出候段 各所存

そつらえども
候得者 物筋江申出儀二候得共 表方申
出候而者 當時 御為いか、可有御座哉と
存 既二御沙汰も相發シ 世人孰も承り
事之様子 不審二存候者 間々御座候故
於御役座も 既往之儀は御覆蔵無
之御聞せ可被下哉と存 當今一和第一
之時節 無御隔意 申承度 貴様
御落着之所を致御聞合候次第二
御座候処 表方江被仰出候段 各所存

公致取遠出取致之所おあり候
 之旨之儀之旨候後 公用之外
 申下候儀御意之旨候 先達而
 致取回合候旨之旨候 勿論此余一向
 仰間二及不申候間 左様御承知可被下候
 為其得御意候 以上

九月七日

連名如前

增野正八様

三度目正八ヨリ返答

此紙致取見候私組内様小左衛門
 儀二付 身柄落着之所 被成御承知度
 段被仰越候付 公邊へも相拘儀故
 私二御答不相成 物筋申出伺之上 可
 及御答之通致返答候 依之 無據
 向後 公用之外不被仰承 御疎遠
 相成候上者 先達而 御問合之廉々
 此余一向御聞せ不及申之通り被仰下
 旁致承知候 右為御答 得御意候

【246頁】

在者致相違 御所存之所 於各 不得
 其意候 依之 無據 向後公用之外
 不申承候 御疎遠二相成候上者 先達而
 致御問合候廉々 勿論此余一向 被
 仰間二及不申候間 左様御承知可被下候
 為其得御意候 以上

九月七日 連名如前

增野正八様

三度目正八ヨリ返答

【247頁】

御手紙致拝見候 私組内 様小左衛門
 儀二付 身柄落着之所 被成御承知度
 段被仰越候付 公邊へも相拘儀故
 私二御答不相成 物筋申出伺之上 可
 及御答之通致返答候 依之 無據
 向後 公用之外不被仰承 御疎遠
 相成候上者 先達而 御問合之廉々
 此余一向御聞せ不及申之通り被仰下
 旁致承知候 右為御答 得御意候

九月八日 増野正八

名當前二回

前断之通 疎遠二も及候程之人柄二候八、
被遂 御吟味候様 物筋申出候次第も
可有之儀二候得共 當春も不尋常儀
を申出 又々申出候而も 却而 御不為出来
可仕哉と申合 無據 及疎遠 見合罷居
候事

一 在萩大組中江 最初ヨリ之次第 及乞合

左之人数同意之由二而 書状を以
疎遠之儀申入候事

仁保内蔵 松原利高 金子順平

城市軍次 増野豹蔵

一 前断之通 及乞合候処 と得可致思慮由

返答有之候人数左之通

石津傳右衛門 大谷与三右衛門 仁保和助

侯賀多右衛門 侯賀右門

一 御手廻中二も各同様之心得二而 此内段々

【248頁】

九月八日 増野正八
名當前二回シ

前断之通 疎遠二も及候程之人柄二候八、
被遂 御吟味候様 物筋申出候次第も
可有之儀二候得共 當春も不尋常儀
を申出 又々申出候而も 却而 御不為出来
可仕哉と申合 無據 及疎遠 見合罷居
候事

一 在萩大組中江 最初ヨリ之次第 及乞合注1

【249頁】

候処 左之人数同意之由二而 書状を以

疎遠之儀申入候事

仁保内蔵 松原利右衛門 金子順平

城市軍次 増野豹蔵

一 前断之通 及乞合候処 と得可致思慮由

返答有之候人数左之通

石津傳右衛門 大谷与三右衛門 仁保和助

侯賀多右衛門 侯賀右門

一 御手廻中二も各同様之心得二而 此内段々

*1 乞合 = (こいあい) 所望する 同意を求める。

取遣有之及疎遠候由 尤 宅野伴内
松野警每人不同意之由之支

一 御膳夫申候由

一 市丸組工人申候由

一 市丸組・宇谷組同様之心得二而 組頭

本尾官次・増野十左衛門江 様子申入候處

両頭差留候得共 御為筋之存付 不得

止事故歟 及疎遠候由 尤 市丸組

之内 松井茂三郎・中尾忠蔵兩人 不

同意之由申候由

一 御馬屋中間多人數 御臺所中間 不

残同様之心得二者候得共 手頭々々既二

及疎遠 匹夫之身通り故 言入之道

無之 申入を者差控罷居候由相聞

候事

一 椋小左衛門江 相組中ヨリいか様之参り懸り

候哉 疎遠之儀申入候由相聞候事

【250頁】

取遣有之 及疎遠候由 尤 宅野伴内・

松野警兩人 不同意之由二而候事

一 御膳夫中 同断

一 御細工人中 同断

一 市丸組・宇谷組同様之心得二而 組頭

本尾官次・増野十左衛門江 様子申入候處

両頭差留候得共 御為筋之存付 不得

止事故歟 及疎遠候由 尤 市丸組

之内 松井茂三郎・中尾忠蔵兩人 不

【251頁】

同意之由相聞候事

一 御馬屋中間多人數 御臺所中間 不

残同様之心得二者候得共 手頭々々既二

及疎遠 匹夫之身通り故 言入之道

無之 申入を者差控罷居候由相聞

候事

一 椋小左衛門江 相組中ヨリいか様之参り懸り

候哉 疎遠之儀申入候由相聞候事

白紙

益田隼人様須佐御越 熟和之儀

と仰出候次第

第五

一 享和二年卯月廿日 職役大谷伊八ヨリ内授之趣

去春已来之参懸り二付

御父子様御苦勞ニ被思召候付 今日益田隼人様

爰元 被成御越 御家来中熟和之儀被仰聞

筈ニ候 然処去秋 棕小左衛門 手前之儀二付 増野

正八江疎遠事有之由 此捌相成不申而八 一和

不相調儀ニ付 小左衛門儀 是迄之通ニ被差置候八、

益田隼人様須佐御越 熟和之儀
被仰出候次第 第五

一 享和二年¹⁸⁰²卯月廿日^{四月} 職役大谷伊八ヨリ内授之趣者^は

去春已来之参懸り二付

御父子様御苦勞ニ被思召候付 今日益田隼人様

爰元 被成御越 御家来中熟和之儀被仰聞

筈ニ候 然処去秋 棕小左衛門 手前之儀二付 増野

正八江疎遠事有之由 此捌相成不申而八 一和

不相調儀ニ付 小左衛門儀 是迄之通ニ被差置候八、

半間々々之儀者 當役中取計仕候八、捌合之道也
 出来可申哉二候得共 又正八組内不折合之廉也
 可有之儀二付 其道付被仰付 行詰 小左衛門儀
 隱居を者 不被仰付と之 思召二候 尚又 窪田彦右衛門
 儀も御宥免之御沙汰有之筈二候 近日熟和
 之儀被仰聞可有之候得共 前断之旨趣 一向
 移り無之而者 一統熟和と申所之御請 旁
 落着も相成間敷哉二付 内移り仕候 御疎者
 有之間敷候得共 御家来一統熟和不仕 而八

【254頁】

不成御為儀二候間 萬事被差捨 熟和之御
 心得肝要二存候由申事二付 同志之面々寄々
 申合候処 御家来中不和と申候而者 世評旁
 甚以 不成御為儀と於各も氣毒二存候儀
 正八疎遠と候而も 無據參懸り二付 前断之
 思召二候時者 何分一統一和不仕而 相不叶儀二候
 正八疎遠も當役中扱二相成候八、任意
 一統一和之心得二罷居可申段申合候事
 同廿三日 大組十四人 御手廻十人 左之面々江

【255頁】

不成御為儀二候間 萬事被差捨 熟和之御
 心得肝要二存候由申事二付 同志之面々寄々
 申合候処 御家来中不和と申候而者 世評旁
 甚以 不成御為儀と於各も氣毒二存候儀
 正八疎遠と候而も 無據參懸り二付 前断之
 思召二候時者 何分一統一和不仕而 相不叶儀二候
 正八疎遠も當役中扱二相成候八、任意
 一統一和之心得二罷居可申段申合候事
 同廿三日 大組十四人 御手廻十人 左之面々江

御意尚益田準人様御演説之旨有之候間
 今薄暮 御殿罷出候様 御触有之 薄暮
 追々罷出 相揃候上 當役中列座二而 職役
 當番大谷伊八ヨリ申聞世候者 此度御家来中
 一和之儀二付 被成 御意候 早晚者
 御意之旨讀知被仰付候処 此度之儀者
 御直二茂被仰聞度候得共 多人數之儀 左様
 毛難被為成二付 御直二被仰聞候道理二
 拜見被仰付候間 銘々拜見仕候様と相述
 申上

御意書八寸注^{すえ}居にして正面二鏝有之候付
 筆並を以 吉人宛追々罷出 拜見相濟候
 又々伊八申候者 準人様ヨリ御演説被仰聞候
 追付被成御出候八、控居候様申事二付 一應
 退座 控居候処 無間準人様御茶屋ヨリ
 御殿被成御出 御二ノ間御着座 當役中縁側
 相詰 一同二被召出 御同問ヨリ次ノ間へ懸着座
 之上 御末家中様ヨリ之御演説被仰聞候 尚
 御意・御演説御請之儀者 銘々誓紙を以

【256頁】

御意 尚益田準人様御演説之旨有之候間
 今薄暮 御殿罷出候様 御触有之 薄暮
 追々罷出 相揃候上 當役中列座二而 職役
 當番大谷伊八ヨリ申聞世候者 此度御家来中
 一和之儀二付 被成 御意候 早晚者
 御意之旨讀知被仰付候処 此度之儀者
 御直二茂被仰聞度候得共 多人數之儀 左様
 毛難被為成二付 御直二被仰聞候道理二
 拜見被仰付候間 銘々拜見仕候様と相述
 申上

【257頁】

御意書八寸注^{すえ}居にして正面二鏝有之候付
 筆並を以 吉人宛追々罷出 拜見相濟候
 又々伊八申候者 準人様ヨリ御演説被仰聞候
 追付被成御出候八、控居候様申事二付 一應
 退座 控居候処 無間準人様御茶屋ヨリ
 御殿被成御出 御二ノ間御着座 當役中縁側
 相詰 一同二被召出 御同問ヨリ次ノ間へ懸着座
 之上 御末家中様ヨリ之御演説被仰聞候 尚
 御意・御演説御請之儀者 銘々誓紙を以

*1 八寸 = 和紙の一種。近世、下野、信濃に産した帳簿用の厚紙。また漆漉(こ)しに用いる吉野紙の別称。

申出候様 何分當役中可申合との儀 被仰聞
 候付 當役中可申合段申上 一同二罷下候事
 罷出候面々左之通
 同志 別心
 松原勘五郎 栗山五郎左衛門 大谷与三右衛門
 同志 別心 同志
 松本良左衛門 本尾官治 栗山藤藏
 別心 同志 別心
 増野正八 波田太郎右衛門 増野十左衛門
 同志 別心 同志
 増野作左衛門 仁保和助 入江左次馬
 同志 別心病氣
 松原利右衛門 波田太左衛門
 御手廻
 日蓮 伊藤 山下宗巴 田村貞右衛門
 大草甚右衛門 仲井半平 柴田十郎
 別心 宅野伴内 品川昌見 田村玄茂
 波田仁右衛門
 一大組月番松原勘五郎・増野作左衛門 御手廻月番
 大草甚右衛門・仲井半平 控居候様との儀二而
 控居候処 御意書・御演説書写 并 誓紙
 前書案分渡方相成 取下候事
 御意書・御演説左之通

【258頁】

申出候様 何分當役中可申合との儀 被仰聞
 候付 當役中可申合段申上 一同二罷下候事
 罷出候面々左之通
 同志 別心
 松原勘五郎 栗山五郎左衛門 大谷与三右衛門
 同志 別心 同志
 松本良左衛門 本尾官治 栗山藤藏
 別心 同志 別心
 増野正八 波田太郎右衛門 増野十左衛門
 同志 別心 同志
 増野作左衛門 仁保和助 入江左次馬
 同志 別心病氣
 松原利右衛門 波田太左衛門
 御手廻

【259頁】

同志 同 同
 宅野伊右衛門 山下宗巴 田村貞右衛門
 同 同 同
 大草甚右衛門 仲井半平 柴田十郎左衛門
 別心 同志 同
 宅野伴内 品川昌見 田村玄茂
 同
 波田仁右衛門
 一大組月番松原勘五郎・増野作左衛門 御手廻月番
 大草甚右衛門・仲井半平 控居候様との儀二而
 控居候処 御意書・御演説書写 并 誓紙
 前書案分渡方相成 取下候事
 御意書・御演説左之通

御意覚

家中追々申出之趣二付 末家衆取計
之筋有之 一統令順和儀二候所 今以
以前之意地を挟候面々有之様相見
依之 上下疑念差起 政道之障二も相成
儀二候 別而 當時所帯向注¹難洪二付候而者
肝要仕組をも可相付之處 心底之隔有
之而者俟約之詮も無之 仕組之手段
不相成 誠二危急之期至候半哉 彼是

【260頁】

御意覚

家中追々申出之趣二付 末家衆取計
之筋有之 一統令順和儀二候所 今以
以前之意地を挟候面々有之様相見
依之 上下疑念差起 政道之障二も相成
儀二候 別而 當時所帯向注¹難洪二付候而者
肝要仕組をも可相付之處 心底之隔有
之而者俟約之詮も無之 仕組之手段
不相成 誠二危急之期至候半哉 彼是

【261頁】

一大事之度 自今 心得有之度 父子
所存茂候条 下以是迄之宿念差捨 熟
和之心得尤候 此段末家衆を茂申合候間
委細彼方ヨリ演説可有之候 与得勤考候而
一統令熟和 奉公可為肝要候 此段其方
共江申聞せ候間 申合不洩様可申傳事

演説

先達而御家来中 忠節之志願有之候段八
尤之事二候 夫二付 御黒印御意等被差下

演説

一大事之度 自今 心得有之度 父子
所存茂候条 下以是迄之宿念差捨 熟
和之心得尤候 此段末家衆を茂申合候間
委細彼方ヨリ演説可有之候 与得勤考候而
一統令熟和 奉公可為肝要候 此段其方
共江申聞せ候間 申合不洩様可申傳事

*1 所帯向 = 益田家の財政。

各所存之筋を申達一途相済たる事二
 候得共 其後も傍輩間 爾今 解相候躰
 共不相見 問々不快之趣有之候付而者
 深被成御心痛 今般 御意を以被仰聞
 通二候 御家来中不熟と候而者 世上
 評判も不相濟儀 殊 御部屋御役中
 公邊江之聞 別而不御為事候 尚又御
 所帯御仕組筋不相調次第 御難波
 行詰 御危急之期二も至候半哉 於各も

【262頁】

至而御氣遣此事候 何篇御家来中
 一和第一之事候 孰茂全疎有之間敷
 候得共 能々勘考可被申候 且
 天下一統御大法も有之儀候得者 假令
 誓約等有之面々たり共 已来者其
 儀無已前二仕 尚 疎遠杯之儀までも
 一向差捨 疑念を不餘 偏二御上下
 一統熟和相調候様被申合 御為厚ク
 被遂御奉公候段 肝要之事二候 此段

【263頁】

御末家中ヨリ重畳申聞候様被仰聞
旁二付 致相對候事
御末家中

一 萩詰懸り市中住宅之面々江者 過ル十九日
於萩同様之被仰聞有之候由 同志中ヨリ過ル
廿日之便を以申越候付 爰元之儀も今日
被仰聞有之候段 明日之便を以大組・御手廻
月番連名各詰懸り両組両三人江当
申越候事

一 四組江者頭々ヨリ 其外者支配々々ヨリ 今夜同
様之被仰聞有之候由事
一 同廿四日 伊八ヨリ申聞せ有之候者 此度之
御請 及遅候而者不成 御為儀二候間
御疎者有之間敷候得共 早速被仰出
可然存候 此段追々被仰傳候様と申事
二付 同志中申合候処 一統熟和之儀者
随分其心得二罷居可申候得共 御演説
之内二 誓約等有之面々者無以前二

【264頁】

御末家中ヨリ重畳申聞候様被仰聞
旁二付 致相對候事
御末家中

一 萩詰懸り市中住宅之面々江者 過ル十九日
於萩同様之被仰聞有之候由 同志中ヨリ過ル
廿日之便を以申越候付 爰元之儀も今日
被仰聞有之候段 明日之便を以大組・御手廻
月番連名二而 詰懸り両組両三人江当
申越候事

【265頁】

一 四組江者頭々ヨリ 其外者支配々々ヨリ 今夜同
様之被仰聞有之候由事
一 同廿四日 伊八ヨリ申聞せ有之候者 此度之
御請 及遅候而者不成 御為儀二候間
御疎者有之間敷候得共 早速被仰出
可然存候 此段追々被仰傳候様と申事
二付 同志中申合候処 一統熟和之儀者
随分其心得二罷居可申候得共 御演説
之内二 誓約等有之面々者無以前二

伊和の事申上り候に申上り候に大義存立
候事金和事候事候事偏二御家と
事守との要約候事候事偏二御家と
候事士道難相立二付左之通演説書
之以準人様江可申出と申合候事

演説書

先達而御家来中 忠節之志願有之
候段者 尤之儀被思召之由 難有仕合奉
存候 将又 今般御家来中 熟和之趣

二付御入割被仰聞 乍憚 御尤之御事
奉畏候 去々申上冬 御家来中 忠志
を發シ候節者 一統一和仕り居候処 其後
御為筋之存付 齟齬仕候様相成 去
春甚不穩參懸り二付 御為と奉考
不尋常儀を御歎申上候処 願之通二者
不被仰付候得共 御末家中様思召之筋
を茂被仰聞 其節御咎之人々御宥免
之御裁許被仰出 一圓相濟 和解第一

【266頁】

仕候様との御事候得共 去々申上冬 大義存立
候主意 全私事二て無之 偏二 御家を可
奉守との要約二て候得者 無已前二仕候而八
何と茂士道難相立二付 左之通演説書
を以 準人様江可申出と申合候事

演説書

先達而 御家来中 忠節之志願有之
候段者 尤之儀被思召之由 難有仕合奉
存候 将又 今般御家来中 熟和之趣

【267頁】

二付御入割被仰聞 乍憚 御尤之御事
奉畏候 去々申上冬 御家来中 忠志
を發シ候節者 一統一和仕り居候処 其後
御為筋之存付 齟齬仕候様相成 去
春甚不穩參懸り二付 御為と奉考
不尋常儀を御歎申上候処 願之通二者
不被仰付候得共 御末家中様思召之筋
を茂被仰聞 其節御咎之人々御宥免
之御裁許被仰出 一圓相濟 和解第一

之心得二罷居候処 其後 増野正八組内ヨリ
 不快事出来仕候而 御家来内 多人數
 彼者と公用之外者 無據 及疎遠候
 参懸り 都合之処者 追々被聞召上 候半と
 奉存候 然処 右一件茂 當役中取計も
 御座候由 其上窪田彦右衛門・棕小左衛門
 身柄二付候而八
 上御寛仁之思召被成御座候段 當役中
 之内ヨリ旁之趣 内移り承知仕 難有
 次第奉存候 然ル上者 當役中一致仕候而
 御賞罰廉直を第一二仕候時者 御家来
 中末々まで奉浴 御徳澤 一統熟和相
 調可申様奉存候 熟和不仕而者御仕組
 筋不相調との御事 於尔下茂此事を祐
 深奉恐入罷居候 御所帯御難洪御繰
 巻難被為成 次二者御家来中 数年之
 困窮 地下向以 至而難洪之仕合 彼是
 を以 奉考 候得共 乍恐 御大事之御時節

【268頁】

【269頁】

此奉存候々然ル上者當役中一致仕候而
 御賞罰廉直と申之 侍所々御家来
 中末々まで奉浴 御徳澤一統熟和相
 調可申様奉存候 熟和不仕而者御仕組
 筋不相調との御事 於尔下茂此事を祐
 深奉恐入罷居候 御所帯御難洪御繰
 巻難被為成 次二者御家来中 数年之
 困窮 地下向以 至而難洪之仕合 彼是
 を以 奉考 候得共 乍恐 御大事之御時節

之心得二罷居候処 其後 増野正八組内ヨリ
 不快事出来仕候而 御家来内 多人數
 彼者と公用之外者 無據 及疎遠候
 参懸り 都合之処者 追々被聞召上 候半と
 奉存候 然処 右一件茂 當役中取計も
 御座候由 其上窪田彦右衛門・棕小左衛門
 身柄二付候而八
 上御寛仁之思召被成御座候段 當役中
 之内ヨリ旁之趣 内移り承知仕 難有

誓約之儀者前文全愁訴杯可仕之
 私事二て者無御座 偏 奉考御為 一統
 凝忠誠 可奉遂御奉公段申談 奉汚
 神明 御家来中一致之要約二而御座
 候得者 無二仕候時者 多人數之御家来
 士道も衰へ可申哉 左候時者 乍恐 御家
 御手薄共八有御座間敷哉と奉存候
 其上一統熟和之妨者有御座間敷様

誓約之儀者前文全愁訴杯可仕之
 私事二て者無御座 偏 奉考御為 一統
 凝忠誠 可奉遂御奉公段申談 奉汚
 神明 御家来中一致之要約二而御座
 候得者 無二仕候時者 多人數之御家来
 士道も衰へ可申哉 左候時者 乍恐 御家
 御手薄共八有御座間敷哉と奉存候
 其上一統熟和之妨者有御座間敷様

【270頁】

歎と奉存候 於下奉考候所者 最早尋
 常之御仕組筋二而者 乍恐 御目途茂
 付兼可申哉 幾重茂當役中一致仕
 御儉約立之御道付不仕而者 不相叶儀と
 奉存候 御儉約相立候時者 御家来中未々
 迄去々申ノ冬之志願成就仕 安心仕候而
 愈一統熟和相調 可申様奉存候 且又
 天下一統御大法も有之儀二御座候得者
 假令 誓約等有之候面々たり共 無已前二

【271頁】

仕候様との御事 奉恐入候 然ル處 御家来中
 誓約之儀者 前文全愁訴杯可仕之
 私事二て者無御座 偏 奉考御為 一統
 凝忠誠 可奉遂御奉公段申談 奉汚
 神明 御家来中一致之要約二而御座
 候得者 無二仕候時者 多人數之御家来
 士道も衰へ可申哉 左候時者 乍恐 御家
 御手薄共八有御座間敷哉と奉存候
 其上一統熟和之妨者有御座間敷様

奉存候得者 乍恐 旁之趣御賢恵 被
 成下候様奉希候 何ケ度申上候而茂 御
 俟約之御取々差懸候御事と 下以奉
 存候得者 一統之儀者難申上儀ニ御御座候へ共
 於私共者 熟和肝要之心得を以 御奉公
 申上度奉存候 尚又 御家来中余両
 三人 心和解之儀者 第一執政之心得ニ
 可有之儀歟と奉存候 赤心之所 覆
 蔵仕候而者 熟和被仰付候 思召之旨ニモ

【272頁】

奉存候得者 そうらえは 乍恐 あそれながらたがた 旁之趣御賢恵 なり 被
 成下候様奉希候 わがいたてまつり 何ケ度申上候而茂 ても 御
 俟約之御取々差懸候御事と しもまつて 下以奉
 存候得者 そうらえは 一統之儀者難申上儀ニ御御座候へ共
 於私共者 わたくしどもにおいては 熟和肝要之心得を以 御奉公
 申上度奉存候 尚又 御家来中余両
 三人 心和解之儀者 第一執政之心得ニ
 可有之儀歟と奉存候 赤心之所 覆
 蔵仕候而者 熟和被仰付候 思召之旨ニモ

【273頁】

相叶不申儀歟と奉存候故 心底之所申上
 仕候間 御聞濟被成下候様奉希候事
 同廿五日前断之趣 飛脚を以 萩詰懸り
 市中住宅之同志中江大組・御手廻月番
 連名ニ而詰懸り 両三人江当 及乞合候事
 同廿六日 萩ヨリ飛脚帰着 いづ連も存寄無
 之 同意ニ存候間 於愛元一同ニ申出呉候様
 申越候事
 同夜 前断之演説書 月番兩人御茶屋

相叶不申儀歟と奉存候故 あいかないもつさす 心底之所申上
 仕候間 おききませなしくたさり 御聞濟被成下候様奉希候事
 同廿五日前断之趣 飛脚を以 萩詰懸り
 市中住宅之同志中江大組・御手廻月番
 連名ニ而詰懸り へ宛 両三人江当 及乞合候事
 同廿六日 萩ヨリ飛脚帰着 いづ連も存寄無
 之 なく 同意ニ存候間 こゝもにおいて 於愛元一同ニ申出呉候様
 申越候事
 同夜 前断之演説書 月番兩人御茶屋

持参準人様「最」益田申上候内職役
 大谷伊八ヨリ内々申聞せ候者今日身柄
 御茶屋被召出準人様被仰聞候者此度
 之御請若難共共有之候而者不相濟儀
 二候 只様及遅レ候段 いか様之事二候哉
 内々聞繕申上候様と之御事二候 いか、御
 落着相成候哉相尋候付 多人数之儀
 二て 此内評議相決兼 其上在萩之者
 江茂 及取遣候故及遅候 漸評議致一決

【274頁】

之取利紙之色之渡説書準人様「最」益田
 申上候内職役
 大谷伊八ヨリ内々申聞せ候者今日身柄
 御茶屋被召出準人様被仰聞候者此度
 之御請若難共共有之候而者不相濟儀
 二候 只様及遅レ候段 いか様之事二候哉
 内々聞繕申上候様と之御事二候 いか、御
 落着相成候哉相尋候付 多人数之儀
 二て 此内評議相決兼 其上在萩之者
 江茂 及取遣候故及遅候 漸評議致一決

【275頁】

候所 別紙之通之演説書 準人様へ差出
 申度 既二追付御茶屋持参之所存候由
 申入 案書 入内見候所 伊八申候者 此演説
 差出候儀者 先差控候様 其内右下書
 替借用申度由申事二付 今夜差出
 候儀者致延引 下書伊八江相渡置候
 右下書 伊八ヨリ準人様江入御内覽候由
 相聞候 且又 御手廻中・御膳夫・宇谷組・
 市丸組・御船頭・御細工人中茂同様之趣二

其の如く演説を書きしは地方之由候
 致所望候 其外者右之半間々々にモ
 同様之所存二罷居候由 隼人様へ申上
 候由相聞候事
 右申出之人數左之通り
 松原勘五郎 松原宗右衛門 松原文左衛門
 松本直馬 松本良左衛門 栗山藤蔵
 波田太郎右衛門 増野作左衛門 松原八郎右衛門
 内藤正左衛門 仁保團平 入江左次馬
 小国融蔵 城市軍次 松原利右衛門
 窪田茂次 金子順平 増野貞左衛門
 増野新左衛門 多根小源太 仲井半蔵
 増野多中 吉賀兵之進 大谷兵太
 松野久太郎 松原源五左衛門
 一同廿七日 伊八ヨリ只様物音注¹無之二付 最早
 演説書差出可申哉之段 月番ヨリ及催促
 候處 今少差控候様申事二付 今日モ
 見合罷在候事

【276頁】

候由 尤演説下書きを者 此方之分計
 致所望候 其外者右之半間々々にモ
 同様之所存二罷居候由 隼人様へ申上
 候由相聞候事

右申出之人數左之通り

松原勘五郎 松原宗右衛門 松原文左衛門
 松本直馬 松本良左衛門 栗山藤蔵
 波田太郎右衛門 増野作左衛門 松原八郎右衛門
 内藤正左衛門 仁保團平 入江左次馬

【277頁】

小国融蔵 城市軍次 松原利右衛門
 窪田茂次 金子順平 増野貞左衛門
 増野新左衛門 多根小源太 仲井半蔵
 増野多中 吉賀兵之進 大谷兵太
 松野久太郎 松原源五左衛門
 一同廿七日 伊八ヨリ只様物音注¹無之二付 最早
 演説書差出可申哉之段 月番ヨリ及催促
 候處 今少差控候様申事二付 今日モ
 見合罷在候事

*1 物音 = 音沙汰。たより。 報告。連絡。 大谷伊八から何も連絡がないので、最早演説書を提出すると月番から伊八へ催促したところ、提出はもう少し待てとの事なので今日も提出を見合わせた。

一回夜伊八ヨリ授ケ有之候趣者 此内之演説
 書之趣 御内々隼人様江申上候処 誓約物
 之内 去々申ノ冬 一統之誓約を者立直
 其後同意之面々計誓約等有之候ハ、
 無已前二仕候様 尤此分茂 於尔下 封込二
 仕置候様との御事二候 其外演説書之趣
 得と被成御覽 御写取も相成候 右之通り二而
 落着相成候ハ、 表方差出二者及間敷
 其通二相心得居候様 尚又 此度御請 被

【278頁】

申上候上者 已後 過當之御咎事等 全無之
 事二候得者 弥以 孰茂尽忠勤候様 隼人様
 より御書物可被下と之御事二候 且又 申ノ
 冬誓約相立候哉否之段者 不容易儀二
 御座候得者 身柄吉人之演説計二而 何ぞ
 証拠無之而者 御落着難相成 被思召
 衆も可有之候得者 隼人様江別紙之通
 身柄氣付之所を致上書候処 上書之
 通二取計候様被仰聞候 一統御落着之

【279頁】

端ニモ可相成候間 右上書之案文 入御
 覽候由ニ而 別紙相渡候 依之 各申合
 候處 去々申ノ冬 誓約さへも立居候時八
 其後誓約之儀者 御家来中御為筋
 之存付 違却出来有之候様相見候付
 申ノ冬之温盟二候得者 一統熟和と候時八
 強而不申立而茂相濟候儀 左候得者 前断
 之通致落着 早速御請申出 熟和之
 心得ニ罷居可申候 且又 隼人様より御

【280頁】

端ニモ可相成候間 右上書之案文 入御
 覽候由ニ而 別紙相渡候 依之 各申合
 候處 去々申ノ冬 誓約さへも立居候時八
 其後誓約之儀者 御家来中御為筋
 之存付 違却出来有之候様相見候付
 申ノ冬之温盟二候得者 一統熟和と候時八
 強而不申立而茂相濟候儀 左候得者 前断
 之通致落着 早速御請申出 熟和之
 心得ニ罷居可申候 且又 隼人様より御

【281頁】

書物可被下と之儀 被對 御當家候而者
 厚思召二候得共 全く御咎筋を恐 何角と
 申次第 少も無之 御賞罰不直之儀も
 有之 御不為と存付候時者 幾應も身
 命を抛手 御諫御歎等申上候儀 臣下之道
 其段忘却も不仕 尚又 此度一統熟和
 之儀 御請申出候而者 全挾疑念候筋無
 之候得共 御書下を者御断可申上と申合
 落着相成候事

書物可被下と之儀 被對 御當家候而者
 厚思召二候得共 全く御咎筋を恐 何角と
 申次第 少も無之 御賞罰不直之儀も
 有之 御不為と存付候時者 幾應も身
 命を抛手 御諫御歎等申上候儀 臣下之道
 其段忘却も不仕 尚又 此度一統熟和
 之儀 御請申出候而者 全挾疑念候筋無
 之候得共 御書下を者御断可申上と申合
 落着相成候事

準人様江伊八ヨリ上書之案

御内々申上候事

昨夜申上候趣二付 何分廉立不申候様 熟和
相調候様二と奉存 色々思惟仕候処 下之
心得 誓約無已前二仕候時者 多人数之
御家来 土道之衰二も相成 御手薄共八
有御座間敷哉 其上熟和之妨二者
相成申間敷との申出二御座候 去々申ノ
冬誓約之儀者 御家来一統之儀二

御座候得者 熟和之妨二も相成申間敷候間
其俣二而 可被差置候 其段誓約等有之
面々者 無已前二相心得候様との思召二
御座候八、 於此段者 昨日御内密被仰聞候
思召通を以 内々取計候様共被仰付候
時者 何分下ヨリ之演説書申出仕せ間敷
早速誓紙相調差出候様 旁内々取
計仕見申度奉存候 申ノ冬誓約之
儀者 偏其砌忠義と入はまり候而 相

【282頁】

準人様江伊八ヨリ上書之案
御内々申上候事

昨夜申上候趣二付 何分廉立不申候様 熟和
相調候様二と奉存 色々思惟仕候処 下之
心得 誓約無已前二仕候時者 多人数之
御家来 土道之衰二も相成 御手薄共八
有御座間敷哉 其上熟和之妨二者
相成申間敷との申出二御座候 去々申ノ
冬誓約之儀者 御家来一統之儀二

【283頁】

御座候得者 熟和之妨二も相成申間敷候間
其俣二而 可被差置候 其段誓約等有之
面々者 無已前二相心得候様との思召二
御座候八、 於此段者 昨日御内密被仰聞候
思召通を以 内々取計候様共被仰付候
時者 何分下ヨリ之演説書申出仕せ間敷
早速誓紙相調差出候様 旁内々取
計仕見申度奉存候 申ノ冬誓約之
儀者 偏其砌忠義と入はまり候而 相

調候誓紙之無已前二相心得候而者
 其節下申出之処迄も不忠二相当候様
 共者相成申間敷哉と其段至而氣
 毒千萬奉存候而申合候趣歟と内々
 相聞申候前文之通申ノ冬一統判物
 之外誓約有之面々之儀者昨日
 之御下意を以取計共被仰付候時八
 無已前二相心得候様申聞せ已後
 入用無之物二御座候得共封込二仕

【284頁】

調候誓紙を無已前二相心得候而者
 其節下申出之処迄も不忠二相当候様
 共者相成申間敷哉と其段至而氣
 毒千萬奉存候而申合候趣歟と内々
 相聞申候前文之通申ノ冬一統判物
 之外誓約有之面々之儀者昨日
 之御下意を以取計共被仰付候時八
 無已前二相心得候様申聞せ已後
 入用無之物二御座候得共封込二仕

入はまり取捌仕見可申と奉存候
 何ヶ度申上候茂御一件穩便二相調
 候得かしと奉存氣付之所真之御
 内密申上仕候御賢恵共者被成御座
 間敷哉昨日被仰聞候趣も有之候故
 氣付無覆蔵先御前計江申上
 仕候被成御吟味いか敷被思召候八、
 不仕已前二被仰付被下候様奉希候
 幾重も御内々被聞召上被遊御賢恵

【285頁】

候様 入はまり 取捌仕見可申と奉存候
 何ヶ度申上候茂 御一件穩便二相調
 候得かしと奉存 氣付之所 真之御
 内密申上仕候 御賢恵共者 被成御座
 間敷哉 昨日被仰聞候趣も有之候故
 氣付 無覆蔵 先御前計江申上
 仕候 被成御吟味 いか敷被思召候八、
 不仕 已前二被仰付被下候様奉希候
 幾重も御内々被聞召上 被遊御賢恵

三月廿七日

卯月廿七日

右之内二昨日被仰聞候御下意之趣を以
と有之候者 御墨付可差下との儀二而
御座候 上書之通二取計候様との儀二而
御座候間 与得御勘考候而 何分御落着
有之度存候事
前断之廉々 在萩同志中へ明日之
便を以申越候事

同日廿八日御書下御断之儀 左之通演
説書を以 伊八江差出候事

此度被仰聞之趣 御請仕候上者 已後
過当之御咎事等 勿論無之儀候条
いつ連も 愈以 尽忠勤候様 隼人様ヨリ
御書下可被成下との御事 此内被仰聞
奉畏難有仕合奉存候 孰も与得
申合仕候処 御意之旨 尚御演説

【286頁】

被下候様 奉存候事

卯月廿七日

右之内二 昨日被仰聞候御下意之趣を以
と有之候者 御墨付可差下との儀二而
御座候 上書之通二取計候様との儀二而
御座候間 与得御勘考候而 何分御落着
有之度存候事
前断之廉々 在萩同志中へ明日之
便を以申越候事

【287頁】

同日廿八日 御書下御断之儀 左之通演
説書を以 伊八江差出候事

此度被仰聞之趣 御請仕候上者 已後
過当之御咎事等 勿論無之儀候条
いつ連も 愈以 尽忠勤候様 隼人様ヨリ
御書下可被成下との御事 此内被仰聞
奉畏難有仕合奉存候 孰も与得
申合仕候処 御意之旨 尚御演説

之類物言紙之紙書信りて上ハ全お
下挟疑念候筋無御座候得者 御書下
成下候段者 於下奉恐入候間 此段
宜御取計可被下候 以上

四月廿八日

付り 大組ニ而申出候人数之儀者 前二
相見候通 尤此度萩江之合 間合
無之二付 在萩之者八連名無之
候事

右之通相認 伊八宅江 松原勘五郎・増野
作左衛門 致持参候 尚又 口達ニ而内々申入
候者 窪田彦右衛門手前之儀
上御寛仁之思召も被成御座候段 難有仕合
奉存候 乍此上 身柄之所者 只今之通ニ而
茂 何卒御勘気御宥免之御験注¹有^{これ}
之候様 御内々隼人様江 御身柄ヨリ御噂
ニても被仰上 御取計筋者有之間敷哉
全一統ヨリ御歎等申上候筋ニ而者 無御座

【288頁】

之趣 誓紙を以御請申上候上八 全於
下挟疑念候筋無御座候得者 御書下
被成下候段者 於下奉恐入候間 此段
宜御取計可被下候 以上

四月廿八日

付り 大組ニ而申出候人数之儀者 前二
相見候通 尤此度萩江之合 間合
無之二付 在萩之者八連名無之
候事

【289頁】

右之通相認 伊八宅江 松原勘五郎・増野
作左衛門 致持参候 尚又 口達ニ而内々申入
候者 窪田彦右衛門手前之儀
上御寛仁之思召も被成御座候段 難有仕合
奉存候 乍此上 身柄之所者 只今之通ニ而
茂 何卒御勘気御宥免之御験注¹有^{これ}
之候様 御内々隼人様江 御身柄ヨリ御噂
ニても被仰上 御取計筋者有之間敷哉
全一統ヨリ御歎等申上候筋ニ而者 無御座

*1 験 = しるし、きざし、ききめ ためし、調べるこゝろみ。

此内已來 追々内々被仰聞も有之内
 取計も仕儀二御座候得者 其筋相調
 可申段者 難計候得共 身柄心得を以 御
 所存之処を者 内々申上仕置可申段 返
 答有之 引取候事

付り 御手廻中・御膳夫・宇谷組・市丸組・
 御船頭・御細工人 一つ連も同志之
 者ヨリ者本文兩条共二同様二申出

但此内隼人様御越砌 市丸組二而 松井
 茂三郎・中尾忠蔵 下兩組注2年寄證
 人江御上下 其外侍分江的矢志手
 宛 御中間分江 皮ノ下緒志懸宛
 拜領被仰付候付 上兩組二おゐて
 末々者 ケ様脇組 尚同組二而も別志之
 者江者 御賞美被仰付候八 いか様之訳
 を以て被仰付候儀二而御座候哉と 不

【290頁】

候得共 心底之所 致御内咄候段 相述候処
 此内已來 追々内々被仰聞も有之内
 取計も仕儀二御座候得者 其筋相調
 可申段者 難計候得共 身柄心得を以 御
 所存之処を者 内々申上仕置可申段 返
 答有之 引取候事

【291頁】

但此内隼人様御越砌 市丸組二而 松井
 茂三郎・中尾忠蔵 下兩組注2年寄證
 人江御上下 其外侍分江的矢志手
 宛 御中間分江 皮ノ下緒志懸宛
 拜領被仰付候付 上兩組二おゐて
 末々者 ケ様脇組 尚同組二而も別志之
 者江者 御賞美被仰付候八 いか様之訳
 を以て被仰付候儀二而御座候哉と 不

*2 下兩組 = 四組の内市丸、宇谷の兩組を「上兩組」、須佐地、瀬尻兩組を「下兩組」と呼んだ。

折合之者七有之由ニ相聞候へ共
 何分御家来一和^{つかまつら}不仕^{すては}而者
 尚為不成儀と遂勘弁^{かんべん}前断之
 趣ニ而落着相成候由相聞候事
 一 同日銘々誓紙を以 御請申出候 左之通
 神文前書之文

今般
 御父子様 御意之旨被成下 尚御末家
 様ヨリ御入割被仰聞 謹而 奉得其旨

折合之者七有之由ニ相聞候へ共
 何分御家来一和^{つかまつら}不仕^{すては}而者
 尚為不成儀と遂勘弁^{かんべん}前断之
 趣ニ而落着相成候由相聞候事
 一 同日銘々誓紙を以 御請申出候 左之通
 神文前書之文

【292頁】

折合之者^{これある}も有之由ニ相聞候へ共
 何分御家来一和不仕^{つかまつら}而者
 御為不成儀と遂勘弁^{かんべん}前断之
 趣ニ而落着相成候由相聞候事
 一 同日銘々誓紙を以 御請申出候 左之通

神文前書之事

今般
 御父子様^{注1}御意之旨被成下 尚御末家
 様ヨリ御入割被仰聞 謹而 奉得其旨

【293頁】

乍憚^{はばかりながら} 御尤之御事承恐入候 然上者 奉對^{かみにたいし}
 上候筋之儀者勿論 傍輩間之儀
 迄も 已来^{以來} 別而無隔意一和仕
 御為厚奉^{あつくかんこう}勘考^{かんこう} 御奉公可申候間 此段
 宜御取計被成下候様奉希候 已上
 神文略之
 四月廿八日 姓名血判
 充無シ^宛

*1 御父子様 = 益田就恭 (寛政12年12月23日隠居) 益田房清。

之儀者半間中不残月番所取揃
御用所差出候事

同日月番松原勘五郎・増野作左衛門
勘場罷出候様との儀にて罷出候処
大組多人數去秋増野正八江疎遠有之候由
其節正八ヨリ申出候 此度御家来中
熟和之儀被仰出候而者 右疎遠をも
當役中致所望度候間 被任其意候得かしと
當役中列座二而職役当番 大谷伊八ヨリ申聞せ
列座之

當役中七行奉任之儀指を挨拶有之
旨付執事二口合也若昔死りて
一前所之執事口合一執事若兄色落
右方若以指付之儀にて任之云々口合之月
十日月番入江左治馬勘場罷出 此内被
仰聞候 増野正八江疎遠之儀 いつ連も
示合候処 右疎遠之儀者 段々趣も有之
儀二御座候得共 此度一統和熟之儀
御意を以被仰聞 尚

右之通銘々月番所江差出候 此御請

【294頁】

之儀者 半間中不残月番所取揃
御用所差出候事

同日 月番松原勘五郎・増野作左衛門 勘場罷
出候様との儀にて罷出候処 大組多人數 去
秋 増野正八江疎遠有之候由 其節 正八ヨリ
申出候 此度御家来中 熟和之儀被仰出
候而者 右疎遠をも當役中致所望度
候間 被任其意候得かしと 當役中列座二而
職役当番 大谷伊八ヨリ申聞せ 列座之

【295頁】

當役中も 何卒 被任其意候様と挨拶有之
候付 孰茂 可申合由 相答罷下候事
一 前断之趣申合候処 前二相見候通 落着
相成居候儀二付 愈 可任其意と申合 五月
十日 月番入江左治馬勘場罷出 此内被
仰聞候 増野正八江疎遠之儀 いつ連も
示合候処 右疎遠之儀者 段々趣も有之
儀二御座候得共 此度一統和熟之儀
御意を以被仰聞 尚

上御寛仁之御思召之旨 先達而御内
移り承知仕居候儀二付 万事差捨 任
出所定二日也職役番宅野太郎左衛門江
申入罷下候事

付 正八江疎遠事二付 取遣之手紙

職座所望二付 差出候事

御手廻中・市丸組・宇谷組・御膳夫・御船頭・
御細工人中江之儀も 前断同様之儀二
候由相聞候事

隼人様 四月廿九日 被成御歸萩候事

宅野太郎左衛門・大谷伊八・小原権六・小国彦七
四人共二氣分相注^あ二付 御役御断申出置
候処 六月十四日 願之通 四人共二被遂
御免候事

付 彦七儀八此節在萩二而 十三日

御沙汰有之候事

窪田彦右衛門儀 先達而 押隠居被仰付
徘徊并親類相對被差留候処 此度

【296頁】

上御寛仁之御思召之旨 先達而御内
移り承知仕居候儀二付 万事差捨 任
御処置可申由 職役當番宅野太郎左衛門江
申入罷下候事
付 正八江疎遠事二付 取遣之手紙
職座所望二付 差出候事
御手廻中・市丸組・宇谷組・御膳夫・御船頭・
御細工人中江之儀も 前断同様之儀二
候由相聞候事

【297頁】

隼人様 四月廿九日 被成御歸萩候事
宅野太郎左衛門・大谷伊八・小原権六・小国彦七
四人共二氣分相注^あ二付 御役御断申出置
候処 六月十四日 願之通 四人共二被遂
御免候事
付 彦七儀八此節在萩二而 十三日
御沙汰有之候事
窪田彦右衛門儀 先達而 押隠居被仰付
徘徊并親類相對被差留候処 此度

*1 氣分相 = (きぶんやい) 気分がすぐれない。病気のこと。(山口県史 資料編幕末維新3 1015頁参照)

思召之旨有之先祖寺参り近親類間
 往来被差免候段御沙汰有之
 御寛仁之程孰茂難有奉存候事

再度大義御願一件 第六

一 享和二年戊七月十二日先達而本尾官治
 組金山長左衛門 證人役中勘定方之儀
 組頭不審之筋有之 覚書を以 長左衛門江
 相尋候処 長左衛門 答書相調差出候 右書立
 物 組頭ヨリ御用所差出 及 上達 長左衛門儀
 御調被仰付 落罪仕候段 頭ヨリ組内へ知せ
 有之候由 其上刀属取り上げ 手械など入候由
 風聞有之候 長左衛門儀 組内勘定邊

【298頁】

思召之旨有之これあり 先祖寺参り・近親類間
 往来被差免候段さしゆるされ 御沙汰有之これあり
 御寛仁之程 孰茂いすれも 難有奉存候事ありがたく

【299頁】

再度大義御願一件 第六

一 享和二年戊七月十二日 先達而 本尾官治
 組 金山長左衛門 證人役中勘定方之儀
 組頭不審之筋有之これあり 覚書を以 長左衛門江金山へ
 相尋候処 長左衛門 答書相調差出候 右書立
 物 組頭ヨリ御用所差出 及 上達 長左衛門儀金山
 御調被仰付 落罪仕候段 頭ヨリ組内へ知せ
 有之候由 其上刀属取り上げ 手械など入候由
 風聞有之候 長左衛門儀 組内勘定邊

之儀二付候而者 左迄之重科有之趣
 之儀二付候而者 左迄之重科有之趣
 と者兼々承及不申儀二付 甚だ不穩事二
 存候得共 其実否不承而者いか、哉と
 存候所 頭ヨリ落罪之段 組内江知せ有之
 組内驚入 颯々敷注¹有之候由相聞候 長左衛門
 此度之不調法 組内勘定懸り相之儀二
 候得者 其失相当之御咎二而候得八 組内
 何かと申儀有之間敷事 勿論之儀二候処
 颯々敷有之候者 いか様之次第歟 甚

【300頁】

不審に候者、知此組内分侍中留一同に
 此心字等組分七迄之、他は付度之變
 付之て長左衛門身柄八兎も角も 両組
 一同一筋之御願申出候 落着と相聞候
 此度 長左衛門儀 組内懸り相之儀二付而之
 御咎筋 其組内不折相と候時者 過当之
 罪二落入候物歟と 各申合候 何分去々
 年来 御家来不平二付候而八 別而
 上御苦勞二被 思召 去春

【301頁】

不審二存居候処 昨日 組内ヨリ侍・中間一同二
 罷出 宇谷組ヨリモ追々罷出 此度之變二
 付候而者 長左衛門身柄八兎も角も 両組
 一同一筋之御願申出候 落着と相聞候
 此度 長左衛門儀 組内懸り相之儀二付而之
 御咎筋 其組内不折相と候時者 過当之
 罪二落入候物歟と 各申合候 何分去々
 年来 御家来不平二付候而八 別而
 上御苦勞二被 思召 去春

*1 颯々敷 = あっさりとしたさま。さらりとしたさま。ここでは「さっさと」くずくずしないで、すばやく行動する事。「拙速」の意味ではなからうか。

御意之旨二而一和之儀被仰聞候処 其砌
 公儀非常事有之 又先般隼人様御越
 之節も熟和之儀 御意被仰聞候処
 其間又之儀之颯々敷儀致出来候
 在也 上御賢慮之所者 御意之旨
 誠以難有奉存候得共 ケ様之非常事
 度々有之候者 兎角古失小過を求メ
 色々と及
 上達候故之儀歟と 御家来人心不平

只今之通二而一統之熟和相調
 かく所帯御取直シも不相成 終二者
 御家御大事之期二も 至り可申哉と 甚以
 氣毒千萬之儀二付 無據 左之通御願
 出仕候事
 付り 両組人数出浮仕候付
 御国境之儀注1 空虚二相成而者 被對
 公儀注2 被仰分無之儀二候 如何取計候
 哉と相尋候処 銘々嫡子・次男・三男等

【302頁】 55

御意之旨二而一和之儀被仰聞候処 其砌
 無間 非常事有之 又先般隼人様御越
 之節も熟和之儀 御意被仰聞候処
 無間 又々ケ様之颯々敷儀致出来候
 乍恐 上御賢慮之所者 御意之旨
 誠以 難有奉存候得共 ケ様之非常事
 度々有之候者 兎角古失小過を求メ
 色々と及
 上達候故之儀歟と 御家来人心不平

【303頁】

二而 只今之通二而者 所詮一統之熟和相調
 かたく 御所帯御取直シも不相成 終二者
 御家御大事之期二も 至り可申哉と 甚以
 氣毒千萬之儀二付 無據 左之通御願
 出仕候事
 付り 両組人数出浮仕候付
 御国境之儀注1 空虚二相成而者 被對
 公儀注2 被仰分無之儀二候 如何取計候
 哉と相尋候処 銘々嫡子・次男・三男等

*1 御国境之儀 = 弘坂防衛体制のこと。益田家が益田より須佐に移住した後、防長両国の北の守りは益田家の最大の任務であった。
 *2 公儀 = 萩藩（毛利家）のこと。「大公儀」は幕府を意味した。

一人宛八宿居仕仕常之御手当之御手當援せ
 とも不仕候年寄證人申候故 此上
 随分堅固二相守居候様申聞候事
 御願申上候事
 御所帯 累年之御難渋二付 申ノ冬
 御家来中一統二大義御願申上候處
 御免 難有仕合奉存候 然上者 一廉御
 所帯御立直不仕而者 不相叶儀二御座
 候処 無間 御家来両黨二相成 非常之御
 咎事多ク 御仕組み筋之御手付も不被
 為成 重疊奉恐入候 然處 當夏熟和
 之儀二付
 御意 從御末家中様 御演説之旨
 謹而御請申上 熟和第一之心得二罷居
 候処 金山長左衛門手前之儀二付 人心甚
 不平二御座候 様御座候而者 所詮
 御安慮之期二至り不申候間 申ノ冬

【304頁】

一人宛八宿居仕 非常之御手当 援せ
 を者不仕段 年寄證人申候故 此上
 随分堅固二相守居候様申聞候事

御願申上候事

御所帯 累年之御難渋二付 申ノ冬

御家来中一統二大義御願申上候處

御免 難有仕合奉存候 然上者 一廉御

所帯御立直不仕而者 不相叶儀二御座

【305頁】

候処 無間 御家来両黨二相成 非常之御

咎事多ク 御仕組み筋之御手付も不被

為成 重疊奉恐入候 然處 當夏熟和

之儀二付

御意 從御末家中様 御演説之旨

謹而御請申上 熟和第一之心得二罷居

候処 金山長左衛門手前之儀二付 人心甚

不平二御座候 様御座候而者 所詮

御安慮之期二至り不申候間 申ノ冬

湯為筋之儀一統申談候誓約反覆仕
 至而妨二相成候者被遂
 御吟味被下候様奉願候
 御吟味被成下二おひて八右之人柄申出
 可仕候無左候時者申ノ冬忠節之志願
 成就不仕臣下之節儀難相立奉存
 候故無據一同二申出候段者奉恐入候へ
 とも前断不尋常儀二付於其段者落
 着仕罷居候間

【306頁】

湯賢慮被成下候様宜御執成被仰上
 可被下候以上
 七月十二日 各中
 益田登人殿
 益田次郎三郎殿
 益田三郎左衛門殿
 益田勘右衛門殿
 増野舍人殿

【307頁】

湯賢慮被成下候様宜御執成被仰上
 可被下候以上
 七月十二日 各中
 益田登人殿
 益田次郎三郎殿
 益田三郎左衛門殿
 益田勘右衛門殿
 増野舍人殿

演説

別紙演説筋と奉存 御願申出候二付而八
申合仕候迎茂 随分穩便之心得二
罷居候間 此段御聞届被成可被下候 以上

七月十二日

各中

右之書付演説 大組月番 松原八郎右衛門・
増野貞左衛門・御手廻・御膳夫・上兩組注¹侍
中間・御船頭・御細工人・御殿中間・御臺所
御中間 孰茂^{いすれも}兩人宛一同二御用所罷出

益田登人江引渡候処 請込相成^{あいなり} 其後又々
右之人数呼出二而 登人申候者^は 御願出之趣 身柄
致出萩 同列中申合せ御伺可申上由^{せうしあぐへく}

授有之候事^{これあり}
右願出之人数 連名横帳二相調^{あいとのえ} 本書江^へ
付 半間注²々々持参之事
付り 連名別紙有之候事

七月十四日

大組之内

願出人数中

【308頁】

演説

別紙御為筋と奉存 御願申出候二付而八
申合仕候迎茂 随分穩便之心得二
罷居候間 此段御聞届被成可被下候 以上

七月十二日

各中

右之書付演説 大組月番 松原八郎右衛門・
増野貞左衛門・御手廻・御膳夫・上兩組注¹侍
中間・御船頭・御細工人・御殿中間・御臺所
御中間 孰茂^{いすれも}兩人宛一同二御用所罷出

【309頁】

益田登人江引渡候処 請込相成^{あいなり} 其後又々
右之人数呼出二而 登人申候者^は 御願出之趣 身柄
致出萩 同列中申合せ御伺可申上由^{せうしあぐへく}
授有之候事^{これあり}
右願出之人数 連名横帳二相調^{あいとのえ} 本書江^へ
付 半間注²々々持参之事
付り 連名別紙有之候事

七月十四日 大組之内

願出人数中

*1 上兩組 = 市丸組と宇谷組。

*2 半間 =

右計内願出之趣及

御座候之儀盆中之儀二付 盆後可被遂

御詮議候条 左様可有御承知候事

右者登人事 今日歸着二付 松原八郎右衛門・増野貞左衛門 呼出二而 於御用所被申聞候事 前断之趣 一統申合せ候而 左之通演説書を以趣申出候事

演説

此度御願出之趣 被及 御座候之儀 盆中之儀二付 盆後御詮議可被仰付之旨承知仕候 且在郷ヨリ出浮之者者 宿元引取候様との御事二御座候得共 此度之御願筋 不容易儀二御座候得者 半間々々相集 御沙汰之旨相待申候 在郷出浮之者茂 心底を究 罷出候間 御沙汰承候迄者 盆と御座候而も 宿元引取候様二八難

【310頁】

右此内願出之趣 及

御座候 盆中之儀二付 盆後可被遂

御詮議候条 左様可有御承知候事

戌ノ七月十四日

右者登人事 今日歸着二付 松原八郎右衛門・増野貞左衛門 呼出二而 於御用所被申聞候事 前断之趣 一統申合せ候而 左之通演説書を以趣申出候事

演説

【311頁】

此度御願出之趣 被及

御座候之儀 盆中之儀二付 盆後御詮議

可被仰付之旨承知仕候 且在郷ヨリ出浮

之者者 宿元引取候様との御事二御座

候得共 此度之御願筋 不容易儀二

御座候得者 半間々々相集 御沙汰

之旨相待申候 在郷出浮之者茂

心底を究 罷出候間 御沙汰承候迄者

盆と御座候而も 宿元引取候様二八難

仕御座候間 盆後之儀八無遅滞 御
沙汰相成候様 御取成可被下候 以上

七月十四日

七月十九日朝五ツ時 萩ヨリ飛札到来 昨
薄暮 遠近方注ヨリ老人呼出二而 須佐江
御目附 重見勇殿・物頭仲三左衛門殿・岡
又十郎殿被差越候間 親類衆・家老之
者引受仕候様 尤親類衆八一両人被参

引請相成候様二と之儀 承り帰り申候由
知せ有之候事

前断之趣二付 色々申合候処

公儀ヨリ御役人衆被差出候段者 至而
御上下気毒之儀二付 家老中取計
筋も有之儀と存 氣付之次第 大組
月番栗山藤蔵・松原八郎右衛門・御手廻月番
有田八左衛門・安富文蔵一同二御用所罷出 益田
登人・益田次郎三郎・益田三郎左衛門・増野舎人江

【312頁】

仕御座候間 盆後之儀八無遅滞 御
沙汰相成候様 御取成可被下候 以上

七月十四日

七月十九日朝五ツ時^{八時} 萩ヨリ飛札到来 昨
薄暮 遠近方注ヨリ老人呼出二而 須佐江
御目附 重見勇殿・物頭仲三左衛門殿・岡
又十郎殿被差越候間 親類衆・家老之
者引受仕候様 尤親類衆八一両人被参

【313頁】

引請相成候様二と之儀 承り帰り申候由
知せ有之候事

前断之趣二付 色々申合候処

公儀ヨリ御役人衆被差出候段者 至而
御上下気毒之儀二付 家老中取計
筋も有之儀と存 氣付之次第 大組
月番栗山藤蔵・松原八郎右衛門・御手廻月番
有田八左衛門・安富文蔵一同二御用所罷出 益田
登人・益田次郎三郎・益田三郎左衛門・増野舎人江

*1 遠近方 = 萩本藩の国元留守居役所管の役所で、遠近方とは江戸その他へ公務出張の路程の遠近、要務の軽重に応じて公平に諸役を調査分賦することを専務とすることから名付けられた。後世漸く権力加わり、諸令細大となく此役を経由し、且つ、諸士以上犯罪の糾問終わりたるものは遠近方がこれを裁決し案を具して藩主の聴允を仰ぐ。後年、当職の所管となる。文久三年四月、江戸方右筆、地方右筆と合併して政務座役と言う。

口達ニ申入リ候者今般萩ヨリ御役人衆被
差出シ候段承知仕候此内御家来中
大惣之御願申上候故之儀二而八無御座哉と奉恐
入候此内之御願筋被遂

御許容候段御家老中御請合二而御座候八、
各半間申合諸半間何茂宿々引取
候様申聞世可仕候左候而各様之内
只今ヨリ被為作御出萩須佐之儀八穩便二
折合候間御役人衆御出浮之處者被差

止可被下候家来之者御不審筋も御座
候八、孰連成共可差出候間御糺明被仰付
候様二被仰出儀二而八無御座哉各様御
身通二而者別而御氣毒二可被思召各於
半間中茂

公儀御役人衆御領内引受候段八至而
氣毒千万二奉存候半間中氣付之所
御為筋二も可相成哉と存各様江申達
候由相演候處職役三郎左衛門答二御家来

【314頁】

口達ニ而申入候趣者今般萩ヨリ御役人衆被
差出候段承知仕候此内御家来中 大惣之
御願申上候故之儀二而八 無御座哉と奉恐
入候 此内之御願筋 被遂
御許容候段 御家老中 御請合二而御座候八、
各半間申合 諸半間何茂宿々引取
候様申聞世可仕候 左候而 各様之内
只今ヨリ被為作御出萩 須佐之儀八穩便二
折合候間 御役人衆御出浮之處者 被差

【315頁】

止可被下候 家来之者御不審筋も御座
候八、 孰連成共 可差出候間 御糺明被仰付
候様二被仰出儀二而八無御座哉 各様御
身通二而者 別而 御氣毒二可被思召 各於
半間中茂
公儀御役人衆 御領内引受候段八 至而
氣毒千万二奉存候 半間中氣付之所
御為筋二も可相成哉と存 各様江申達
候由相演候處 職役三郎左衛門答二 御家来

中御願筋いさし御評議最中二付願之通
 可被遂御許容段八御請合不相成候
 其上公儀ヨリ一應御沙汰下り候儀
 役人衆不御差出候様申出も相成間敷儀と申
 事二付於其段者須佐颯々敷段御聞込二
 付被差出儀二而可有御座候へ者御家来中
 穩便之段被仰出候時者出張被差止二而
 茂可有御座哉と申達候処三郎左衛門方二
 此度御役人衆被差出候所如何様之訳
 之儀申出可相成段茂不相知儀二候得者
 左様此儀者御同列中余程之御入はまり二而
 無之而者御取計も不相成儀二而可有之由
 申達候処舍人申候者申合趣茂御座候八、
 又々可申承候由二付御大惣之儀二御座候へ八
 御為宜敷様得と被仰合候様二と相演
 罷下候事
 其後大組・御手廻月番前之四人召出之

【316頁】

中御願筋 いまた御評議最中二付 願之通
 可被遂 御許容段八御請合不相成候 其上
 公儀ヨリ一應御沙汰下り候儀 役人衆不
 御差出候様 申出も相成間敷儀と申
 事二付 於其段者 須佐颯々敷段 御聞込二
 付 被差出儀二而 可有御座候へ者 御家来中
 穩便之段被仰出候時者 出張被差止二而
 茂可有御座哉と申達候処 三郎左衛門方二
 此度御役人衆被差出候所 如何様之訳

【317頁】

二而被差出候段茂 不相知儀二候得者 左様
 之儀申出可相成段茂 不着之由二付
 此儀者御同列中 余程之御入はまり二而
 無之而者 御取計も不相成儀二而可有之由
 申達候処 舍人申候者 申合趣茂御座候八、
 又々可申承候由二付 御大惣之儀二御座候へ八
 御為宜敷様 得と被仰合候様二と相演
 罷下候事
 其後大組・御手廻月番前之四人召出之

沙汰有之候者、御家老中列座二而
 申聞せ有之候者、先刻申出之趣、願之筋
 被遂、御許容候段、各請合茂不相成
 且、公儀御役人衆被差出候所、御留メ仕
 候儀も請合者不相成候得共、御申出之趣
 可成程者、取計見可申哉、及御相談候、左候八、
 先之御演説之趣、御書記シ、御持參候様
 と之授ケ二付、一統可申合由二而、罷下申合
 候處、前断御願筋、御請合之御落着
 二而無之而者、諸半間々々決而折合申
 間敷、然者、演説書相調差出候段も無詮
 事と衆評致一決、前之四人勘場罷
 出其段申入候事
 七月廿日、御用所ヨリ申来者
 此度御藏元兩人、松野文右衛門殿、就御用
 愛許被罷越候所、此中御内輪江願書
 被差出候連名人數之内、爰元居合之
 衆中末々迄、於大濫寺被致相對度と之

【318頁】

沙汰有之これあり 罷出候處 御家老中列座二而
 申聞せ有之候者は 先刻申出之趣 願之筋
 被遂しきよまじりけれ 御許容候段 各請合茂不相成
 且 公儀御役人衆被差出候所 御留メ仕
 候儀も請合者不相成候得共 御申出之趣
 可成程者 取計見可申哉 及御相談候 左候八、
 先之御演説之趣 御書記シ 御持參候様
 と之授ケ二付 一統可申合由二而 罷下申合
 候處 前断御願筋 御請合之御落着

【319頁】

二而無之而者てこれなくては 諸半間々々決而折合申
 間敷 然者しからは 演説書相調差出候段も無詮
 事と衆評致一決 前之四人勘場罷
 出其段申入候事
 七月廿日 御用所ヨリ申来者
 此度御藏元兩人 松野文右衛門殿 就御用
 愛許被罷越候所 此中御内輪江願書
 被差出候連名人數之内 爰元居合之
 衆中末々迄 於大濫寺被致相對度と之

此之条只今大蘆寺衆寮迄穩便之
心得を以て可被相揃候事

七月廿日

右之通申来候二付 大蘆寺衆寮迄
諸半間相揃候上 面着方名前控取注¹相成
本堂二而 刺賀治部左衛門殿 此度公儀役人衆
一應相對退座之上 松野文右衛門殿出座二而
被申聞候者 御領内颯々敷段 達
上聴注²候 右二付御目附・物頭出張被仰付候

身柄只今之役筋ヨリ 当郡代官注³座江
被成御雇被差出と之御事二付 今日致
着候 身柄今般被差出候所ハ 深キ
御思召之旨被成御座候歟と奉考候故
出足前 若狭殿注⁴江 萩御職 申達之趣八御目附
物頭被差出候処者 身柄ヨリ可致注進候間
其上二而須佐入込相成候様 夫迄八宇田
駅二控居申候様申出候處 聞濟シ相成
孰茂彼駅二控居申候 右御役人衆 当地

【320頁】

儀二候条 只今 大蘆寺衆寮迄穩便之
心得を以て 可被相揃候事

七月廿日

右之通申来候二付 大蘆寺衆寮迄
諸半間相揃候上 面着方名前控取注¹相成
本堂二而 刺賀治部左衛門殿 此度公儀役人衆
一應相對退座之上 松野文右衛門殿出座二而
被申聞候者 御領内颯々敷段 達
上聴注²候 右二付御目附・物頭出張被仰付候

【321頁】

身柄只今之役筋ヨリ 当郡代官注³座江
被成御雇被差出と之御事二付 今日致
着候 身柄今般被差出候所ハ 深キ
御思召之旨被成御座候歟と奉考候故
出足前 若狭殿注⁴江 萩御職 申達之趣八御目附
物頭被差出候処者 身柄ヨリ可致注進候間
其上二而須佐入込相成候様 夫迄八宇田
駅二控居申候様申出候處 聞濟シ相成
孰茂彼駅二控居申候 右御役人衆 当地

*1 面着方名前控取 = 会議の前に出席者芳名の控えを取ることか？

*2 達上聞 = 藩主の耳に入る。藩主へ報告された。

*3 当郡代官座 = 奥阿武宰判の代官。

*4 若狭殿 = 当時の萩藩当職は厚狭毛利家毛利就宣。実は右田毛利内匠広定三男。乙之進、若狭、初師賢。文化元甲子年八月十三日卒。43才。

引受あかしく丹後様御為如何、
 一應退座之願筋不尋常儀二付
 筋反古二不相成段 文右衛門御請合申候 御願
 出御人数之内 在郷ヨリ御出浮衆も有之候由
 一應御引取相成 穩便二被為作 可然存候
 御為筋と候而茂 御騷動二相成候而者
 却而 御不為二相成儀二候得者 得と御勤
 弁有之度儀二存候 御一統被仰合候様と

申候一應退座之願筋不尋常儀二付
 筋反古二不相成段 文右衛門御請合申候
 御願出御人数之内 在郷ヨリ御出浮衆も有之候由
 一應御引取相成 穩便二被為作 可然存候
 御為筋と候而茂 御騷動二相成候而者
 却而 御不為二相成儀二候得者 得と御勤
 弁有之度儀二存候 御一統被仰合候様と

【322頁】

御引受相成候而者 丹後様注1御為如何
 可有之哉 御氣遣二奉存候 各方御願之
 筋茂 御當家御為筋之儀二候得者
 反古二不相成段 文右衛門御請合申候 御願
 出御人数之内 在郷ヨリ御出浮衆も有之候由
 一應御引取相成 穩便二被為作 可然存候
 御為筋と候而茂 御騷動二相成候而者
 却而 御不為二相成儀二候得者 得と御勤
 弁有之度儀二存候 御一統被仰合候様と

【323頁】

被申述 一應退座二付 いつ連も申合せ
 候処 此度之願筋不尋常儀二付
 落着を極 罷出候事二御座候処 願之
 筋反古二不相成と之被申方 其上
 公儀御聞込二而 御目附衆・物頭衆 被
 差出候處 先達而 文右衛門殿被差出所八
 大守様深キ 思召被為在候と之 文右衛門殿
 移二而候得者 此上何かと申候而者
 御不為之儀と衆評相決シ 末々迄茂

*1 丹後様 = 此処では益田就恭（始兼恭、熊次郎、喜次郎、越中、安房、丹後）の事と思われる。彼は寛政12年12月23日隠居。文化元年11月18日卒。41才。養子の房清も丹後であるが、寛政12年5月29日9才で益田家へ入家、享和2年事件当時は未だ11才の幼君で未だ須佐に来ていなかった。

右宮ノ事ヲ孰モ文右衛門殿ニ申候筋
 令會得候然処上兩組ノ在既組子
 違却有之儀二付一日夜付屬難相成
 申者七有之儀尤之儀二付文右衛門殿江
 及内談候処於其段者尤之儀二候得共
 是を堪忍不仕而者忠節之道ニ外レ
 申候然上者宿意を以古失小過など
 尋求候而之咎事等全ク無之様頭々
 支配々々江可申間由相談相濟兩組

末々之もの江茂其由申間孰茂落着
 仕今夜ヨリ支度次第在郷引取其外
 諸中間之儀も在郷ヨリ出浮之者八孰も
 帰宿ニテ落着二相成候故其段文右衛門殿江
 申達候處別而被致太慶各方御為筋二
 おいて御落着御尤之儀二存候其段
 御書記可被下由被申候二付申合左之通
 相調文右衛門殿入内見尤之由被申儀二付
 請書相調差出候事

【324頁】

相定メ候處あひさだ 孰モ文右衛門殿被申間候筋いすれ
 令會得候えとくせしめ 然処しかるところ 上兩組注¹之儀この儀 頭と組子
 違却有之儀二付これあり 一同茂附屬難相成あいなりがたし
 由申者も有之これあり 其段尤之儀二付もつとも 文右衛門殿江
 及内談候処なれたたあまひ 於其段者そのだんにおいて 尤之儀二候得共もつとも
 是を堪忍不仕而者つかまつらずては 忠節之道ニ外レ
 申候しるるまへ 然上者しかるまへ 宿意を以しころえなほ 古失小過など
 尋求候而之咎事等たずぬるまへ 全ク無之様これなき 頭々
 支配々々江可申間由たすぬるまへ 相談相濟あひすみ 兩組

【325頁】

末々之もの江茂其由申間へち 孰茂落着いすれち
 仕今夜ヨリ支度次第在郷引取もつとも 其外
 諸中間之儀もいすれ 在郷ヨリ出浮之者八いすれ 孰も
 帰宿ニテ落着二相成候故あひあひ 其段文右衛門殿江
 申達候處もつとも 別而被致太慶たげいたされ 各方御為筋二あのおがた
 おいて御落着べつして 御尤之儀二存候おのおがた 其段
 御書記可被下由被申候二付かきしるしたるべき 申合左之通
 相調あひあひ 文右衛門殿入内見なひんにいれ 尤之由被申儀二付
 請書うけしる 相調差出候事あひあひ

*1 上兩組 = 市丸組と宇谷組。

此度
 御用ニ付先出浮書且形為節
 之故ニ付先出候事ヲ執事迄之旨
 在仁今出候者古宿元引取
 穩便ニ仕居候事
 七月廿日 各中

其後出座願出惣人数揃之上右之
 書立首席ヨリ致引渡被對當家厚
 思召之旨忝奉存候 孰茂一同二御禮
 申候由相述候處 文右衛門殿被申候者
 いつ連も早速御落着被下候段 身柄ヨリ
 茂御礼申候由相答候二付 何分二も
 旦那為筋 宜様御取計 偏二致御頼
 候由申達候處 御尤之儀委曲致承知
 候由被相述 追々彼寺引取候事
 付り 文右衛門殿被申候者 今日八御當家
 至而御大事之儀二付 御先靈様
 於御菩提寺 申達候 明日又

【326頁】

此度
 御用二付 爰元御出浮二而 旦那注²為筋
 之儀二付 被仰聞候趣 奉得其旨
 在郷ヨリ罷出候者共 宿元引取
 穩便ニ仕居候事
 七月廿日 各中

【327頁】

其後 出座願出惣人数揃之上 右之
 書立首席ヨリ 致引渡 被對當家 厚
 思召之旨 忝奉存候 孰茂一同二御禮
 申候由相述候處 文右衛門殿被申候者
 いつ連も早速御落着被下候段 身柄ヨリ
 茂御礼申候由相答候二付 何分二も
 旦那為筋 宜様御取計 偏二致御頼
 候由申達候處 御尤之儀委曲致承知
 候由被相述 追々彼寺引取候事
 付り 文右衛門殿被申候者 今日八御當家
 至而御大事之儀二付 御先靈様
 於御菩提寺 申達候 明日又

*2 旦那 = 益田家臣は益田家当主を旦那と呼んだ。益田房清のこと。

御家老衆を始 御一統申合儀も
 有之候 惣御人数連八御多人数
 颯々敷有之候間 被仰合御田屋注¹
 御出候様二と被申候事
 付り 文右衛門殿旅宿江大組・御手廻
 月番兩人宛 為惣代見廻候事
 一 七月廿一日 職座ヨリ来手紙左之通
 此度御内輪江願出 連名御人数之内
 御兩人 松野文右衛門殿 於
 御殿にて合執有之候 其段彼方
 分限内意申達 被置 孰成共被申合
 御兩人只今勘場可有御出候事
 右之通申来候二付 栗山藤蔵・波田太郎右衛門
 勘場二罷出 當役中一同二
 御殿罷出 刺賀治部左衛門殿・林仁左衛門殿・
 熊谷彦左衛門殿・當役中・御目附 揃之上
 文右衛門殿入来二而被申候者 此度之趣 早速
 穩便二事治り 御家之御為可然儀二

【328頁】

【329頁】

*1 御田屋 = 益田本家屋敷のこと。その一角に勘場があった。

奉存候御家之奉祝以熨斗頂戴可
仕由被申 文右衛門殿 御頼入衆 當役中 其外
石席を以 御熨斗頂戴相濟 文右衛門殿ヨリ
一統江被申聞候演説左之通

口演覚

一 御家中近年区々之儀有之 不穩便
風聞 終二者此度躰之騒動二及ひ
御家之御為不可然 今般拙者被差
出候處 一統速二和同二至り 大悦不

過之候 歸萩之上 早速可及言上候
不能申 候得共 此上 弥御一統之御慎
肝要二候 下々二至迄 於向々も御教
尋有之度候 纒之事致出来候而茂
此中ヨリ之意氣有之ヨリと 世上之
風評可被難防歟 小不惡者大謀を
乱ル共可謂哉 いつ連も御心得第一二被存候
二付 役外二御存寄を申述置事二候
偏二御當家之御為第一二止り候 吳々

【330頁】

奉存候 御家を奉祝 御熨斗頂戴可
仕由被申 文右衛門殿 御頼入衆 當役中 其外
石席を以 御熨斗頂戴相濟 文右衛門殿ヨリ
一統江被申聞候演説左之通

口演覚

一 御家中近年区々之儀有之 不穩便
風聞 終二者此度躰之騒動二及ひ
御家之御為不可然 今般拙者被差
出候處 一統速二和同二至り 大悦不

【331頁】

過之候 歸萩之上 早速可及言上候
不能申 候得共 此上 弥御一統之御慎
肝要二候 下々二至迄 於向々も御教
尋有之度候 纒之事致出来候而茂
此中ヨリ之意氣有之ヨリと 世上之
風評可被難防歟 小不惡者大謀を
乱ル共可謂哉 いつ連も御心得第一二被存候
二付 役外二御存寄を申述置事二候
偏二御當家之御為第一二止り候 吳々

西郡赤之者之書
七月廿一日
相野文右

御勤弁可有之候事

御家老中

其外御衆中

右之通被申聞 尚三郎左衛門江者 為御心得
乍推参存付候二付 申達候由二而 書立物
被渡候 是者昨夜於大瀧寺 尊有之候
古失小過之咎事等者不可然と之書立物と
相見候事

右申渡有之候処 三郎左衛門申候者 此度之儀
身柄引受二而御座候処 早速穩便二相濟
大慶仕候由申述候 藤蔵申候者 被於
旦那候而茂 家来中一和之儀者肝要
之儀と被存 此中被申聞筋も御座候へ共
此度之参懸り 無是非次第二御座候
然処 被仰聞之筋二而 和同仕候へ八 御帰萩
之上 何分旦那為 宜様御取計御頼仕候由
相述 文右衛門殿退去二付 孰茂罷下候事

【332頁】

御勤弁可有之候事

七月廿一日

松野文右衛門

御家老中

其外御衆中

右之通被申聞 尚三郎左衛門江者 為御心得
乍推参存付候二付 申達候由二而 書立物
被渡候 是者昨夜於大瀧寺 尊有之候
古失小過之咎事等者不可然と之書立物と
相見候事

【333頁】

右申渡有之候処 三郎左衛門申候者 此度之儀
身柄引受二而御座候処 早速穩便二相濟
大慶仕候由申述候 藤蔵申候者 被於
旦那候而茂 家来中一和之儀者肝要
之儀と被存 此中被申聞筋も御座候へ共
此度之参懸り 無是非次第二御座候
然処 被仰聞之筋二而 和同仕候へ八 御帰萩
之上 何分旦那為 宜様御取計御頼仕候由
相述 文右衛門殿退去二付 孰茂罷下候事

一 前断 文右衛門殿演説之寫 職座ヨリ藤蔵

去々有之者紙之書

一 七月廿一日 昨日文右衛門殿申聞之演説書

諸向江相達候儀 頭々支配々々ヨリ申聞せ

有之筋共二而者無御座哉と職座江

致問出候処 御願出衆中江被仰聞儀二候へ八

各方ヨリ被伝達 可然由二付 藤蔵 太郎左衛門

有田八右衛門申合せ 御膳夫・上両組・御細工人

御船頭・御馬屋・御臺所中間迄 不洩様

書立写を申聞せ候事

一 昨日之趣 萩同志中江飛札を以知せ候

今日昼時分仕出仕候事

【334頁】

前断 文右衛門殿演説之寫 職座ヨリ藤蔵

太郎左衛門迄 差越候事

七月廿一日 昨日文右衛門殿申聞之演説書

諸向江相達候儀 頭々支配々々ヨリ申聞せ

有之筋共二而者無御座哉と職座江

致問出候処 御願出衆中江被仰聞儀二候へ八

各方ヨリ被伝達 可然由二付 藤蔵 太郎左衛門

有田八右衛門申合せ 御膳夫・上両組・御細工人

御船頭・御馬屋・御臺所中間迄 不洩様

【335頁】

書立写を申聞せ候事

一 昨日之趣 萩同志中江飛札を以知せ候

今日昼時分仕出仕候事

【完】